GENTOSHA
OUTLAW
BUNKO

自殺されちゃった僕

吉永嘉明

幻冬舎アウトロー文庫

GENTOSHA OUTLAW BUNKO

自殺されちゃった僕

吉 永 嘉 明

幻冬舎アウトロー文庫

自殺されちゃった僕

２００３年９月28日。
妻、巽早紀（たつみさき）が亡くなった。

２００１年６月17日。
僕の仕事仲間で編集者であり、
たぶん日本一のサブカルライターだった青山正明（あおやままさあき）さんが亡くなった。

１９９８年５月10日。
僕と早紀の友人であり仕事仲間であった、
熱狂的なファンをもつ異色の漫画家、ねこぢるが亡くなった。

共通しているのは、みんな僕のかけがえのない人間であったということ。
気むずかしいけれど、とても魅力的で、豊かな才能があったということ。
そして——。

自殺したということ。

いま日本では、年間で3万4千人以上の自殺者がいる。

3万4千人の悲しみだけではない。

自殺という死に方が、そのまわりにいる親兄弟、恋人、友人、仕事仲間をふくめて、死の悲しみを増長させる。

その数は30万、50万――いや、１００万人を超す悲劇の輪となって増幅していく。

立ち直るには、僕が自分で書くしかないと思った。

単に悲しみに浸るのではなく、この悲しみを少しでも意味のあるものにしなくてはいけないと思った。そうでないと僕は悲しみに溺（おぼ）れて救いようがなくなってしまう。悲しみから永遠に解放されなくなってしまう。だから――いや、そんなキレイごとではない。

とにかく、僕に起こったことと、受けたショックを吐き出したいのだ。そうでもしないと気が変になってしまう。すでに僕の心は壊れかかっている。書くというショック療法で、僕は正気を取り戻したい。妻はもう絶対戻ってこない。もう二度と会えない。そんなこと、認められない！　認められっこない。だから僕は書くんだ。

自殺する人は、身近な人間がどういうダメージを受けるか、そのことを考えないのだろうか。自分のつらさで、せいいっぱいなのか。

確かに、とてもつらかったのだろう。でも、僕の妻やねこぢるは、プライドのために死ん

でいるところがある。

「プライドに死す」――一見かっこいいようだが、こんなに自分勝手な行為もない。彼らは、死ぬほうが楽だと思ったのだろう。楽になりたかったのだろう。

僕は今、寂しくて悲しくて気が変になりそうだよ。

でも僕は、生きるんだよ。

この苦しみが、自ら死んだ妻・早紀にわかるかな。

死ぬより生きるほうがつらいかもしれない。

でも生きるんだよ。

死んじゃうのは、逃げてるよ。

多くの人は逃げないで、生きにくい世の中を必死でサヴァイヴしてるんだよ。

死んだらほんとうに楽になれるのかな。僕は疑問だ。死後の世界のことなんか、誰にもわからない。ただ、はっきりしているのは、生きている僕とはもう絶対に触れ合えない、ということだ。「自ら死ぬ権利」を主張する人もいるだろう。僕はそういう人を否定はしない。

ただ、「死にたい」と思ってる人が、「やっぱり生きよう」と思い直すことを望んでいる。

だから僕は、本書を書く。理屈でなく感情で書く。

理に拠り過ぎると悲観的になる時世だから、エモーションで「生きよう」と主張したい。

だって、死なれると、ほんとうにつらいんだ。
早紀、僕は死ぬほどつらいんだよ。君は優しい人間だったじゃないか。僕のつらさがわからないの？

いずれにせよ、死んだ者は二度と返らない。
とりかえしがつかない。
どうしようもない。
でも、僕はまだ全然割り切れない。だから……。
3人の自殺の真実と、残された者たちの悲しみと後悔を、偽りなく書こう。
自殺した側の理由を探るよりも、自殺されてしまった者＝この世に残された側の視点で、自殺を考えてみる。
二度と僕のような、〝自殺されてしまった人間〟を増やさないためにも。
書くことは、僕が生きていくために、唯一残された道なのだ。

目次

第1章 妻・早紀のことⅠ

右脳型と左脳型 16
出会い 19
王さま 23
サイケデリック&トランス 26
「音はまり」の会 28
世の中バカばかり 30
バイ・セクシャル 35
愛人体質 41

第2章　ねこぢるの思い出

出会い　49
武装願望　52
直観の閃き　55
トリップ　59
私生活　62
嫌いなものは嫌い　66
死は恐くない　68
ブーム到来　71
コラボレーション　74
天然アシッド　76
リキッドルームの思い出　78

修羅場　80
死に顔　85
「死ぬる人」と「生きる人」　87
殺すか、死ぬか　88
レイヴの思い出　91

第3章　青山正明の思い出

慶應ボーイ　96
幻のキャンパス・マガジン　98
海外旅行雑誌の創刊　100
仕事に燃えた日々　102
バブル崩壊、失速　105
『危ない1号』の創刊　108

ロリコンとマザコン　110
大麻取締法違反　112
悟りの境地　115
ひきこもる日々　118
借金・離婚・鬱病　121
嘘をつく人　123
死に顔　127

第4章　妻・早紀のこと　II

鬱とドラッグの日々　134
結婚　136
安楽死願望　139
私は死ねるのよ　142

理解されたい　181
2DK家賃17万円　184
情緒不安定　186
友人たち　190
友達訪ね歩き旅　194
仕事に依存する　196
ループ　199
バッド・トリップ　202
どうして死んじゃいけないの？　204
熱中できるもの　209
早紀は帰ってくる　211
『THE AGE OF LOVE』　214
これから　217

大切な人に死なれるということ　221
文庫版あとがきにかえて　224
解説　春日武彦　229

第1章　妻・早紀のこと　I

右脳型と左脳型

僕、吉永嘉明の本業は、フリーの編集者でありライターである。

もっとも、妻の死によるダメージで、いまでは本業のほうは手つかずで、食うや食わずの身になり、困り果てて週に3日間、近所のコンビニでアルバイトをして食いつないでいる。

コンビニの経営者は夫婦で働いていた。従業員は皆20歳前後のアルバイトだった。

アルバイトの面接で僕は、「作家志望なんですが、文筆だけでは、いま食べていけないのです」と率直に言った。

コンビニが僕の本業ではないのです、というのは通しておきたかった。

「あくまでも僕の本業はもの書きですが……」

そう言うと、ありがたいことに、店のオーナーは採用してくれた。

「あなた、大卒なんだ」——オーナーが履歴書を見て、そう言った。

アルバイトの青年たちは皆、フリーターで、大卒は僕だけだった。

週に店に立つ日数を決め、原稿の締め切りが重なったときは、なるべく早めに言えば、キ

ャンセルもできる――そういう配慮をしてくれた。

朝8時から夕方5時まで、休憩をのぞき、1日8時間労働である。客商売は初めてで、レジを打つのも初めてのことだった。

コンビニでレジに立つとき、華美な服は控えるように、とオーナーから言われた。普段それほど派手な服を着ているわけでもなく、むしろ地味な服なので、フリーの身で生きてきた僕でも別に制約は苦にはならなかった。

もっともひとつだけ、オーナーの忠告を聞き入れられなかったことがある。

「その髪は、どうにかならんかね」

僕は長髪にこだわりはないけれど、死んだ妻がこだわっていた。

早紀は僕が髪を伸ばしているのが好きだった。暑くなって切ろうとすると、早紀は、「切っちゃだめ。あなたは伸ばしたほうが似合うわ」と言っていた。

早紀が亡くなってわかったことがある。

僕が早紀に合わせていた部分がいろいろあったという事実だ。

妻が亡くなってからも、僕は妻が好きだったことを変えずにいた。

こうして僕がまた手記を書こうと思うようになったのも、早紀が僕に生前、こんなことを

言っていたからだ。

「あなたはどんどん仕事をしなさい。あなたはまわりにいる仲間とくらべて、インテリ型じゃない。直観力と感性がある、〝右脳型〟なのよ。だから、そっちで勝負しなさいよ。私はあなたの個性を信じてる」

そうアドバイスする早紀自身が左脳型だった。

努力して勉強して一番になる娘で、プライドが高くて、みんながバカに見える。なにか自分ができないものをもってる人でなければ関心をもたなかった。

僕は右脳気質で、ヴィジュアル的に物事を見る習慣があり、音楽を聴く耳が発達している。それは秀才の早紀にはないもので、だからこそ早紀は僕に惹かれた。

ところがいっしょになったらなったで、僕の右脳的な部分を好いた早紀でも、実際の生活では左脳のような理知的な感性が優位じゃないと、文句を言ってきた。

「なんで、もう少し普通にできないの」

僕の極端な性格を早紀は仕事の上では寛容だったが、普段の生活ではきちんと批判してくる。

僕は早紀が、「もっと普通にやってちょうだい」と文句を言い出すと、

「普通じゃないから、早紀は僕のことを好きになったんだろ。普通じゃないのを受け止めて

ほしいよ」と反論した。
するとと早紀が言い返す。
「やっぱり、普通じゃなきゃだめよ」
——思えば、僕と早紀は、反発しながらも惹かれあう、共依存のような間柄だった。それはそれでとてもうまく行っていた。少なくとも僕はそう思っていた。
早紀はいつも僕のことをこんなふうに言っていた。
「ＡＤＨＤ（注意欠陥多動性障害）で鬱病持ちで花粉症でアトピーで化学物質過敏症で自律神経失調症でとっても感じやすくダメージを受けやすい——そんなあなたと暮らすのは、飼育の難しいレアでマニアックな動物を飼うようなものだわ」
非難しているようでその実、自分のマニアぶりを誇っているようでもあった。早紀は、いろいろな意味でマニアックだった。平凡なものを嫌う人だった。

出会い

１９９６年、僕と巽早紀は出会った。
僕は遅れてきたバブルというべき景気に見舞われていた。

バブル経済は1988年をピークに91年に崩壊した。余った金が不動産と株に流れ込み、日本中が浮かれ、金儲けに熱くなり、誰もが億万長者になれる予感を抱き、実際に周囲にそうなった者もいた。

僕の体験した出版バブルとは、僕個人に起きたものであった。世のバブル時代から遅れること3年、1994年のときだった。

僕は、1984年に大学を出てから、出版界の隅々でちまちまやっていた。レディース・コミックの写植貼り、美容業界誌の取材記者、成人雑誌の編集。そして、ある雑誌の仕事で青山正明さんと知り合い、89年に青山さんが仕切る海外旅行雑誌『エキセントリック』編集部で仕事をするようになった。

それと並行しながら、大学受験の情報誌やリクルート・マガジンの編集もチームで受けてやるようになり、『別冊宝島』(宝島社)でも書くようになった。

儲かりだしたのは青山さんと一緒に『別冊宝島・タイ読本』『別冊宝島・裏ハワイ読本』(以上、宝島社)『危ない1号』『アダルトグッズ完全使用マニュアル』(以上、データハウス)などを作るようになってからだ。

僕らが作った本はかなり売れ、編集印税が入るようになった。単行本の編集やゴースト・ライターもやったし、原稿依頼、本の編集依頼はすべて引き受けた。僕もまだ30歳になるか

ならないかで、老けるには早すぎる、怖いもの知らずだった。徹夜も平気で、仕事をしているときがとても楽しく、充実していた。

なかでも印象に残っているのは、95、96、97年、『危ない1号』をやっていたときだろう。『危ない1号』はデータハウスが版元となり、青山さんが編集長、僕が副編集長として、95年から1年に1冊のペースで刊行されていた。

自ら「鬼畜系」、「妄想にタブーなし」を標榜(ひょうぼう)し、特集と連載で構成されるムック本だった。特集テーマはドラッグ、鬼畜系カルチャー入門（殺人&死体、変態、フリークス、盗聴等々）、快感など。かなりグロテスクな部分もあり、良識派の読者からはひんしゅくをかったが、意外なことに、読者アンケートの半分は女性だった。

ドラッグ特集の創刊号が出た頃には読者から、「覚醒剤はどこに行けば買えるんですか?」などという身も蓋(ふた)もない電話がかかってきたり、覚醒剤を打ちパニックになった女性から、「どうしたらいいんですかっ!?」などと電話を受けたりもしていた。

『危ない1号』第1巻から第3巻までは10万部を超え、出版界にとっても僕にとっても、サブ・カルチャーのバブル時代となった。

奇(く)しくもねこぢる、青山さん、僕の妻となる巽早紀、そして僕の4人は皆、揃(そろ)って『危ない1号』で原稿を書いていた。

世間を騒然とさせたあの『完全自殺マニュアル』（93年・太田出版）の著者である鶴見済（つるみわたる）君も、『RAVE TRAVELLER 踊る旅人』（97年・同前）の著者でトランスのDJもする清野栄一（せいのえいいち）君も、『危ない1号』で書いていた。

青山正明さんの鬱がきつくなって第2巻で編集長を降りてからは、僕が2代目編集長となり、第3巻を編集したが、僕も第3巻で編集長を降り、第4巻はデータハウスのほうで独自に作った。

僕が『危ない1号』を降りたのは、危ないものに関心がなくなってきたことと、読者のほうが濃くなっていた、ということだった。濃くなった、というのは、作り手の僕らよりも読者のほうが過激になっていた、ということ。

テレビを見ていて、神戸で少年の頭を校門の上に置いた例の酒鬼薔薇聖斗が友人にあてた年賀状が映しだされたことがあった。

そこには『危ない1号』第1巻のイラストの模写が描かれていた。

僕らがシャレと商売で編集している本を、覚醒剤中毒者や酒鬼薔薇聖斗が目を輝かせて読んでいた。

そう考えると、とても責任が持てないという気持ちになった——。

巽早紀と親しくなったのは、96年、『別冊宝島・元気が出るクスリ』の仕事を一緒にやったのがきっかけだった。

彼女は学芸大を卒業したものの、教師になるつもりもなく、教科書出版会社に就職した。偏差値が高く、かつマニアックな性格の彼女は、もっと他の編集がしたいと、A社という小さな出版社の編集者に転職した。

A社の本は、バブル時代に局地的に跋扈（ばっこ）した、先鋭的な「スカシ系」というやつで、偏差値の高いマニアックな（フェティッシュと言ってもいい）本作りが特徴だった。マニアックな編集者が作りたい本を情熱的に作るといったスタイルで、ともすればあまり一般的とはいえないラインナップが多かった。だからこそ、大衆性を嫌悪する早紀には合っていたのだろう。

当時、フリーで『別冊宝島』の仕事をしていた僕が、巽早紀と組んで1章仕上げたことがあった。

早紀は当時、A社に所属しつつ、アルバイトでライターの仕事を始めていた。

巽早紀というのは彼女のペンネームで、このとき『元気が出るクスリ』で初めて使ったはずだ。

早紀は本当は30歳なのに女子大生のふりをして、まだつき合う前の僕と、回春剤・媚薬の「モルモット対談」なんかしたりしている。

吉永　女性向けの回春剤で「締まりすぎて危険」ってやつ、あったよね。119に連絡しやすいように電話の近くで使用しよう、とか書いてあるヤツ。

早紀　「婦宝」ですね。私はビビッて使えませんでした。ごめんなさーい（笑）。

吉永　ところで、相手には、こっそり盛ったりしたんでしょ。媚薬を一服盛ったことは、あとで教えたの？

早紀　そんなこと、口が裂けても言えないもーん。（同書より）

早紀は、かなり〝ブリッ子〟だった。

この仕事の後、急速に仲がよくなり、翌年の97年になると、『危ない1号』第3巻の編集を一人で抱えていた僕は、仕事が終わると、早紀の住むワンルームマンションに帰るようになっていた。

週末には一緒に、まだ黎明期のトランス系のパーティに行ったりもした。不良外人ばっかりの、ブラックライトしかない真っ暗なクラブでダンスすることは、オヤジとばっかりつき合ってきた早紀には新鮮な体験だったようだ。

当時の早紀はとても楽しそうにみえた。僕もとても楽しかった。すべてが生き生きとしていた。世の中はバブルが崩壊して大不況が始まっていたのに、僕たちはまだバブルの余韻に浸っていたのだ。

やがて正式に「一緒に住もう」ということになり、浅草橋の新築マンションに入った。家賃17万円という、僕にはちょっと贅沢な部屋だったけれど、早紀が強く望んだのでそこに決めた。当時はまだバブルのころの貯金もあり、『危ない1号』も売れていたのでなんとかなるさ、と思ったのだった。

かつて、ねこぢるが僕にこんなことを聞いた。

「二人だけのとき、なんて言い合ってるの？」

僕は正直に「〝早紀〟と〝王さま〟だよ」と答えた。

そしたらねこぢるは「え――、おおさまー!?」と笑いだした。

そして「ちょっと変だよ」と言った。

そう、早紀は二人だけの時、僕を「王さま」と呼んでいた。このマンションは早紀のお城

だった。早紀は、ある意味、お姫さまだったのだ。

「王さま」という呼び名には、彼女の僕に依存したい願望が込められていたのかもしれない。

サイケデリック＆トランス

妻の「巽早紀」としての仕事は、『別冊宝島』や『危ない1号』、そしてタトゥーや麻薬が誌面を彩る不良雑誌『BURST』（コアマガジン）の中で、テクノ＆トランス・ミュージックをテーマにした連載を、僕と一緒に書いていた。

また、2002年にはステュディオ・パラボリカという出版社から『2－:＋／特集ドラッグ』という黄色いビニールの装丁がおしゃれでグラフィックなムック本をひとりで編集した。

この本は、僕にとっても思い出深い一冊だ。

僕も同じ時期、『サイケデリック＆トランス』（コアマガジン）という、デジタル・サイケ・アートを特集した、見てハマるヴィジュアル・ムックを編集した。特殊な3Dメガネの付いたおもちゃ感覚の本だ。

夏、お台場にデートに出かけたとき、ヴィレッジヴァンガードというグッズと書籍を扱う

サブカル系の書店の前を通った。「ちょっとのぞいて行こうか」。僕らは店に入った。すると、『2ー:+/……』と『サイケ……』が2冊並んで平積みになっていた。

それを見て早紀は、「夫婦お揃いね」と嬉しがっていた。僕たちの子どものような本だった。

早紀が作った『2ー:+/ドラッグ特集』という本は、いまも僕の手元に大切に保管している。

黄色や黄緑色、茶色の貝殻が拡大され、光線が曼荼羅（まんだら）のようになって、カラー・ページを飾っている。

僕が作った『サイケデリック&トランス』同様にサイケデリックな作りは、ドラッグの影響だった。LSDのトリップで見た極彩色と無限に拡大されていく美だ。

ヘロイン、コカイン、大麻、アシッド、向精神薬。

人間の感情を左右するあらゆるドラッグがこの本に網羅されている。

ドラッグに関する専門書の紹介から、ドラッグの影響を受けたレコードの紹介——たとえば、ビートルズの『リヴォルヴァー』におさめられたジョン・レノンの「トゥモロー・ネヴァー・ノウズ」が、ジョンが一時期、1日3食とるかのようにLSDを体験し、そのときの幻覚をもとに作った曲である、などと解説をしている。

ドラッグとは何か、ドラッグの影響下にあるカルチャーとはどんなものか、ということが初心者向けに事細かに解説され、女性らしい美的センスにあふれた本に仕上がっている。

イリーガル・ドラッグの体験に乏しい早紀はきっと、僕がいたからこの本を作ったんだと思う。僕の喋(しゃべ)りだけで20ページ近く組んでみたり、僕の友人のライターに原稿を発注したりしている。

図版はすべて家にある、僕が買い集めたものだけで構成されていた。時間もお金もかけずによく作ったと思う。

この本が早紀が丸ごと編集した最後の本となった。〈編集後記〉の下には、女性らしく、こんな一文が載っている。

〈特殊加工のカバーです。どうぞやさしく扱ってくださいね。〉

「音はまり」の会

早紀と僕、そして青山正明さん、ねこぢる。

3人の自殺者と僕は、同じ時期に似たような環境にいた。

みんな出版界(特にサブ・カルチャー周辺)でしのぎ、94年ごろから日本でも始まった黎

明期のレイヴ・カルチャーにまみれたことも共通している。
レイヴとは、野外で自然と繋がりながら、音楽を集団で踊ることを意味する。
無心になって踊りあかすことで、宗教的、精神的な境地に達したり、無我の境地に至り、ナチュラル・トリップしたりする。
作家の清野栄一君は、レイヴをめぐる自らの経験をもとにしたノンフィクション『RAVE TRAVELLER 踊る旅人』を書き、小説『デッドエンド・スカイ』で、第81回文學界新人賞を受賞している。
レイヴ・カルチャーは、若者たちの間でひとつの価値観を成立させるまでに至った。
代々木公園で集団になって踊りあかす。
僕は毎週のようにトランス系のクラブに通い、LSDを摂取し、気がふれたかのように踊りあかした。滝のように汗をかくので、水を大量に飲む。結果、一晩で水代が1万円に達するときもあった。とても極端な遊び方をしていた。
僕と早紀、青山さんもねこぢるも、テクノという電子音楽や、テクノの中でも特にサイケデリック・トランスという、ことさら薬物に耽溺したダンス・ミュージックにハマっていた。
同じテクノを聴くのでも個性は出るもので、僕と巽早紀はガンガン踊るタイプだったが、

ねこぢるや青山さんは踊らず、座して瞑目(めいもく)し、聴き入るタイプだった。
僕らはサブカル系の仕事をこなしながらクラブやレイヴに足繁く通い、誰かの部屋で「音はまり」の会を持ったりしていた。
無心になって音楽を聴き、トリップしていく集まりである。
バブルの残りかすのような熱気が僕らを包み、僕は、熱狂ダンスは永遠に続くものだと思っていた。先のことなんか考えていなかった。
踊って踊って、踊りまくる。悩みも不安も、怒りも、嘆きも、すべて踊り明かすことで霧散していった。
だけど、精神的にも肉体的にも、永遠に踊るのは不可能な話だ。
ねこぢるが先鞭(せんべん)をつけ、僕らは次々と熱狂から醒(さ)めていった。青山さんが次につづき、そして、行き着いたところは……。

世の中バカばかり

巽早紀は、秀才だった。
早熟で目的意識のはっきりした娘で、自分にとって役に立つ見どころのある人にしか関心

を示さなかった。プライドが高く、ある意味、不遜な人だった。
早紀の両親は、早紀ちゃんは頭もよくて素直で明るくて……と、早紀を猫っ可愛がりしていた。その本質的な個性を理解することなく、ただ無条件で愛していた。早紀の言うことならなんでもきいていたと思う。それは、死ぬまで変わらなかった。娘を溺愛していたのだ。
早紀は学校の成績も優秀だった。
出身地の埼玉県のある高校に進学した。
その女子校は県立高校のなかでも、もっとも偏差値の高い全国的に有名な学校だった。『キューポラのある街』という映画のなかで、貧乏な吉永小百合が憧れの学校を覗きに行くシーンがあった。その学校に、娘が入ったというので、お父さんが大喜びしたと早紀から聞いたことがある。
早紀と同じ高校を卒業した先輩に、子宮摘出しながらも、出産をあきらめず代理出産のために渡米したタレントの向井亜紀がいた。
記者会見を開いたとき、髙田延彦がテレビの画面に出た。
それを見ていた早紀がこんなことを言った。
「向井亜紀さんってバカじゃないはずなのに、なんであんな男と結婚するんだろう？」

早紀は格闘技好きなのに、髙田延彦が嫌いだった。プロレスは好きで、マッチョは平気だったのに。
「どうして嫌いなの？」と僕が尋ねた。
「薄っぺらな、ええ格好しいが嫌いなの。それに、すっごいバカそう」
早紀はそう言った。
そして、こんなことを言い出すのだ。
「タイガー・ジェット・シンのほうが大人だわ。私、タイガー・ジェット・シンがタイプなの。あらゆる男のなかでね」
サーベルの凶器攻撃を得意とする悪役レスラーが、よりによって理想のタイプだとは。
早紀が好む男性のタイプは、ちょっと個性的なところがあった。
格闘家のなかでジェット・シンの他に好きな男がいるか、僕が尋ねると、早紀はこう答えた。
「藤原喜明が好き」
うけを狙ったわけじゃなかった。
早紀は心底、そういうルックスとは無縁の、親父っぽい男が好きだった。
野球選手では、覚醒剤で捕まったことがある「江夏豊が最高」と言っていた。映画はルキ

ーノ・ヴィスコンティと、ティム・バートンがすごく好きだった。ヴィスコンティの映画は、少年愛的な見方をして観ていた。『ベニスに死す』、『家族の肖像』。みんな美形しか出てこない。みんなゲイだ。そういうところが早紀は大好きだった。

ゲイにもレズにも寛容だった。自身もクイア系というか、バイ・セクシャルだった。中学時代には既にレズビアン心が発芽したようだった。

ティム・バートンの映画は、いつも、孤独な疎外された者が重要な役で出てくる。大衆性を毛嫌いする早紀は、アウトローを主役にする彼の映画を支持していた。

ほかには、僕の影響もあり、テリー・ギリアムとポール・ヴァーホーヴェンの映画が好きだった。

高校を卒業すると、現役で国立学芸大に受かった。それは、親を喜ばせるための進学でもあった。親は早紀が教師になることを望んでいた。

ところが、早紀はやっぱり教師になるのはいやだ、と大学卒業前に反抗した。それで、妥協して教科書出版会社に入ったのである。

早紀には、どこかまわりが愚劣に見えるような、言い換えれば、選民的な、思い上がった見方がつねにあった。

「どこにいてもまわりがバカに見えるの」と言うのだ。

舞伎の本などを作った。

当時の先輩社員には、後に『危ない1号』でライターとしてデビューする自称鬼畜系の村(むら)崎百郎(さきひゃくろう)氏や、編集者のニコラス啓司さんがいた。

このころは、彼女の人生の中でも充実した期間だっただろう。教科書出版会社時代の写真とA社以降の写真を見比べてみると、前者のほうが明らかに自閉的な目をしている。

しかし、A社のようなスカシ系出版は、バブル崩壊とともに立ち行かなくなっていき、2001年春、解散した。自分の作りたいカルトな本を作る、というある種貴族的な姿勢では、採算が合わなくなっていたのだ。

彼女自身にも変化が訪れた。若いころにハマった貴族的かつ変態性の高いスカシ系カルチャーに対して「そういうものに夢中になっていたのは、ケツが青かった」と自覚し始めたのだ。

A社は売り上げも芳しくなかったが、給料も安かった。それで彼女はアルバイトでライターをするようになる。A社に所属しつつも他も覗いてみようという時期に僕らは出会ったわけだ。

早紀と僕とでは、かなり異なるカルチャーの中で生きてきたが、お互いのカルチャーを見せ合うことがとても新鮮だった。僕の影響でテクノ・ミュージックを聴き、トランスでダン

スするようになった。特に音楽とヴィジュアルに関して、彼女は僕のセンスに素直だった。僕に合わせてインテリな面はあまり見せなかった。

早紀は公務員の娘でありながら、お姫さまとして育てられた女性だった。人前ではいい子のように振る舞っていた。戦略としてのカマトトというか、とにかく演技者であり、外づらを取り繕う鬼だった。インテリ部分を隠し、明るくて控えめな態度をとる。どんな人の前でも素の自分をさらけ出すことはなく、いつも演技をしていた。「いい子の早紀ちゃん」を演じていた。

僕も当初、その演技に、随分だまされた。

難しい本などの話はしないから、特にインテリには見えなかった。でもそれは、僕に合わせているのであって、本当は、見かけよりずーっとインテリなのだった。そして、つき合い始めた当初は、とってもカマトトぶっていた。だからそういう人なのかというと、実はそうじゃない。心に重い荷を背負った、悲観主義者の一面もあるのだった。

でも、彼女と過ごす時間はとても楽しかった。カマトトだけど、それもまた悪くなかった。

ただ、実家の家族もそうだが、自分のことを「早紀ちゃん」とちゃん付けで呼ぶのは30歳にならんとしている身でどうなのか、とちょっと引っかかった。それで僕は「早紀」と呼ぶようにしたら、いつしか本人も早紀と言うようになった。

本当の早紀は、かなりパンクと変態が入っている人だった。根がパンク思考で、かつ、とてもマニアックな性格なのだ。

クイア系というかバイ・セクシャルで、ゲイとやおい（美少年趣味）が大好きだった。中性的なものやマイノリティなものが好きで、大衆が好みそうなものには嫌悪感を示した。

また、テロに対して、ものすごく強い興味を抱いていた。マンハッタンのツインタワーが自爆テロでやられた時などは、とても興奮していた。「アラーの神が怒っているのよ」と言って、イスラムや中東関係の本を読み漁りだした。早紀は活字中毒でもあるのだ。最後、鬱がきつくなって本が読めない状態になった時は、さぞつらかったろうと思う。

そして、自尊心というかプライドが高い、ナルシストだった。自分のプライドのために死ねるタイプだ。

中学校の生徒会長に立候補したときは、三島由紀夫の真似をして割腹自殺のパフォーマンスをした、と早紀の弟から聞いた。

その時点で早紀はバイ・セクシャルだった。僕と暮らし始めたときも早紀はそれを認めていた。同性愛に目覚めたのは、中学生のころだと本人から聞いている。

勉強は努力して一番になる、秀才タイプだ。中学からはマセてきて、大人の本を読んでいた。親は溺愛していたから、欲しい本は全部買ってくれる。函に入った澁澤龍彦の本など、

中1のころから夢中になって読んでいた。

中1のときの写真を見せてもらったら、こわばった好戦的な顔をしていた。

早紀はファザコンだった。中年の男が好きだった。といっても、実の父は嫌悪していた。

早紀は両親が喜ぶように振る舞う。その上、おもいっきり甘える。両親は可愛い、可愛いと、お小遣いをあげる。早紀としては、演技してお小遣いをもらった方が得だから、そうしている。

母親のことは「決してキレモノではないけれど、正直者でいい人間だわ」と言っていた。弟も「秀才とは言えないけど、正直で素直ないい子だわ」と言っていた。

早紀を特に可愛がるのはお父さんだったが、実際のところ、早紀はお父さんが大嫌いだった。嫌いなんだけれど、明るく、愛情があるように振る舞う。そこで大きな嘘をついていた。

なぜ嫌いだったのか？

自分の理想の男性じゃなかったから。公務員を退職した後、税理士をちまちまとやっていて、風采のあがらないまじめだけが取柄の人間だ、と見ていた。早紀はそういうタイプが嫌いだった。アメリカのようなマッチョな大きいものに対して反発する女性であり、大衆的なセンスの人を嫌った。

最終的にゲイにたどりつくのも、そこから来ているのだと思う。とにかく大衆的なものを軽蔑した。お父さんは大衆的だった。僕から見たら、牧歌的な、とても人のいい男性だ。いまは僕のことを「人殺し」と言って憎んでいるが……。

早紀はとても愛らしく、男性からもてた。

でも可愛らしさは表層的なもので、内面は可愛らしいものではなかったのかもしれない。

「本当の私は怖いのよ」と何度か言われたことがあった。

「あなたに遠慮しているの。すべての人間に遠慮しているの。本当の私は見せられないし、見せない。本当は怖いのよ」と――。

早紀は若い頃に自己を客観視して「これではいけない」と悟り、そこからずーっといい子の演技をしていた。近年はそれが完全に習い性になっていた。でも、時々、家に帰ってきてから爆発するときがあった。

それを何回か見て、僕は気がついた。

早紀は普段、演技をしている。ちょっと無理をしている、と。

ひょっとしたら、ときどき漏らしていた「死にたい願望」も、その無理からきているのかもしれない。

僕はにぶくて、彼女が爆発するまで、そのことに気づかなかったのだ。「気がつかない」を意訳すると「演技に騙されていた」となるのだろう。でも、前向きな嘘ならば、それを信じたほうがいいような気もするのだ。

愛人体質

タイガー・ジェット・シンと藤原喜明と江夏豊が好きな早紀は、独身時代に、妻子ある複数の中年男性と交際していた。愛人である。

反戦活動家として60年代に高名だったある作家ともつきあっていた。

その作家と一緒にアメリカに行ったときの話を僕も何度か聞いた。

その男性の愛人をしていた時、贅沢が身についたと言っていた。裕福な中年から「好きなコートを買ってきなさい」と言われ、早紀は思いきって男のカードで30万のコートを買った。それを着て男に会いに行くと、男は悲しい顔をして言った。「君にはもっと良いものを身につけて欲しかった」。

早紀は僕に言った。

「それで、私は反省したの。彼を傷つけちゃった。ああ、300万のコートを買えばよかっ

た。自分の貧乏性が情けないわ」と。
僕が早紀から聞いた範囲では、ほかに、某大手新聞の記者、イベント会社の経営者がいた。みな、一流どころ、金を持ち弁の立つ、妻子ある中年男たちだ。
もっとも、僕は早紀から以前つき合った男たちの話を聞いてもそれほどショックではなかった。僕にはいまの早紀がいたのだから。
僕といさかいをおこしたとき、早紀は言っていた。
「あなたは私が選んだ男なのよ。なんで自信がもてないの」
随分、不遜な言い方ではあった。
「私が選んだ男なのよ」
早紀は中年男性たちと関係が切れ、僕と恋愛しだした。自宅の電話にもっぱらかけてくるのはゲイの友だちばかりだった。早紀の理想像はゲイだ。女を愛せるゲイが理想だった。だから僕もゲイを理解するために、『ゲイ生活マニュアル』（データハウス）という本を作ってみたこともあった。その本は新宿2丁目の書店でよく売れた。
洋服も好きで、ブランド物を数えきれないほど持っていた。それもひと工夫ある可愛いやつが好みだった。僕から見て「ギリギリだな……」と思うような、たとえば背中に天使の羽がついているような服もあった。

贅沢といっても無駄遣いをするわけではない。ほんとうに美味しい店とかをよく知っていた。そして、そういう店は皆、かなり贅沢な値段がするのだ。本物指向でかつマニアックでもあった。チョコレートでも、「ゴディバはもう大衆的よね。やっぱりデメルが美味しいわ」と言って、1箱4千円もするウィーン王室御用達の「猫の舌チョコ」がお気に入りだった。

温泉宿も「最初は本物から学んでいったほうがいい」と言って、初めて二人で行った温泉宿は1泊6万円のところだった。少々、貴族なのだ。

僕が1962年生まれ、早紀は1968年生まれだった。

昔は、テクノカット風だったが、オヤジたちとつき合うようになってから、美容院では「釈由美子みたいにして」と言っていた。オヤジたちはフェミニンなものを求めるから、それに合わせていたのだろう。それ以前はパンクのようなスタイルだった。学校はいやだ、家族は愛があるが、私を理解できない、孤独だ。そこで、パンクに走り、髪型もパンクにしていた。パンク心はずっと最後まで残っていたが、ファッションはアンチ・パンクへと変化していった。

早紀は、まったく食事を作らない人だった。いや、作らない主義の人だった。それは本当に徹底していた。でも、たまに僕がカレーなどを作ると「おいしい、おいしい」と言って喜

んで食べる。家めしが嫌いなわけではないのだ。ただ、作らないという強い意志を持っていた。

報道カメラマンが撃たれたというようなことに関心はないが、世界中の紛争は熟知していて、今、どこの戦線はどうなってるとか、世界各地の戦争にはいつも精通していた。世界最終戦争のような「大きい一発」を欲しがっているようなところが早紀にはあった。マイノリティの孤独を支持する姿勢があった。僕と恋愛したのも、僕が、ちょっと変わっている――言ってしまえばマイノリティだったからかもしれない。

僕はアンチ読売だけど、早紀はそれ以上に極端なアンチ・アメリカだった。アメリカが世界を悪くしていると、早紀は理屈で考えていく。その上でアメリカが害をなしていると言う。なぜ早紀が反米的になったのか、僕には正確なところはわからないが、行動の粗暴さというのを見て感じたのだと思う。テレビを見ていて、ブッシュとビンラディンを評して「コカインとヘロインの戦いだな」と僕が言うと、「じゃあ私はヘロインを支持するわ」と言っていた。

体格のデカい人と小さい人が道でぶつかったときに、小さい人がどうしてもあやまってしまう。体格の大きさが威圧感を出しているから。だから大男のような存在が早紀は嫌いだった。それが国家になるとアメリカになるのだ。

その一方で、早紀は強いものに憧れる一面もあった。依存心が強かった。僕より秀才だし、僕より大人とつき合ってきたのに、僕に依存しようとしていた。そのあらわれがきっと〝王さま〟という呼び方に出ていたのだろう。

第2章　ねこぢるの思い出

1998年5月10日。
ねこぢるが死んだ。
自殺だった。
1967年生まれ。身長153センチ、体重37キロ。
ショートカットが似合う中性的な女性だった。
思えば、これが僕のまわりにいた親しくて、大切な友人であり仕事仲間の最初の自殺だった。
ねこぢるが自殺したのがX JAPANのhideが自殺した直後だったこと、ドアノブにヒモをかけて体重を乗せたやり方が同じだったために、ねこぢるはhideの後追い自殺だったのではないか、と報道各誌やファンの間でささやかれた。
僕はこの章で、ねこぢるの死について、わかる限りのことを綴ろうと思う。
いまとなっては、もう二度と戻らぬかけがえのない仲間の素顔を——。

出会い

ねこぢると初めて会ったのは、1990年のことだった。
当時、今思えば僕は編集者としてもライターとしても上り調子の時期で、勢いがあった。見るもの聞くもの、なんにでも興味があり、仕事も楽しくて、前途は僕の前に広がっていた。30歳になる手前の映画青年だった僕は、ドラッグも多少は嗜（たしな）んでいたが、家族のこと以外にこれといったスランプもなく、生きることに素直だった。
そのころ、僕が読んでいた雑誌のひとつに、漫画雑誌『ガロ』があった。タッチの気に入った漫画を見つけると、編集部に電話して紹介してもらい、僕がかかわっている雑誌のイラストを頼んだりしていた。
僕が『ガロ』のなかでも、特に好きだったのが根本敬（たかし）さんと山野一（はじめ）さんの漫画だった。両人とは面識があり、イラストの仕事を頼んだりしていた。
当時の山野一さんの作品は、貧乏人や愚かでどうしようもない人たちの業が渦巻く、ベタベタにリアルに描き込んだ世紀末の煩悩漫画だった。
「人とは、なんとどうしようもない存在なのだろう」ということを、これでもかと描き、諦

めたような不条理な作風は、良識派からは評価されにくいタイプのもので、カルトな人気の高い作家だった。

そんな彼の漫画は、僕のような少数派を自認し、ルサンチマンを抱えた者には、独特の「癒し効果」のようなものがあった。

「ああ、やっぱりそうだよな……」

山野一さんの漫画を読むと、いつもそうつぶやくのだった。

そんなお気に入りの山野一さんの漫画が載らなくなって久しい90年、「山野一＋ねこぢるし」の名義で、実質は「ねこぢる」としてのデビュー作が『ガロ』に載った。

タイトルは『ねこぢるうどん』。

親猫がニャーニャー鳴く子ねこをくわえて、うどん屋に現れ、「去勢してくれ」と言ってくる。うどん屋は困ったあげく、子ねこの金玉を、包丁で刺す。子ねこは死ぬ。客が来て「ねこぢるうどん1丁！」「ヘイ！」……といった内容だった。

可愛いねこがとても不条理で残酷なことをやらかす。

まだタッチに独特のブレがあり、整った絵にはないピュアな凄みが感じられた。同時に分裂的な陶酔にも似たトランス感に意識を持っていかれ、軽いショックを覚えたものだ。

「あ、山野さん、また始めたんだ」

そう思った僕は、強烈なねこの絵の漫画を頼まなくちゃと思い、電話したのだった。

その打ち合わせの喫茶店に、山野さんが奥さんを連れてきて紹介された。

痩(や)せていて小さい女性だ。萩尾望都(もと)のマンガに出てきそうな、髪も短くてボーイッシュな感じだった。

「実は、あのねこの絵の漫画は、千代美（ねこぢるの本名）が描いてはいるけど、僕も大分手伝っている、共同制作なんです」

ねこぢるは、少しはにかんでいたと思う。でも、僕には好意的な態度だった。

「ウチの妻はほとんどの人間に『相性が悪い』『嫌い』とか言ってつっけんどんだし、うまく打ち合わせになるかな……」

山野さんの不安をよそに、ねこぢると僕はすぐに打ちとけた。

それ以来しばしば会うようになったのだが、ねこぢるがスカートを穿(は)いていた記憶がほとんどない。持ってなかったんじゃないだろうか。

中性的な女性の雰囲気を放つ人だった。

『ガロ』からデビュー後しばらくして、一部の業界人たちから、ねこぢるは圧倒的に支持されだした。ある男性の音楽ライターなどは「1回インタヴューして、もうぞっこんになっちゃって」と言っていたほどだ。

ねこぢるは誰かが支えてあげないと生きていけない、という気にさせる人だった。
そんな愛らしい女性なのに、どういうわけか奇妙な願望があった。透明感のある女性なのに、ちょっと異質な、危険な薫りのする願望がねこぢるに巣喰っていた。
ねこぢるの奥底に、どんな薄暗い欲望が息づいていたのだろうか。
それを知ったとき、ねこぢるとはあまりにもかけ離れたどろどろした情念に、言葉を失いかけたほどだった。

武装願望

「ナイフが欲しいの」
ねこぢるは時々、ぽろっとこんなことをつぶやいた。
ねこぢるには、武装願望とでも呼ぶべき情念が渦を巻いていたのだ。
アーミージャケットを着たねこぢるは、本気になって「ナイフが欲しいの」と言った。みずからを守る武器を、ねこぢるは、心から欲しがっていた。
普段のねこぢるを知ると、彼女が武装願望を抱くようになったのも、わかるような気がした。

武装願望というのも、世間も人間も彼女にとって気に入らないことだらけで、世の中はねこぢるにとって危険がいっぱいだったのだろう。すべてに油断が出来なかったのだろう。だから、どうしても自分の心の中に逃避していくのだ。それでも避けられそうにないときは、ナイフが欲しくなるのだろう。

ねこぢるには、ほかにもまだ特徴があった。

早紀に似て、あれもだめこれもだめという他者に厳しい目があり、わがままとも言えた。食べ物も、ほとんど食べられなかった。肉も魚も食べられない。一緒にファミレスに行っても、スープを飲むぐらいだった。

僕の家に遊びに来た時に、妻がアヴォカドを出した。

「おいしいわよ。食べてみて」

ねこぢるは、不思議そうにその果実を観察していた。

「いただきます」

ねこぢるがアヴォカドを口に入れた。

その瞬間だ。

「ウゲ――ッ！」

アヴォカドが勢いよく噴出した。

ウイダーinゼリーのような、チュウチュウ吸って飲めるようなもので満足していた。食事に対する欲求が恐ろしく低い、というよりも、ないといったほうが正しいだろう。最後のほうは、生きる欲望も薄れていった。
そして僕の妻、早紀と同様に、同性愛に寛容だった。
ねこぢるの初恋は女の子だったと思う。
ねこぢるの晩年は、うちの妻ととても仲がよかった。
結婚した早紀を連れて、何度かねこぢるの家におじゃました。
すると、早紀とねこぢるは、たちまち意気投合していた。
お互い遊びで行き来して、よく長電話していた。
ねこぢるは、僕の奥さんだから受け入れたという雰囲気があり、早紀のほうは、ねこぢるのことを、愛玩動物のように可愛いと思っていた。ねこぢるのことをよくペタペタ触っていた。
僕の妻とねこぢるがスキンシップする光景など、かなりレズビアンっぽく見えたものだ。
肌と肌を重ねる光景は、まるでルノアールの美少女画のように可憐でエロティックで、光り輝いていた。

しかし、いまとなっては、その二人はもうこの世にはいない。

直観の閃き

僕が編集をやっていた旅行雑誌に、ねこぢるの漫画を毎号2ページ連載しようということになった。

「この人の漫画にはあまり注文をつけないほうがいい」と感じて、内容はねこぢるにお任せで、『ガロ』でデビューしたあのテイスト、ねこの絵で、ということになった。

ねこの絵の漫画に関しては、山野さんが共同制作者であり、マネージャーなんだなと認識し、安心して頼めた。

「そのときのことを思い出すと不思議でしたけど、ねこぢるは吉永さんに〝OK〟を出したようなんです、めったにないことなんですが」と、後で山野さんに言われた。

どうしてねこぢるは僕にOKを出したのか、僕を認めてくれたのか、そこがよくわからない。もともとほとんどの人にダメを出す人で、つき合う相手は自分で主体的に選んでるふうだった。

ねこぢるが数少ない認めた人物のなかに、僕は入った。僕の右脳寄りな感性に波長が合っ

たのか、はたまた僕に家族トラウマがあることを「同類」として、瞬時に見抜いたのか。

僕には親との関係でかなり根深いトラウマがあった。

ねこぢるの真っ直ぐな視線は、僕の表面の印象にとらわれることなく、本質を見抜いているような感じだった。

とても直感的な人なんだな、と感じた。つき合いが始まってからも、彼女の直観的な閃きをたびたび目にするにつれ、シャーマンのようなところがあるなと感じるようになった。

シャーマンのような予言者のようなねこぢるを、ある日、目の当たりにしたことがあった。

僕がまだ北区のアパートで、日がなハード・ドラッグに明け暮れていたころで、ねこぢるにぽつりとこんな物騒なことを言われた。

「吉永さんは35歳で死ぬ」

僕は一瞬、目の前が真っ暗になった。

なんで僕が35で死ぬんだ。ドラッグをやりすぎて、死ぬんだろうか。それとも殺されたりするんだろうか。それとも……。

まだ僕は死にたくない。ねこぢるの不吉な予言に、僕は戸惑うばかりだった。

当時の僕には「死相」が出ていたのかもしれない。
ねこぢるの予測は、僕ではなく、本人に向かってしまったのだが――。
人との社交がたいそう苦手なねこぢるが、なぜか、僕にはなついた。
僕もねこぢると楽しく会話ができた。
ねこぢるにはほとんど友人というものがなく、一人でいる時間が長かった。ところが不思議なのだが、露天商をしているイスラエル人とは友達になった。英語もろくすっぽしゃべれないくせに、どこか通じ合うみたいだった。
日本人のなかでもサラリーマンの友達が少なくて、たいがいの人を対象外にしていた。人の査定が異様に厳しく、かなり気難しいところのある人だった。そんな彼女のお眼鏡に、露天商のイスラエル人やフリーライター兼編集者の僕がかなった。堅気よりフーテン系のほうが波長が合うということかもしれない。
「漫画家の根本敬さんのことはどう？」
と聞くと
「おもしろい漫画を描く先輩」と、リスペクトする姿勢があった。
友達というよりは漫画家の先輩といった感じだろう。根本さんも観察力の優れた人だから、

早くから（デビュー前から）ねこぢるには「本物性」を感じていたようだった。

漫画を描き始めてからも、基本的に、稼ぐことになんの関心もない人だった。名を売りたいとか、お金が欲しいなどという通俗的な欲求がとても低い人だった。

それでは謙遜した女性か――と言えばそうじゃない。あれほど天然で超わがままな女性はいなかった。確固たる自分の意志というものをすごく強く持っていた。

『ガロ』は原稿料がゼロで、無報酬で描くのが常識の雑誌だった。

だからか『ガロ』で描いていたねこぢるは、「最初に原稿料くれたのは吉永さんだった」と、感謝の言葉をくれた。

そんな彼女と妙に気が合って、仕事がなくても、僕が彼らの家に遊びに行くような関係になった。

いつしか僕はねこぢるのお兄さん的な存在になっていた。

山野さんはねこぢるにとって、お父さんでありお母さんであった。山野さんのことをねこぢるは「お母さん」と呼び、僕のことは「お兄さん」と呼んでいた。

彼女の実の家族との関係を思わせる呼び名だ。

そんな3人の家族的な関係が短い期間だが、確かにあった。

トリップ

ねこぢる、青山正明さん、そして巽早紀。この3人は僕をはさんで顔見知りとなった。青山正明さんと僕で編集していた『危ない1号』にも、ねこぢるは、僕からの依頼で漫画を描くようになった。

そこで青山さんとねこぢるに面識ができ、作品集『ねこぢるだんご』（朝日ソノラマ）の解説を青山さんが書く間柄になった。

もっともあれは版元の編集者が決めたことで、ねこぢると青山さんは僕を挟んで知り合いではあるが、特にお互いに、深い関心はなかったように思える。

90年代前半は、ねこぢるもそんなに忙しくなく、マイペースで描いていた。

僕は当時ねこぢるの家に遊びに行っては、夜通しテクノやトランスの電子音楽にハマッて聴いたりして、よく彼女の家に泊まったものだ。テクノ・ミュージックに目覚め、傾倒し、不良外人がたむろする怪しげなクラブや、まだ黎明期だったゴア・トランスのレイヴ・パーティなどに行って踊っていた。ほんとうによく遊んでいた。

テクノのCDを山ほど持って遊びに行き、ねこぢると山野さんと3人で、夜から朝までおしゃべりをしながら「音はまり」をしていた。

「音はまり」とは、音楽でトリップすることだ。

僕が妻の早紀と結婚する前のシングル時代のことで、ねこぢるたちは酒を飲み、僕は大麻を吸って、延々と「音はまり」をしていたのだ。

最初の頃はいちいち「これはダブといってね、昔はレゲエだったのがデジタルに進化していった、ガンジャ仕様の音なんだ」とか「これはジャーマン・トランスで、身も蓋もない快楽的な音色が特徴で、『泣き』が聞きどころなんだよね」とか解説しながら。

男女が怠惰に寝ころび、一日中、音楽を聴きながら、時間を潰していく。

時々起きる倦怠感のある笑い声。延々と講釈する音楽知識。好きな芸術家の話。生と死――。

目の前を時間だけがゆっくりと流れていく。

僕らは時間の小舟に乗って、音楽の粒子を浴びながら、光の世界に飛び込んでいく。

それは外から見れば、たいへん退廃的な光景だっただろう。

不安と妙な自信。存在と自己が一体となって、頭上を快感が突き抜ける。

サイケデリックな昼と夜。僕は音楽に合わせてひたすら踊り狂った。

悩みも不安も、そして焦りもかき消えて、僕たちはトリップしていく。永遠に――。
ねこぢるは、素直になんでも聴いていた。だんだん耳がテクノに慣れてくるに従って、自分の好みというものが出てきて、「もっと速い音がいい」とか「とんがってキンキンしているのがいい」とか言いだした。
そしていろいろ聴いていった結果、エイフェックス・ツインとハルシノジェン（ゴア・トランスのユニット）が一番いいと言った。
ハルシノジェンの作品は、ゴア・トランスの中でも突出してLSDに対応する音楽としてよく出来ている。
ねこぢるは、ジャック・ダニエルを飲みながらアシッド・ミュージックを聴ける、言わば「天然アシッド」だった。
ただ、あまりベタな曲や「泣き」重視の曲には難色を示した。
僕の大好きなジャム・エル・マー（ジャーマン・トランスのユニット、ジャム&スプーンの片割れ）などに対しては、最初はその曲の論理的構成やドラッギーなセンスに感心していたくせに、後になってくると「ベッタベタでホモ臭くて嫌い」と言っていた。
「音はまり」の会も、最後のほうでは結局ねこぢるの好みが優先されることが多くなった。
ゴア・トランスは基本的にダンス・ミュージックなので、僕が座ったまま手だけでひらひ

らと踊っていると、面白そうに眺めていた。

ねこぢるは、けっして踊らなかった。音にハマッて聴いて、内面に入るタイプなのだ。

そういえば、「音はまり」をしている時にとても機嫌が良くなったねこぢるが、インドで買ってきたヒンドゥーの宗教画を僕にくれたことがあった。気に入っていた絵だったようだが、気前のいいところがあるのだ。この絵は『危ない1号』第2巻の裏表紙に使った。

ねこぢるがインド旅行に行ったのは1994年だった。本当は「一緒に行きたいね」と話していたのだけれど、僕が時間がとれずに、山野さんと二人で行った。

ベナレスなどでサドゥーと呼ばれるインチキ臭い修行者たちが、日がなだらしなく大麻を吸っている光景を見て、「日本もこのくらい、いい加減だったらいいのに」と、ねこぢるは言っていた。

彼女自身も日本では薬物の類(たぐい)はやらなかったが、インドで大麻を経験して、その牧歌的な酩酊(めいてい)をとても気に入っていた。

私生活

ねこぢるが山野一さんと暮らすようになったきっかけは、やはり『ガロ』で山野作品を見

たことだった。

感激して山野さんの家まで押しかけて、そのまま上がり込んでしまった。

彼女が美容専門学校を出てすぐだから、18か19の頃だ。

部屋にひきこもりがちなねこぢるだったが、いつしか「山野さんの漫画を手伝いたい」と言いだした。しかし手伝うといっても、タッチがまるで違う。山野漫画はかなり緻密な絵だけど、ねこぢるの描くそれはもっとシンボリックで幼稚というか、つたなさを感じさせるものだった。つたないけれど、なにか本質的なものを感じさせた。

そんな落書きみたいなものから、山野さんも彼女の描く絵にただならぬオーラを感じて、共同制作で一本描いてみた。それが漫画家ねこぢるデビューのきっかけだった。

『ガロ』でデビューしてしばらくは、マイペースで『ガロ』に「ねこぢるうどん」を描きながら、たまに僕が短編の漫画やイラストを頼んだりしていた。

90年代前半のこの頃は、まだ締め切りに追われることもなく気儘にやっていた。

作品も、ねこの兄弟が理由もなく犬を苛める話とか、電車の中で酒と一緒にジャムパンを食べている浮浪者ふうを見て、親ねこに報告に行くと、ジャムパンじじいの吐いたゲロが親ねこにかかる——といったものだ。彼女の感性が率直に出ていて僕にはとても面白かった。でも、編集部の方からは、「もっとメジャーな作品にしてください」との要望もあった。

僕としてはこの「ねこの絵」は、なにか本質的なものを感じさせ、売れる予感を感じていたので、おまかせで自由に描いてもらっていた。

売れっ子になる前からねこぢるの生活はかなり不規則で、30時間起きてたり、一日中寝てたりという、体内時計（サーカディアン・リズム）に逆らう生活をしていた。

彼女はねこを飼っていた。「にゃんすけ」という名で、その調教の仕方がちょっと凄かった。言うことを聞かないと、ビシッ、ビシッと鞭（むち）で殴りつづける。どう見ても動物虐待に映ってしまうぐらい力で押さえつけているようなところがあった。その結果、にゃんすけは、山野さんや僕の言うことは全然聞かないが、ねこぢるの言うことには素直に従っていた。

意外なようだが、ねこぢるには、追っかけ体質があった。

ほとんどの人間に関心がないけれど、これと決めた人間には、猛烈にアタックする。

「好きな相手には自分の生徒手帳とか、無理矢理渡したことあるの」と言っていた。

追っかけの最初は京都のファンク・バンド、EP-4の佐藤薫、それから山野さん。後年はエイフェックス・ツインの追っかけをしていた。

ねこぢるは面食いだった。リチャード・D・ジェームス（エイフェックス・ツインの本名）は、美形じゃないけど子供らしい素直な顔をしている。作る音楽にも独自性があり、美

しい作品があるかと思えばえらく乱暴なものもあった。それらに共通するのは、「どこまで恣意的にやっているのか。あるいは天然なのか」という印象だった。僕にはそれはだいぶ無邪気で自由奔放（というかわがまま）な音楽に聴こえる。

ねこぢるは、エイフェックス・ツインは、音から好きになっていった。ちょうど映画『シャイニング』のジャック・ニコルソン的な薄ら笑いを浮かべた、怖い顔をしたジャケットのＣＤ（『リチャード・Ｄ・ジェームス　アルバム』）。あれが出た頃にはもう、かなりリチャードに入れあげていた。そんな姿からは、イノセントな結びつきを強く感じたものだ。結局、リチャードとは、彼女の遺言により、お棺の中でも一緒になったが――。

彼女は、興味のある人にはとても積極的だったけど、大概の人には食事同様に興味がなかった。誰に対しても同じだった。人気タレントに対しても、自分の作品を評価してくれる人に対しても。そこは平等に愛想が悪くてピュアにわがままだった。好きなものがとても少なくて、口癖は「関心ない」「嫌い」というストレートなものだった。

ラルク・アン・シエルのｈｙｄｅが、ねこぢるの単行本の帯で推薦の言葉を書いていたり、ねこぢるの自殺はＸ　ＪＡＰＡＮのｈｉｄｅの後追いではないか、とか報道された時もあったが、本当のところ、そういう売れっ子の音楽には、ほとんど関心がなかった。ミーハーなところもあるが、大衆的ではなかった。世間の評価とか人気とかとはまったく無縁に、自分

の好みというものを明白に持っていた。

作品の中で「ジャック・ダニエルはうまいにゃー」とか描いていたように、酒飲みで、なんでも飲んだ。

一度、居酒屋で酔っぱらって、店の人がサービスで出してくれた鮎(あゆ)の塩焼きを「頼んでもいないのに出した」と、ずいぶん絡んだことがあった。

それでも、僕がねこぢる宅に遊びに行っていた90年代前半は、節度のある飲み方をしていた。

最後の97年から98年ごろ、売れっ子になってからは、かなり酒癖が悪くなっていた。

嫌いなものは嫌い

彼女の性格として、もうひとつ、特徴的なことがあった。

嘘がつけないのだ。嘘をつく思考がないのである。だから嫌いなものは嫌いと、はっきりしていた。

どきんとした覚えがある。

仕事仲間と数人で寿司屋に行ったときのことだった。そこはいいネタを出す店だった。

黙々と寿司をつまんでいると、横にいるねこぢるがふと、こんなことを切り出した。
「おいしくない。これ、人造イクラでしょ！」
喧噪（けんそう）の店内が一瞬、静まりかえった。板前は包丁を持ったまま、あっけにとられていた。僕はなすすべもなく、固まってしまった。
しばらくして、ようやく衝撃から抜け出して、板前が口を開くようになった。
「いやですねえ。これはちゃんとしたイクラですよ――」
僕はこれ以上、場の空気が乱れないようにと、お追従笑いをして、ごまかした。
ねこぢるはとても率直なのだ。この率直さというのは、時として尊大と受け取られるようなケースもあった。
ある大手出版社の編集部に深夜電話して、こんなことを平気で言った。
「担当を替えて」
編集者が「どうしてですか？」と、その理由を尋ねた。
すると、ねこぢるは耳を疑う理由を言った。「デブだから」
何度、変更の申し出の理由を尋ねても、それ一点張りだ。
編集部としてもまっとうな理由がないと対処しにくかったと思う。結局、このとき担当は替わったようだが。

無邪気で可愛らしい反面、そういうわがままなところもあった。ただ、意地が悪いわけではなく、太っている人と一緒にいると本当に汗が止まらなくなったりする、体が拒否反応を起こす、特異な体質もあった。普通の人なら耐えられるレベルのストレスに精神が耐えられない。

とても感じやすい女性なのだ。

大手出版社の編集の人たちもかなり苦労していたと思う。腫れ物にさわる、みたいな扱いだったことだろう。

大概の人にダメ出しをするから、ダメな人と一緒にいると鬱になる。傍からみたらなんてサービス精神のない人だろう、と思ってしまうのではないか。

天然で尊大なところのある人だった。山野さんがねこぢるを指して「子供大王」と言っていたが、まさにそんな感じだった。ピュアで傷つきやすくて免疫力に欠けて、あれもこれも「つまんない」と言い捨てる。

すべて自分仕様に環境を整えようとすると、自閉するしかないのかもしれない。

死は恐くない

ねこぢるは、自殺未遂常習者だった。

早紀と同じくねこぢるもプライドが高く、自己の世界を確立していた。

早紀は左脳型の秀才、ねこぢるは右脳型で、分裂病気質だった。他人に見えないものが見えてしまうようなのだ。僕と仲が良かったのも、直感的、分裂的な右脳的要素が似ていたからだろう。

ねこぢるの夫、山野一さんは、常識的で、真面目で、クールな人で、二枚目の男性だ。

ねこぢるよりもむしろ山野さんこそ不思議で、『四丁目の夕日』とか『混沌大陸パンゲア』とか、なんであんな分裂的な過激な作品を描くのかよくわからない。

現在、作品として「ねこぢるｙ」というクレジットで発表されているのは、ねこぢるの夫であり漫画家の山野一のことだ。

山野さんがねこぢるキャラクターを使って漫画を描く時に、このペンネームを使用している。ねこぢるｙの作品は、ねこぢるに似ているが、また違った趣のある作品である。

鬱っぽい傾向があったねこぢるは、ひきこもりがちで、部屋で「ファイナル・ファンタジー」をやりつづけていた。

僕はゲームをまったくやらないが、一度対戦型の格闘ゲームでねこぢると戦ったところ、こてんぱんにやられた。上手に操縦できずにいらついている僕を見て、「アハハハ。むきに

なってる」と笑っていた。
ねこぢるが自閉的になったのはどこから来ているのだろうか。
僕なりに精一杯考えてみると、家族と一緒に暮らしていた頃に、精神的に孤立して、自分の内面にこもる傾向が育（はぐく）まれたのかもしれない。僕と会った頃には完全に自閉的な性格が確立していた。
ねこぢるは精神科に通院し、医師から鬱病の診断を受けていた。
「死は、別に怖くない」——ねこぢるは何度も言っていた。
92年から94年頃は、まだ僕も出版バブルの末期にあって、ちょっとは売れていた。僕も今より楽をしていた。『危ない1号』という自称「鬼畜系」のサブカル・ムックを作っていた頃で、遊びで本を作ってそれが売れて編集印税でまた遊ぶ——遅れてきたバブルだった。
そんな時期、ねこぢるもマイペースで、かなりのんびりした雰囲気だった。
仕事のつき合いよりプライベートのつき合いが多かったかもしれない。僕と会っている時には、あまり鬱の顔を見せなかった。セーブしてくれていたのかもしれない。
とりあえず、みんなまだ生きていて、それなりに穏やかな日々だった。
好きな音楽を聴き、時々、ドラッグを愉（たの）しみ、たわいもないおしゃべりをして、時が過ぎ

ていった。
売れたい、という世間の人がひそかに抱く野望も、どこかにちっちゃく巣食っていたかもしれない。
青山さんが鬼畜系編集者、あるいはドラッグライターとして、出版業界の一部に熱烈なファンをもち、僕のような出版バブルの波をかぶっていた。その意味で、青山正明さんが一番成功していた時期でもあった。
ところが、ねこぢるが当の本人ですら信じられないくらい、売れに売れる時代がやってくる。
それは滅びのカーテンコールでもあったのだが――。

ブーム到来

90年代も半ばにさしかかってくると、ねこぢる作品の人気に火がついた。
「なんか危なかわいい」という大衆的な人気が突如として沸き起こったのだ。
ねこの独特のフォルムが誤解も含めアピールしたんだろう。つたないタッチだからこそ許された部分もあったと思う。

ねこぢるの漫画を評する言葉。――危なかわいい。

その響きは、イノセントで残酷な、特に初期作品をよく言い表していると思う。ねこぢる本人のキャラクターともシンクロするところがあった。不穏な可愛らしさを感じさせる人だったのだ。そして火がついたら一気に売れっ子になっていった。

すでに僕らは、「音はまり」の会でだらだらしながら時間を潰す環境ではなくなっていた。僕は早紀と結婚もしていたし、ねこぢると山野さんは寝る間もないほど忙しくなっていた。

〈ねこぢるの作品群〉

ねこ神さま1　ねこ神さま2

ぢるぢる旅行記　ぢるぢる日記

ねこぢるだんご　ねこぢるまんじゅう

ねこぢるうどん1　ねこぢるうどん2

ねこぢるうどん3　ねこぢるせんべい

ねこぢる食堂　ぢるぢる旅行記総集編（『まんがアロハ』増刊）

ねこぢる劇場（OVA版）

ぢるぢる旅行記インド編　青林堂版ねこぢるうどん2

ねこぢる劇場（TV版）ぢるぢる旅行記NEPAL編（ぶんか社）
天使の出前…訪問看護婦ジジババ交流録
ねこぢるうどんCD－ROM　青林堂版
ねこぢるうどん完璧版CD－ROM　いい話ですから…
ねこぢるうどん2　CD－ROM　ねこぢるせんべい
ねこぢるどんぶりetcetc……

本来、マイペースで、量産タイプではなかったねこぢるが、ブームにより量産を強いられるようになった。
売れっ子になると、締め切りに追われる日々となり、オーバー・ワークとなっていく。『ガロ』から東京電力のCMまで、その仕事は多岐にわたっていった。無邪気に描くファンタジックな個人的妄想が、そんなに大量生産できるはずがない。そこを無理してやっていた。商業誌への迎合も、かなりしていたと思う。
ねこぢるも山野さんも仕事を断るということができない人で、来た仕事は片っ端から受けていた。質素に生きてきた二人だから、「断っちゃいけない」という貧乏性なところもあったのだろう。傍からみていると、もうちょっと仕事を選んだほうがいいのでは、と思ったも

のだ。

コラボレーション

一口に「ねこぢる」といっても、「ねこぢる」という漫画家は、故人であるねこぢる一人を指すのではなく、正確には共同制作者である山野さんをも含めて「ねこぢる」だった。いわば右脳感覚派のねこぢるの発想とタッチを、左脳論理派である山野さんがとりまとめることにより作品化していたユニットなのだ。

基本は、ねこぢるが見た夢の話とか景色とかが土台になっている。こんな変なやつに会った、とか、少々ぶっ飛んでいる発想が多いのも、「夢」が下地となっているからだろう。

彼女は、夢と現実があやふやに混じり合ったような、分裂的な思考回路を持っていた。だから独特の世界観が生まれるのだろう。

「こんな人を見た」という話も、事実と創作と両方あった。ねこぢるの思い込みというか、あやふやなところを山野さんがうまく作品化しているのだろう。作業分担はとても微妙なところがあった。ねこぢる本来のトリップ感をそこなわずに、普通の頭でも理解できる作品に整えて仕上げるという、デリケートな作業が行われる。「どっちが何をやっている」とは言

いがたい複雑なコラボレートをしている。まるでシャム双生児みたいな状態だ。だから、ねこぢる作品の中にも必ず山野色は入っている。おそらく100%ねこぢるという作品は一本もないのではないだろうか。

純度の違いというものはある。特に無報酬の『ガロ』とか、僕が頼んでいた初期の頃や、作品集では『ねこぢるうどん』（文藝春秋）や『ぢるぢる日記』（二見書房）などは、「純ねこぢる度」の高い作品といえよう。このへんは、かなり自由な発想で描いていた。

一方、短い間に大量生産していた後期の作品になると、かなり山野さんが頑張っている気がする。出版社が変われば倫理規定も変わる。それに合わせている部分はある。特に『ねこ神さま』などのメジャー作品になると、メジャーに合わせてだいぶ無理をしているはずで、無理をするほどに山野色が強くなっていったようだ。

ねこぢるが亡くなってから彼女の夢のメモをもとに山野さんがねこぢるy名義で描いた「とうめい」という作品などは、ねこぢるの見た夢の話を下敷きにしているとはいえ、やはり山野さんの作品という印象が強い。タッチはそっくりでも「ねこぢる」と「ねこぢるy」は、やはり別物なのだった。シャム双生児的コラボレートをしていた彼らだが、ねこぢるが亡くなって半身になった山野さんが単独で描いているのが「ねこぢるy」だった。

天然アシッド

ごく初期の単行本である『ねこぢるうどん』は、本当に読み込むと、デリケートな人ならバッドになりかねない、危険を孕んだ一種のトラウマ漫画だ。

無邪気に殺戮を繰り返す、ねこの姉弟。気にくわないものはとにかく殺す。みんな殺す。可愛いねこの絵だから、許されるクールな残酷さに満ち満ちている。そんな作風からは、強い自己否定、人間否定の感覚が窺えやしないだろうか。

雑誌で紹介されたり評論されたりする際には、「可愛いねこのキャラクターと、それに似合わぬ無邪気で残酷な作風とで、一部に熱狂的なファンを持つ」というとらえ方が多かったが、「無邪気で残酷」というところを読み込めば、「結局は死ぬしかない」と、生に対する諦観みたいなものが読み取れる。

そんなねこぢる作品に対して、「なんか危なかわいい」という大衆的な人気が突如として沸き起こった。そもそも解釈がだいぶおおらかでないと、あのような危険思想の入った本にシンクロする人が10万人も出現しないだろう。読者の多くは、本当に「死ぬしかない」というねこぢる作品にシンクロしたというより、つたないタッチとねこのキャラクターが発散す

る独特のオーラにやられたのだ。それが最終的には広く読者を掴んだ要素だった。

初期のねこぢる作品には共通して独特のトリップ感があった。分裂的といってもいいだろう。これを僕は「天然アシッド」と呼んでいた。

作品の中で、家族を作って遊んでいた、という面もあっただろう。彼女の家族のことは知らないが、「実家臭」というものがまるでない人だった。おそらく作品に描かれている家族像は、モデルがあったわけではなく、自分の「こうあって欲しい」という家族観の表れだったのではないか。

よく作品に登場するキャラクターの「にゃー子」は自分で、「にゃすお」は山野さんがモデルと思われる。ただし、「にゃっ太」が実の弟（彼女には弟と妹がいた）がモデルかというと、ちょっと違うような気もする。

「ぢるぢる見聞録」（白泉社『ねこぢる食堂』所収）は、ねこぢるが様々な場所を訪れるものだが、いつもどこへ行ってもつまんない、というところは彼女らしい。本当につまんなそうなスポットばかりに編集が連れていく。あれでは悪口を描け、と言っているようなものであろう。

いずれにせよ、大衆的なテーマパークで、ねこぢるが喜ぶはずがなかった。

『ぢるぢる旅行記　インド編』（ぶんか社）は彼女の感覚がきちんと現実の物語になって、

一番読みやすい本だ。旅情感あふれていて僕も大好きだ。僕が編集した『サイケデリック&トランス』にも、インドでバングラッシー（大麻のエキス入りヨーグルト）を飲んでトリップした漫画を再録させてもらったりした。

晩年の作品の『ぢるぢる日記』には、素顔の彼女がよく出ていた。「路上でうんこをしている人」というように、「今日はこんな変なものを見た」という話が多いが、はたして本当に見えていたのだろうか。たぶん本人の目には見えているのだろう。

リキッドルームの思い出

97年2月1日、エイフェックス・ツインのライヴに一緒に行った。このときのことは、いまでもはっきりと実感として記憶されている。

新宿・歌舞伎町・リキッドルーム。

場内は客でぎっしり。立錐（りっすい）の余地もない。

前座あつかいで、DJサイロブが廻している。

「どう思う？」

僕はサイロブの音がどうかをねこぢるに聞いた。

「全然つまんない。早く終われ、このバカ」

客の三分の一は、クラブにしては珍しく、床に座していた。ねこぢるは、その座した人々を強引にかきわけかきわけ、ついにＤＪブースの最前線までたどり着いていた。自分より体格のいい者たちに体当たりをかましての突進だ。平常はおとなしく、小柄で弱々しいくせに、好きなものへの突進力はたいへんなものがあった。

サイロブがＤＪブースを後にした。すると場内に、マイク（μ-s·ik（ミュージック））&リッチーのアルバム2曲目が流れ出した。ようやくリチャードの登場だ。

エイフェックス・ツインの音楽は、踊る曲なのか、聴く曲なのか、そのへんが微妙だ。場内も半々くらいで、いや、踊っている人のほうが少なかったかもしれない。ねこぢるは最前列で体操座りをして、ＤＪブースからひとときも目を離さずに集中していた。

一方、リチャードのほうは、ＤＪ機材の前でうつむいたまま。ずーっとうつむいたまま。長い髪がじゃまをして、ろくに顔すら見えない。サービス精神の一抹もない姿だった。

そのリチャードのうしろで二体のクマのぬいぐるみが、格闘というか、じゃれていた。ぬいぐるみの顔にはリチャードの写真が貼り付けてあった。

約1時間ほどたつと、リチャードは、そっけなく舞台をあとにした。それとともに、ねこ

ぢるも、場内うしろのほうにいた僕や山野さんのところへやってきた。
「もういい。帰る」
パーティはまだ続くのだが、リチャード以外のDJは眼中にないのだった。
「どうだった、リチャード？」
「ずっとうつむいてて顔がよく見えなかったけど、良かった。クマも楽しかった」
いつもそうだ。ねこぢるの言葉はセンテンスが短い。だからとてもそっけなく聞こえるが、じつは感激屋なのだ。だから、このコメントは「すっげー、もうチョー良かった！　もらしちゃいそう!!」ぐらいに思えばいい。
とりあえず楽しかったということだ。

修羅場

晩年の頃はもう、仕事が増えすぎて、ねこぢるも疲労気味だった。
身も蓋もないが、この頃になると「好きなものを描く」というより「とにかく原稿を納品しなくちゃ」という姿勢が強く窺えるようになっていく——。
『ぢるぢる日記』や『ねこ神さま』は、人から聞いた話をそのまま書いていた。

「単行本1冊分のパソコン・データを消しちゃったよ……」
僕が愚痴ると、ねこぢるは、僕の話をそのまま漫画に書いた。
アルバイトの青年が忙しい僕の代わりに行ってきた社員旅行のお土産に、朝食の時につく海苔（のり）（！）をもってきてくれた。普通の、5枚くらいパックされているあの海苔だ。それを
「はい、お土産です」と渡された話なども、そのままありのままに描いていた。
オーバー・ワークによるネタ枯れ状態だった。それでも発注があるから無理してなんとかやる。責任感は強くて、放り出せない。日々締め切りに追われ、鬼気せまる修羅場が何度もあった。
一度、こんなことがあった。
深夜。僕の仕事場で、ドアをノックする音がした。
「泊めてくれないか」
疲労困憊（こんぱい）した山野さんが逃げ込んできた。
「どうしたんですか？」
「そ、それが……」
青ざめた山野さんが重い口を開いた。ねこぢるがテンパって山野さんをカッターで切りつけたというのだ。

ぐったりしている山野さんをソファーに寝かせ、コップに水を入れて飲ませた。
沈黙の空気があたりを支配する。
電話が鳴った。僕が出ると、ねこぢるからだった。
「そこしか行くとこないと思った。ヤスオ君（山野さんの本名）を出して！」
「今、寝ているからだめだ」
僕がなだめても「早くヤスオ君を出して！　彼は逃げたんだから。たたき起こして電話に出して！」と物凄い剣幕だ。神経がとんがっている。
締め切りの修羅場になると、こんなことが頻繁にあった。シャム双生児のように絡み合って描いているものだから、お互い、クールでいられない。主にねこぢるがテンパって衝突する（というか一方的な虐待をする）ことが多かった。
ぐったりと横になっている山野さんを見て、僕は飼いねこ「にゃんすけ」を調教しているねこぢるの姿を思い浮かべた。
僕は断固として山野さんの身を案じて、帰宅させなかった。
まんじりともしないで、夜が明けた。やっと外で雀（すずめ）のさえずりと、新聞配達の音がしてくる。
ねこぢるの錯乱ぶりも一段落したことだろう。

山野さんはねこぢるのもとに帰っていった。「ねこぢるには僕が必要なんです」と言い残して——。

今思えば、売れすぎて仕事を全部受けてしまった彼らの貧乏性が悔やまれる。もう少し仕事を選べたら、ねこぢるはもう少し生きたかもしれない。そうすればもう少しよけいに触れ合えたはずなのに。

「たまには息抜きしようよ」

ねこぢるたちが修羅場続きの98年のある日、僕と妻の早紀とで、ねこぢるの家に遊びに行った。

自殺する2、3週間前のことだ。

みんなで和（なご）みながら音を聴いていた。ねこぢるの家にはハウスポットというトランス・レーベルをやっている〝ブルー・ルーム〟が作っているテクノ／トランス対応のスピーカーがあった。このスピーカーは、特にハイハット音がくっきりとしていて、音が立つ感じに聴こえる優れた製品だった。

ねこぢるはほとんど喋ることもなく、神経にさわるキンキンしたトランスに聴き入っていた。一方、山野さんは締め切り続きの疲労からぐったりとして、張り切った音がつらいよう

だった。

そんな様子を見て、僕が「ちょっとこれ聴こう」と言って、アンビエント・ダブに音を切り替えた。山野さんはホッとしていたようだが、神経質で速くて無機的な音にシンクロしていたねこぢるには、ゆっくりとした癒し系のダブは気に食わなかったようで、終始ブスッとしていた。

ハウスポットで聴くサイケデリック・トランスが、キンキンに覚醒しているねこぢるの神経を、さらにとんがらせていったような気もする。

いつもより、ねこぢるは不機嫌そうだった。

「死は、別に怖くない」――いつもそう言っていたねこぢるに、ふと不安を感じた。

僕らが帰ると、途中までねこぢると山野さんが見送ってくれた。そのときのヨレヨレとした山野さんのすがるような視線が思い出される。

「帰らないで！　もう少しいて！　ふたりだけにしないで！」

山野さんは目でそう訴えていた。

彼らは、ふたたび、修羅場に戻っていくのだろう。

崩壊の幕はもうそこまで迫っていた。

死に顔

「千代美が自殺して死にました。吉永さんは数少ない友達だったのでお知らせします――」

ねこぢるの死は、山野さんからの電話で知った。

発見が遅れて死後硬直が始まっていたらしい。僕のもとに連絡が入ったのは、発見されてから数時間しかたっていなかった。

その時、僕は妻の早紀と一緒に新宿にいて、アイマックス・シアターにでも行こうというところだった。そこへ山野さんから衝撃的な連絡が入った。

山野さんは極力、平静を保っていた。

いつかこんなときが来るのかもしれない、という予感もあったが、まさか行動に移すとは思わなかった。

映画はとりやめにして、山野さんのところに飛んでいった。

僕はその時、死んだねこぢるよりも残された山野さんが心配だった。僕たち生きている者にとって、妻を自殺で失うということがどれぐらいショックか。その時には想像もできなかったが、とにかく死んだ人の供養より、生きている人が優先されるべきだと思ったのだ。

ねこぢるの死に顔はとても穏やかだった。ぜんぜん苦しんでいない顔をしていた。微塵（みじん）も人生に未練のない顔。やすらかな死に顔だった。

その顔を見て、納得できるような気もしたし、怖いような気もした。

お棺にはエイフェックス・ツインのCDとビデオが一緒に入れられた。

葬式会場にはエイフェックス・ツインの『アンビエント・ワークスII』が流れていた。

生前のねこぢるは遺書を書いていた。その意志にしたがってこうなったのだ。

遺書と言っても、自殺未遂経験者だから、そのたびに何度も書いて、残っていた遺書というのも、じつは数年前に書かれたものだった。

山野さんの配慮で、すべて遺書の通りに従ったわけではなかった。

お墓はいらない、という遺書だったが、遺族がお参りするのに墓は必要じゃないか、と、死んだ人の都合より生きている人の都合を優先して、墓を建てた。ただ、最後の抵抗のように、墓石には名前が書かれていない。梵字（ぼんじ）がひとつ彫ってあるだけだ。

どういう意味だったか、山野さんに聞いたことがあったけれど、忘れてしまった。

遺書には「死んだ動機については一切話さないこと」というくだりがあった。

山野さんも一貫して取材拒否の姿勢で臨んでいた。

僕には当時の山野さんの姿は、痛々しくて見ていられなかった。

それから5年後。今度は僕が山野さんの立場に立つとは……。

「死ねる人」と「生きる人」

自殺は生き残った周りの人々を傷つける。
立ち直れないくらい、激烈に傷つける。
山野さんは、なんとかこらえた。
「ねこぢる」というユニットが世に出て、忙しくなっていくにつれ、二人はシャム双生児のような関係となっていった。とても別れられない。別れるには、引っぱがすしかない。それは、「捨てる」のと同じことで、人間はものみたいに捨てられない。
そんな二人だったのが、片割れが永遠に消え去ったのだ。心痛はどれほどだっただろう。
今、ねこぢるが亡くなって、ねこぢるyが単独で、「ねこぢる」が登場してくる漫画を描いている。「ねこぢる」と「ねこぢるy」は、タッチはそっくりだけど、本質的にはまったく別物だ。前者はすべて手描きの「アナログ」で後者はすべてパソコンで描く「デジタル」という、表面だけでなく、思想が違う。ねこぢるはある意味、死ねる人だった。作品に死への欲求が強く出ていた。

でも、ねこぢるyこと山野さんは、「生きる人」なのだ。その違いは大きい。作品の危なさというか、トランス感が違う。

シャム双生児の「ねこぢる」は死んで、半身残ったのが「ねこぢるy」なのだ。ねこぢるyからの読者だって、たくさんいるはずだ。むしろ、ねこぢる作品に深くシンクロしていた人には、ねこぢるyの世界は食い足りないかもしれない。そこには「死への欲求」がまったくないからだ。だが、それが健全と言うものなのだ、きっと。

山野さんは健全になってきたのだった。だから、かつての山野一漫画のようなエグい作品は描けなくなった。ネガティヴなルサンチマンを卒業したのだ。

5年後の2003年秋、僕の妻が自殺した時には、同じく自殺した妻をもつ山野さんにとても助けられた。不安定な僕の気持ちがよくわかるようだった。そして、神経衰弱ギリギリの僕を、健全な方向にナヴィゲートしてくれた。

山野さんは、立ち直っていたのだ。それが僕には心強かった。

殺すか、死ぬか

ねこぢるの自殺は、マスコミで大きく取り上げられた。

ＸＪＡＰＡＮのｈｉｄｅの衝撃的な自殺の直後だったこともあって、ねこぢるの自殺も、カリスマの死として新聞や雑誌に取り上げられた。

「……『ｈｉｄｅの後追いか、という記事が出たが、彼のファンだという話は聞いたことないし、誰かのマネをするような人でもない』

漫画誌の編集者が評したのは、（98年5月――編集部註）十日にドアノブで首を吊って自殺した漫画家の『ねこぢる』（本名・橋口千代美さん、享年31）のこと。共通してるのは、前途洋々に見えた点だけ、と。

漫画家、山野一氏（37）と結婚してから漫画を描き始めたというねこぢる。可愛いねこのキャラクターと、それに似合わぬ残酷な作風ですぐに人気漫画家に。東京電力のCMキャラクターも手掛け、今後も期待されていたのだ。

『しかし彼女の作品を読めば分かるが、内面は悲観的で破滅志向が強かった。特に近作では、どうせ地球は滅びるのだ、とかバリ島で幻覚キノコを食べて正気を失いかけた、などと描き、精神的に参っていたことは確かです』（前出・編集者）

漫画のねこのように気儘に振る舞えれば……」（『週刊新潮』98年5月28日号）

彼女を死へ向かわせたのは何だったのだろうか。
確かにオーバー・ワークもあったろう。商業誌への迎合もストレスとなったに違いない。そして鬱気質もあったろう。
でも、彼女の作品に共通する「死ぬしかない」という思想。生への未練のなさ。そんなものも無視することができない。
ねこぢるは、僕の知り合いの中で、もっともピュアな人だった。僕の妻は「本物」と言っていた。ピュア、本物、天然アシッド、本質的、分裂的、シャーマン的……。彼女の印象を思い浮かべると、そんな言葉が出てくる。あれだけ純粋でイノセントだと、この世では、生きづらかったのかもしれない。
出会ってから8年あまり、ねこぢるは容姿や言動がまったく変わらなかった。普通なら女の子から徐々におばさんになっていく年頃に、彼女はまるで歳(とし)をとることを否定しているかのようだった。
自殺してからキャラクター・グッズなどは売れ行きを伸ばしたという。死してブレイクした。でも、そんなことは彼女にとって、どうでもいいことだったのではないか。
いずれにせよ、生きている者に「死の理由」の本当のところはわからない。
よくあの歳（享年31）まで生きたと思う。あそこまで生きたのも、山野さんがいたからだ

とも思う。

結局、死にたい人だったから死んじゃった。そう思うしかない。

人生に何の未練もないふうだった。生きることにまったく執着のない彼女が可愛い反面、怖かった。僕はなるべく快楽的に、長く人生を楽しみたいと思っていたので、死ぬのが怖くない人というのはちょっと怖い。でも、ねこぢる本人はこの世で生きるのは、もうよかった。何もいらないのかもしれない。

絞り尽くすように働いてキュッと死んじゃった。潔い。怖いぐらいクールなところがあった。

彼女はその作品で、自身を語っていたのかもしれない。

「殺すか、死ぬか」

二つにひとつで、結論は、最初からクールに決まっていたのだ。

レイヴの思い出

ねこぢるとの忘れられない思い出がある。

僕は昔、あるゴア・トランスのレイヴで、肉体の過度な酷使とハード・ドラッグのオーヴ

アードーズで倒れてしまい、救急車に乗ってしまったことがあった。

その際、ねこぢるは、よれよれの僕を心配して救急車も手配してくれて、僕が病院からレイヴ会場に帰ってくるまで、そわそわしながら待っていてくれた。

青山正明さんや鶴見済君をはじめ、一緒に来た友人たちは、逮捕を恐れてどこかへ消えてしまった（今年に入って鶴見君から抗議の電話があり、「あのとき、僕は逃げたのではない。逃げる青山さんに説明もなく無理やり会場から連れ出されたのだ。僕としては、あの一文はとても心外だった。つらかった」との内容だった。彼は、絶対に嘘をつかない人なので、きっとそうなのだろう）。

ねこぢるは、自分が死ぬのは怖くないけど、友達が死ぬのは嫌なのだ。わがままだけど優しい人だった。

ねこぢると山野さんと一緒にレイヴ会場から温泉宿に移動した。

宿の部屋でやっと興奮状態から平静にもどった僕は、生きていることに感謝しながら、ちょっと孤独感も感じていた。僕自身、鬱めいた体質なのだ。体を休めていた僕は、すすり泣いた。かっこわるいけれど、自然に涙が出てきた。

「どうして泣いてるの？」

ねこぢるが心配して、僕に寄り添い、しばらくその場から離れなかった。

自分がいなくなったら、僕が自殺でもする、と思っていたのかもしれない。
「大丈夫？」
膝(ひざ)を抱えて泣いていた僕は、答えようがなかった。
あんなに人のことを案じてくれたねこぢるだったのに、なんで自分の命は粗末に扱うんだろう。
早紀もねこぢるも。
大切に思っている人が、ずっとそばにいたのに、いったいなんで早まったんだ。
僕は、贅沢な死を迎えたふたりを認めることにはためらいがある。
ねこぢるは、急に売れてしまい、そんな気もなかったのに、最後は原稿の依頼を全部受けて、キリキリキリキリやって、数年間で随分かせいだ。でも、お金にも執着がなかった。生きることへの執着が、すごく希薄だった。僕に好意を持ってくれたのも、「吉永さんは35歳で死ぬ」と言ったように、死にそうな僕が好きであったのかもしれない。
でも、僕は死にたいわけじゃない。
無茶をやるだけで、べつに死にたいわけじゃ、決してないんだ。

第3章　青山正明の思い出

慶應ボーイ

2001年6月17日。
編集者、鬼畜系及びサブカルライターとしてカリスマ的存在だった青山正明さんが亡くなった。享年40。自殺だった。
1960年6月27日、神奈川県横須賀市生まれ。本名・大塚雅美。
41歳にあと10日足りない、早すぎる死だった。
僕、巽早紀、ねこぢる——3人の共通の知人でもあった。
そして僕が心から尊敬していた仕事上の師でもあった。
僕は、ねこぢる、青山さん、巽早紀の順に死者を見送ったことになる。
才能豊かな3人。繊細でユニークで、やさしくて、傷つきやすく、そしてどこか醒めていた。
ドラッグに関する深い造詣と体験を持つ青山正明の名は、一部の読者たちの間でカルトな人気を誇り、彼の書く記事、編集する本は、熱烈な読者がつき、人気が高かった。
青山さんは海上自衛官の父と子ぼんのうな母のもとで一人っ子として生まれ育った。

勉強はまったくしなかったが、神童ぶりは近所でも評判で、小学2年生のときに九九が25秒で言える少年として学校中で有名で、通信簿はいつもオール5だった。

小学3年のとき、父が南山宏著『超自然のなぞ』という子ども向けの本を買い与えてやったことがきっかけで、怪奇、恐怖、オカルトといった超常現象にただならぬ好奇心を抱くようになる。

レッド・ツェッペリン「移民の歌」に衝撃を受けたのもこの頃だ。

中学校に上がると、アリス・クーパーが神様になり、70年代初頭のグラムロックの興隆に影響を受け、『スクールズ・アウト』を起点に輸入盤を買いまくるようになった。その一方で神奈川県の統一模試で2年連続第1位をとる俊才で、教師も「将来、青山君は医師か弁護士ですね」と太鼓判を押すほどだった。

高校に入学すると、プログレッシヴ・ロックに熱中し、勉強はまったくしなくなり、成績は落ちた。

図書館に通い詰め、ウィリアム・ブレイクをはじめとした詩集を読み耽(ふけ)っていた。

それでも現役で慶應義塾大学法学部に受かり、美少年は慶應ボーイの仲間入りを果たした。

青山正明の名が浮上してくるのは、この頃からである。

幻のキャンパス・マガジン

1981年、青山さんは友人たちと組んでキャンパス誌『突然変異』を創刊編集した。タブーを破った型破りな誌面が評判を呼んだ。

エロ・グロ、フリークス、死体、ドラッグ、ロリコン、差別などのテーマが軽妙洒脱(しゃだつ)な文章で扱われていた。小学校に潜入して隠し撮りしたり、差別用語のクロスワード・パズルを解くと皇太子の顔写真になるきわどい隠し芸。若いエネルギーと弾(はじ)けた感性が発揮され、人の心の奥底に息づく暗い好奇心を刺激した。

処女作に作家のすべてが内包されている、と言われるように、後の鬼畜系ブームとなった青山正明の真骨頂がすでに学生時代から顔を出している。

創刊号の青山正明編集長の編集後記。

〈私にとっては、過激こそ真実。この表現がどのように誌面に反映されるのか？　まずは人を怒らせる事から始めよう〉

奇形写真が載ったことが物議を醸した。

このミニコミ誌が一部キワモノ好きの間で話題となった一方で、当時、昭和軽薄体で一躍人気を博した椎名誠が、『朝日新聞』で「こんなものを許してはいかん」と糾弾したことで、さらに『突然変異』と青山正明の名は広まった。

遊び心がある青山さんは、『週刊プレイボーイ』誌上で、椎名誠に「上野動物園のキリンの檻（おり）の前で待つ」、と公開決闘状を叩きつけたが、椎名誠からまったく相手にされなかった、というエピソードもあった。

青山さんこそ、日々の暮らしやどんな醜い物からでもエンターテインメント性を見つけ出す天才だった。学生時代から『ヘイ！バディ』『ビリー』（以上、白夜書房）などの成人雑誌で文筆活動を始め、変態ライターとしてその名を知らしめた。

テーマはドラッグやロリコン、フリークス、そしてカルト・ムーヴィーの紹介記事などだったが、80年代初頭、おたくが台頭してきた時代背景もあって、原稿依頼はロリコン物が圧倒的に増えていった。

青山正明といえば、ロリコン、ドラッグ、フリークスの代名詞になり、異界の書き手となった。

海外旅行雑誌の創刊

僕が青山さんと出会ったのは、1989年だった。
当初は、雑誌の編集とライターという関係で、僕がある成人雑誌の編集をして、そこで担当していたライターの一人が、『産業と経済』という株式情報誌に所属していた青山さんだった。
僕は青山さんがいる兜町（かぶとちょう）によく原稿取りに行ったものだ。
青山さんも僕も、当時の境遇には不満を持っていた。
そんな時にやはり、同じ雑誌で書いていたライターで前衛音楽家の秋田昌美さん（メルツヴァウ名義で世界的に知られるノイズ・ミュージシャン）の紹介で、新雑誌立ち上げの話がきた。
他業種で業績好調の名古屋の電話営業の会社が、税金対策もあり東京で出版業に進出しようとしていて、その新雑誌の編集メンバーを集めているというのだ。
僕も青山さんも、この話に飛びついた。そしてあと2人、ライターの五庵保典さんと編集のS君が加わり、4人の同世代の編集部が出来上がった。

僕らの上に親会社からきた社長兼編集長であるMさんがいるという体制で、雑誌名は『エキセントリック』（全英出版→中央法科研究所）になった。

大手出版社の『03』（新潮社）や『ガリバー』（マガジンハウス）に先駆けた、海外旅行を特集で取り上げ、残りは僕らの得意なサブカル系という体裁のヴィジュアル誌だった。

今思い返せば、バブルな雰囲気が巷に満ちていた。海外特集などは企画書を持って代理店をまわれば、航空会社とホテルのタイアップが簡単にとれた。

僕らもそういうものだと思っていた。自分で行きたいところの企画書を作り、タイアップをかければ後はやりたい放題。会社の金で遊びながらその余力で本を作っていった。

この雑誌はニューヨーク、バリ、香港、カリフォルニア、ロンドンと特集していき、バンコク特集を最後に廃刊した。

理由は単純である。

雑誌コードを取得できずに直販でやっていたので、売れるはずもなかった。僕たちは書店に直に集金、回収にまわっていた。こんな手間暇がかかる作業で、本が売れるわけがない。

山のような返本を手にして、当初は編集部に持ちかえっていたのだが、そのうち面倒になり、書店のすぐ外のゴミ箱にぞんざいに捨てたりしていた。

雑誌コードがないということはミニコミと同義で、『エキセントリック』は実質、日本一

金をかけた同人誌と言えた。

他人の金を使って、なんの制約もなく作りたいものを作る。忙しかったが、とても楽しい経験だった。

この編集部で、僕は初めて自分の意志で主体的に編集することを学んだ。

青山さんや五庵さんと机を並べたことも貴重な体験だった。

先日、当時の社長だったMさんと話す機会があった。

「約1億の損を出したけど、楽しかったね」

社長も僕もそう言ってうなずいた。

こんな雑誌はおそらく、あの出版バブル時代でしか実現できなかっただろう。

黄金の日々だ。僕も青山さんも、若かった。

仕事に燃えた日々

『エキセントリック』が廃刊・編集部解散となった。

「せっかく4人集まったのだから」ということで、僕らは編集チームを組むことにした。それからしばらくは、共同で事務所を構え、パッケージツアー雑誌（ねこぢるに初めてイラス

ト を発注した）の編集や、大学受験情報誌の編集などをチームでこなし、それなりに稼ぐようになった。
青山さんも「大学受験がんばろう」みたいな記事を書いていた。
僕の隣のデスクで生真面目な顔で、青山さんが黙々と仕事をしていた。
仕事が立て込み、徹夜になる。
窓からはいつの間にか夜が去り、朝焼けの薄オレンジ色の日差しが、僕らにふりそそいでいた。
「もうこんな時間だね」と僕が背伸びした。
「ああ。働いたなあ……」と青山さんもつられて背伸びする。
「なにか食べようか」と青山さんが言った。
「そうだね」――僕は事務所のキッチンを探して、何か作ろうとした。
すると、青山さんが「戸棚に、〝赤いきつね〟があるよ」と教えてくれた。
開けると、緊急事態に備えたかのように、〝赤いきつね〟が十数個も保管されているではないか。
青山さんは、どういうわけか、〝赤いきつね〟に目がなかった。高校生のときからほぼ毎日のように〝赤いきつね〟を食べていたという。

お湯を沸かして、僕たちはツルツルと音をたて、空腹を満たしていく。

空きっ腹にインスタント麺はよくマッチして、こんなうまいものはこの世にあるのかと思うほどの味だった。

僕らは、インスタント麺で、この世の幸福を充分に味わっていたのだ。

窓を開けると、雀の鳴き声とともに生き物が動き出す、生命力あふれる音が流れ込んでくる。

仕事が忙しく、遊ぶ暇もないほどだったが、僕らは満ち足りていた。

チームで受ける仕事以外でも、それぞれライターや編集で他の仕事もこなしていた。

僕も個人でリクルート雑誌の編集を請け負っていたし、青山さんもカルトビデオの原稿などをよく書いていた。

とにかく仕事があり、それなりに収入もあった。まさにバブル時代真っ只中だった。よく働いてよく遊んだ日々だった。

青山さんと僕が密着して仕事をしていた90年代初頭の仕事には、海外旅行雑誌『エキセントリック』(90年・全英出版)、『別冊宝島・タイ読本』(92年・宝島社)、そして『危ない1号』第1巻(95年・データハウス)などがある。

ねこぢるや巽早紀とは、僕をはさんで面識があった。

青山さん編集のムックに、僕が発注してねこぢるが漫画を描いたり、ねこぢるの単行本に青山さんが推薦文を寄せていた。

早紀もねこぢるも、鬼畜系の元祖という青山さんのことは、前から知っていたし、その文才も評価していた。

僕にとって、2つ年上の青山正明さんは、兄貴分という存在だった。

彼からは仕事とドラッグに関して、さまざまな影響も受けた。彼は人に教えるタイプじゃなかったので、卓越した編集センスを僕が勝手に真似をしていた。

青山さんの文章は、推敲(すいこう)を重ねキチンと論理構築され、その上面白く、彼の文章が僕のお手本となった。

あの頃は青山さんも元気で、編集者としても、ライターとしてもよく仕事をこなし、その上毎月のようにタイへ遊びに行ったりしていた。

主目的は、少女買春とヘロインだった。

バブル崩壊、失速

僕らに訪れた出版バブルも、次第に不況の影が差しはじめた。

まず大学受験の情報誌の仕事が終了した。リクルート雑誌の仕事もなくなった。

五庵さんはこの時点で編集部から出ていった。そこで、青山さんをはじめ残る3人は、当時サブカル路線で隆盛を誇っていた『別冊宝島』に売り込みに行った。『エキセントリック』の海外特集の部分だけで1冊作るというコンセプトの下、タイをテーマにした本の企画にゴー・サインが出る。

この時作ったのが『別冊宝島・タイ読本』で、2週間の現地取材をもとに、青山さんと僕とS君が分担して原稿を書いた。

この本は楽しい思い出が詰まっている。売り上げも好調だった。

「なんか、好きなことをやってそれで商売になって、これでいいのかなあ……」と僕は漠然と思ったほどだ。

この頃、編集チームの名前を「東京公司（とうきょうこうし）」と名乗るようになった。

名前の由来は、タイの高級マッサージパーラー「バンコク・コーシー」から来ている。

青山さんは92年、個人名義で単行本『危ない薬』をデータハウスから出す。

彼のそれまでのドラッグ体験の集大成のようなもので、「使える本」として反響が良く、発売当初から売れ行き好調だった。結果的にはこの種の本にしては異例の、15万部を超えるロングセラーとなり、『危ない薬』はジャンキーたちのバイブルとなり、伝説の書となった。

なにしろ表紙からして「全部作者実証済み！」というクレジットを打っているほどなのだから。

同書の成功で彼はドラッグライターとしてカリスマのように言われた。

もっとも彼自身、評価されるのは嬉しいが、警察のマークなど心配事も増えていった。

続いて別冊宝島で『裏ハワイ読本』を作っている93年頃から、青山さんの失速が目立ちはじめた。

青山さんは、惹かれるようにドラッグにハマッていった。

ヘロイン、コカイン、覚醒剤といったハード・ドラッグは言うに及ばず、スマート・ドラッグにも興味をもっていた。

メラトニン、GHB（現在は非合法）という睡眠導入薬も使用していた。

GHBは、ほんのおちょこ1杯ぐらい飲めばいい。

メラトニンは2～5錠飲めばいい。

それを、青山さんはメラトニン50錠一瓶飲んで、GHBをカップではなくボトルごと飲んでいた。そして気持ち悪くなってずっと吐いていた。

ドラッグに関しては危機意識がなくなっていて、理性のかけらもなかった。あんな無茶してよく死なないなと思ったものだ。

そのうち、青山さんはみるみる働かなくなっていった。

当時の彼は、ドラッグの問題とともに最初の奥さんと離婚の危機に瀕し、みるみる元気がなくなっていったのだ。

『タイ読本』が青山5、吉永3、S君2ぐらいの比率でかかわっているとしたら、『裏ハワイ読本』は吉永8、青山2という感じで、青山さんの仕事量がどんどん減っていった。

青山さんは離婚をし、東京公司自体も低空飛行をしていたが、そんなときに共同事務所の援助を申し出てくれたのが、ジャニーズ事務所の暴露本や、おびただしい数の漫画の謎本を出していたデータハウスだった。

『危ない1号』の創刊

95年になると渋谷に事務所を構え、データハウスをある種タニマチとし、東京公司として再び編集に取り組んだのが『危ない1号』第1巻だった。

青山正明の名をさらに高めることになる、青山さんの匂いが濃厚な、鬼畜系のムックだった。『危ない1号』は青山さんが編集長、僕が副編集長をしたムック本で、年1冊刊行のペースだった。

メディアに出た青山さんの発言がある。

「いまメディアが作ってる物語は嘘くさい。つまんないですね。僕たちはいろんなことを考える権利と自由を持っている。イメージする力は動物は持っていない。メディアの論調にない別の物語を提示したつもりです。どんな鬼畜なことを考えても、脳の中までは規制できない。自由の場なんです」（『熱烈投稿』）

「『スタジオボイス』『ＳＷＩＴＣＨ』は、気取っていてつまらない、僕らはもっと面白いものをわかりやすい言葉で伝えていかなくてはならないんだ」（『世紀末倶楽部』）

青山さんは僕にもそう語っていた。

『危ない１号』創刊号の内容は、こんな具合だ。

「特集・ドラッグ」「東京ヒットマン情報」「死体処理マニュアル」「ダスト・ハンティング」（ゴミ漁り）「クライム・ペーパー」「惰眠のススメ」。

僕らがいた東京公司は『危ない１号』編集部のようになっていった。

『危ない１号』は結局15万部を超えるヒットとなり、あえて不道徳な文脈で社会の裏を覗き

見ようとする「鬼畜系」という、一時盛り上がった悪趣味系のブームの先駆けとなった。青山さん自身も「鬼畜ブーム」の仕掛け人のような存在になったのである。

ロリコンとマザコン

僕と青山さんは、再び憑かれたように仕事をした。

鬼畜もドラッグも得意なテーマだったから、いくら仕事をしてもがんばりが効いた。青山さんはこの前後、精力的に取材、執筆、編集とこなしていった。90年5月にはタイに旅行に行き、死体オン・パレードの現地雑誌『アチャアヤーガム』の取材をしている。

タイといえば仏教国であるが、平気で街の書店で死体専門雑誌が売られていて、これがまたよく売れるのだ。交通事故や殺人事件の現場で骸となった血まみれ、バラバラ、腐乱死体をかたづけるボランティアたちがいる一方で、死体写真を撮って、雑誌にする連中もいる。日本でよく見かける死体写真に、タイで撮られた物が多いのもそういう背景がある。ロリコン、ジャンキー、フリークス好きの青山さんにとって、まさにタイは好奇心を満たしてくれる理想の王国だった。

タイで遊んだ少女の写真を、彼が制作した本の表紙に使ったこともある。

30歳を過ぎたころから、今度はエスノ・ポップ（＝ワールド・ミュージック）を経由してハウス／テクノにどっぷり浸かった。

93年には、西麻布のクラブで僕も夢中になったジャーマン及びゴア・トランスに青山さんも熱中し、テクノの虜になり、毎月稼いだ金を惜しみなくつぎこみ、CDを月に40～50枚も買い込んでいた。

その間もまとまった日数がとれれば、すぐにタイに飛び立つ。

ロリコン・ジャンキー・フリークス——人は、青山正明のことをこう評した。

しかし、もうひとつ、彼には隠れた一面があった。

青山さんは猛烈なマザコンだった。だから彼をよく知る人は、青山正明を指して、「ロリコン・マザコン・ジャンキー」と言っていたほどだ。

ロリコンとマザコンは相反するものと思えるが、どちらも両立するものだし、どちらもロマンティストなのだろう。全身にロマンの血が流れていた青山さんには、矛盾しないごく自然の発露なのだ。

2度結婚して2度とも彼の実家で暮らしはじめ、いわゆる嫁・姑問題が発生したときもあった。

一度は家を出て二人暮らしをするのだが、いつのまにかまた実家に戻ってしまう。

「私とお母さん、どっちをとるの?」
二人の元奥さんが共通してこう問いただすと、彼はこう答えた。
「お母さん――」

大麻取締法違反

1995年7月初旬。
『危ない1号』第1巻の編集作業が徹夜つづきのとき、事件が起きた。
「大変だ! 青山さんが捕まった!」
仕事先の人間からの電話だった。
いつかこの日が来るんじゃないかと思っていたが、実際に来てしまうと、自分が夢の中に紛れ込んだようだった。
あちこちにドラッグの体験記や蘊蓄(うんちく)を書いてきた青山正明は、警察にとって、いつか、と思っていた存在だったのだろう。容疑は大麻取締法違反だ。
責任者の彼がいなくなって、はたして『危ない1号』第1巻が発行されるだろうか。まずいな……。

青山さんの逮捕は、明日は我が身、という緊張感を僕に与えた。
それでも、迫り来る発売日までに、ちゃんと本を仕上げなければならない。
仕方ない。僕は築地警察の留置所、そして移管先の小菅（こすげ）の東京拘置所に面会に行った。
檻の中の青山さんは青ざめた顔色で、憔悴（しょうすい）しきっていた。
僕は努めて明るい笑顔を浮かべ、「編集作業は順調ですよ」と言ってみた。
刑務官が横についている所で、『危ない1号』で掲載する予定の「覚醒剤の正しいやめ方」とか「エクスタシーとダンス・カルチャーの関係」の打ち合わせをするのも、ぎこちないものので、「あれ」とか「例の……」といった言葉がしきりに出てきた。

極度のマザコンである青山さんとお母さんの強い結びつきを感じたエピソードとして、こんなこともあった。
彼が大麻で逮捕され、ある日、お母さんが面会に行った。
お母さんから事務所に電話があった。
「とにかく家に来てちょうだい」
僕が訪ねていくと、「今日面会した時に、雅美（青山さんの本名）の本棚の後にあるものを処分するように言われたの」と言って、なにやら包みを僕に差し出すのだ。

包みの中をあらためてみた。
「うわっ！」
僕は声にならない声を発した。
こんなもの、いったい……。
知らない人が見たら、化学の実験に使う薬品にしか見えないだろう。ヘロイン、コカイン、覚醒剤、エクスタシー、大麻……。
こんなものがガサ入れで見つかったら、大変だ。いやそれよりも、警察官立ち会いの下でアイ・コンタクトだけで通じ合う母子というのも凄いと思った。
僕は『危ない1号』第1巻の編集作業でアップアップしていたので、それらはそのまま捨ててしまった。後で青山さんから「返してくれ」としつこく言われたのは、だいぶ心外だったが……。
彼は一人っ子で、放任主義の実家で、とても甘えん坊として育った。親は彼を絶対に叱らない。息子は何をしてもいいのである。彼は親に叱られて更生する、という経験がないのだ。
そして、自分のことをすべて無条件で受け入れてくれる母親に依存していた。妻との生活では、いろいろ気遣いも多い。怠惰な自分もさらけ出してしまう。でも、母親のもとにいるときの彼は、なんの気遣いもなく、存分に自分の世界に浸（ひた）ることができたのだと思う。

彼は生涯、実家を出られない人だった。

悟りの境地

結局青山さん不在のまま『危ない1号』第1巻は完成し、なんとか7月中旬の発売にこぎ着けた。

小菅の東京拘置所にいる青山さんに、「できたよ」と面会の際に本を見せた。ドラッグ特集が引っかかり、差し入れはできなかったのだ。青山さんは現物を見て、とても喜んでいた。

執行猶予となり、シャバに出てきた。さっそく事務所に僕を呼び、エクスタシーとLSDをやってクラブへ行った。「この人は懲りてないのか」と僕は思った。

しかし実際には、逮捕の体験は後に青山さんの心にずっと通底していて、プレッシャーになっていたはずだ。鬱の遠因にもなっていただろう。

そして1999年夏。

『危ない1号』は、一応、第4巻「青山正明全仕事」で完結した。少女売春から常温核融合まで、幅広い青山さんらしいテイストで幕を閉じた。

「1年のうち8か月さぼって2か月でやっつけた怠け者の僕」――青山さんが自嘲してそう

言った。
「加速度的に悟りの境地へ。本書を最後に路線変更を決意……」――そう書いていた。
「また、この本を過去の自分に捧げるとともに、無へと葬り去り、(「危ない」ことはもう飽きちゃったんで、『危ない28号』にお任せってことネ) 今後は、小説、思想書、ワークショップ他、全身全霊を投じて精神世界の開拓・普及に邁進することを誓って、終わりの言葉としたいと思います」
一見、新天地に飛び立つ誓いの言葉であった。しかし僕にはドラッグをやめられない言いわけに思えた。
そんな彼と10年以上一緒に仕事をしてきたわけだが、晩年の彼とは少し疎遠になっていた。と言うのも、最後のほうの彼は完全に自宅にひきこもって自閉しており、仕事もしなければ人とも会わない、という状態になっていたのだ。
彼のひきこもりは、初の逮捕後の、96年頃からひどくなっていた。
『危ない1号』の売れ行きはかなり好調で (結果的には各10万部を超えた)、当然第3巻を出すべき時期にあった。そこで僕が代わりに編集長を務め、フリーで編集をしていたニコラ

ス啓司さんに編集に加わってもらい、彼と二人で本を作った。

そして、それもそこそこ売れたのだけれど、僕はこの仕事がとてもしんどくて、青山さん同様、第3巻で、編集を降りてしまった。

ドラッグ、快楽殺人、フリークス……。猟奇的な内容の本を作ることは、楽しい反面、精神的にひどく疲れるものだ。

そんな折り、青山さんは東京公司のメンバーになんの相談もなく、突如データハウスの社員となった。

いろいろ精神面の疲れがたまり弱気になった結果、データハウスの鵜野社長に泣きついたわけだ。この時点で、東京公司はデータハウスに吸収される形となり、僕だけがフリーとなった。

まだ僕らの出版バブル末期の頃で、ひとりでやっていく自信（というか思い込み）があったのだ。

青山さんは『危ない1号』の第2巻を作った後、ひと回り若いファンの女性と2度めの結婚をし、家を出なくなっていく。本格的な自閉のはじまりだった。

天才は自らを深く鎮静させていき、眠りの世界だけが癒される場だと思いこんだのか、僕らを遠ざけ、誰とも会わなくなってしまった。

ひきこもる日々

「24時間フル稼働の心配事製造工場」――僕らが当時、青山さんにつけた別名である。

彼はいつでもいろいろなことを心配していた。健康のこと、仕事のこと、女のこと、そしてドラッグのこと……。傍からみていると滑稽なくらい次々と心配事を生み出しては、それを理由に自閉するのだった。心配ぐせは対人関係にも顕著で、充分いろいろ優秀なくせに、相手にひけめを感じてしまうのだ。例えば、打ち合わせから帰ってきて「吉永君、俺、山形浩生と柳下毅一郎には絶対かなわないよ。会って話してそれがわかったんだ」なんて具合だ。人の優劣を気にする人だった。

心配するから、自分には似つかわしくない仕事を選ぼうと、もがくのだ。

97年末、2回目の結婚で、青山さんはファンの女性と一緒になった。若くて右脳的感性にすぐれた女性だ。

ところが、2回目の結婚をしてすぐ、重い鬱に陥ってしまった。

誰にでも結婚を契機に落ち込む時期がある。いままでの環境と人間関係が変わることに対する適応不安なのか、結婚が時として鬱を呼び覚ますこともある。

青山さんは、ほとんど寝たきり状態となった。若い奥さんは介護士のような存在となり、仕事をしない青山さんの代わりに働きだした。

そんな合間に、一度目の奥さんとたびたび逢瀬（おうせ）をし、金の無心をしているようだった。一度目の奥さんは、彼のことが嫌いになったというより、「目を覚ましてちょうだい」というのが離婚理由だったので、心は離婚後もつながっていた。

僕は青山さんの自閉により、『危ない1号』第3巻を一人で作らなくてはいけない状況下にあり、手前の仕事で精一杯で、彼とも疎遠になっていた。

結局僕は、97年夏に『危ない1号』の編集を第3巻で降り、個人的に単行本の編集の仕事をしていくようになる。

『危ない1号』は、作り手のいないままデータハウスのほうで『危ない1号・第4巻　青山正明全仕事』として、過去発表済みの原稿を寄せ集めて作られた。この本はデータハウスの鵜野社長の提案で、実質は青山さんの単独としては2冊目の、そして最後の著作となった。

自閉して仕事ができなくなった青山さんは、データハウスを辞して、さらにひきこもるようになる。ドラッグによる躁鬱（そううつ）の激しいアップダウンだろう。「心配事製造工場」がますます激しくフル稼働するようになったのだ。

「俺、ライターで食えないから、なにかきちんとした仕事がしたいんだ」

そう言っていた彼は、マスコミからまったく無縁の職場を探し求めてきた。

「どこに就職するの？」僕がそう言うと、青山さんは気弱な笑顔でこう答えた。

「パン工場なんだ」

僕はいったいなんと言って励ましたらいいのか、わからなくなった。

非力な青山さんが肉体労働を主とするパン工場で働けるのか、はなはだ疑問だった。きっと鬱で弱気になった末のあがきだったのだろう。

パン工場勤めは長くは続かず（本当は、一日で辞めたのだが、雑誌『創』のインタヴューでは「いまでも勤めている」と言っていた）、結局また実家にひきこもってしまった。

小学生の頃から惰眠を貪るのが大好きだった彼は、大人になってからもますます寝てばかりいた。2度目の奥さんが彼の布団を引っぺがしてみたら、キノコが生えていた（実話である）というほど寝ていた。眠りに凝っていたとも言えるほど、眠りっぱなしだった。それは、ドラッグをやるから、規則的な眠りがとれないことによるものだった。その反動から、眠りを勉強しようと、眠りに凝るのだ。

でも、眠りに凝っても、ドラッグをやめないかぎり、変わるわけがない。

都合がいいときにちゃんと眠りたいわけだから、そうできるように考えるのだけれど、なかなか難しい。化学の力で眠ろうとしたのだ。眠りは自然に、体内時計で眠るのが一番なの

に。

借金・離婚・鬱病

青山さんは誰とも会わない日々を過ごしながら鬱病と闘っていた。そんな状況で完全に自閉してひとりの世界に入っていく青山さんとは、ほとんど会う機会もなくなっていた。

晩年の彼は、2度目の結婚をした以外、生産的なことは何もしていなかった。あんなにはっきりとした鬱は他に見たこともなかった。そしてドラッグと精神世界の本に浸り込む生活を経て、2度目の奥さんと離婚した。

この頃になると誰も彼と会ってはおらず、様子は想像するしかない。実家でお母さんと二人暮らしをするようになった。お父さんは既に亡くなっていた。

青山さんの場合、自殺へ向けての過程で、やはりドラッグの問題は大きかった。『タイ読本』や『危ない薬』の頃には、ドラッグをやってはいたが、それは海外でだけとか、ある程度の節度を守った使い方をしていた。自分に勢いをつける、というある種前向きな使い方をしていた。アシッド（LSD）をキメてクラブに行くとか、レクリエーショナルな使

い方をしていた。それに一回目の奥さんの前では大麻以外のものは嗜まなかった。
それが一度目の離婚をしたあたりから、逃避的にドラッグを使用するようになっていった。心配事を飛ばそうとドラッグを入れる。つかの間楽になるが、ドラッグの作用が切れてくると、リバウンド現象を起こしてまた寝込む。それがまたつらくてまた体内に入れる。その繰り返しだ。
覚醒剤とヘロインが主だったたと思う。LSDやエクスタシーなどのレクリエーショナルなドラッグでは、あまり逃避にならないからだ。その点、覚醒剤やヘロインはどんな状態で入れても、決まっている間は理性が飛び、調子よくなる。逃避にはもってこいなのだ。
後年の彼を見ていると、ドラッグ使用に関する面では反面教師のようにも思えた。「調子がいい時にさらに調子よく」という使い方ならまだいいが、逃避的に使っても余計良くない状態になるばかりなのだ。
彼の性格や晩年の姿から推測するに、最後の頃の青山さんは、なにもせず自閉したままヘロインと覚醒剤を使用していた。しかし働いてないので収入がない。そこで前の奥さんや知人に借金をしてまた買う。でもそれもなくなる。怪しい高利の街金融にも借りる。またドラッグを買って使ってしまう——。
こんなことの繰返しをしつつ借金のこと、2度目の離婚のこと、仕事ができない自分、鬱

病、同僚だったS君との揉め事などを抱えてパニックに陥ったのかもしれない。それはきっと、覚醒剤やヘロインの抜けたときのバッドな状態とシンクロしていたような気もする。

妻と母が衣食住を支えて、温かく見守ってくれていたのだが——。

嘘をつく人

彼を鬱めいた気分に陥らせた遠因のひとつに、1994年11月、日本全国で症例50名という眼病疾病、MPPEを患ったことが考えられる。失明の恐怖を背負い込み、加速度的に悟りの境地へと進んでいく——。

青山さんは、とても繊細でデリケートな人で、イノセントな面もあった。変態というより、変態好きの少年なのだ。奇形や差別やロリコンやドラッグが好きな、無邪気な子どもなのだ。真の鬼畜というにしては、あまりに感じやすい人だった。

鬼畜ブームの頃も、「俺は鬼畜じゃない。あれはシャレなのに、マジに鬼畜と言われてしまう」という葛藤があった。決して開き直っているわけではなく、いつもくよくよ悩んでいた。

自殺する前年、『BURST』で、ロフト・プラスワンのオーナー、平野悠氏と対談して

いる。青山さんはこんな殊勝なことを発言している。

「僕はもうこの5年間、非合法なクスリには手を出していません。それは二度と塀の中に入るのが嫌だからです！　かっこ付きで言わせてもらえば、全てのドラッグが解禁になって合法化され、捕まらないという状況になれば、やってもかまわないんですけどね」（2002年9月号）

しかし、この発言は無理があった。

本当は、最後までドラッグをやめていなかった。再び逮捕される恐怖を抱えながら、彼は一人でキメていた。

「ドラッグはうまくつき合っていけば、少なくとも酒よりは安全だと思う。ただし、ヘロインだけは別格だけど」

そう言っていた青山さんだったが、ドラッグのなかでももっとも危険なヘロインに浸りきっていたことも、最後まで隠していた。頭脳明晰（めいせき）で論理的思考能力に優れた人だったけど、

肝心なところが抜けていたのだ。

最初の奥さんが言っていた。

「吉永君は文章が面白いから彼のことを賢いと言うけど、本当は全然賢くなんかないんだから」

稚気にあふれた人だった。本当は誰からも愛されたい人だった。

平野さんとの対談で青山さんは、こんなことを聞かれた。

「最後に、こんな質問くだらないかもしれないけど、もし、青山さんの子ども（現在はいないけれども）や親しい友人の息子さんなんかがドラッグにはまってしまっているとしたら、青山さんはどう振る舞われますか？」

するとと青山さんは答えた。

「やっぱりやめさせますよ。若いうちからこんな事にはまっていたら本当に人生投げなきゃいけないですからね。どうやってやめさせるかって？　説得して、納得させて、引っ越しするかしてその人の交友関係や環境をまるっきり変えるしかないですね。同じような効き目を

する合法ドラッグが存在しているのも問題なわけです。そういう環境から脱出しなければ、一度完全にはまった人を助けるにはその方法しかないんです」

青山さんは、言葉とは裏腹にドラッグをキメつづけていた。

あらゆるドラッグのなかでも、覚醒剤とヘロインは最強、そして最悪のドラッグだろう。覚醒剤は気分がハイになるアッパー系であり、ヘロインは気分が弛緩するダウナー系である。同時にキメることは、気分がジェットコースターのように変動する。青山さん自身「ヘロインだけは別格」といって恐れていたそのヘロインを、自室に籠もり、キメていたのだ。

つかの間の至福、まるで宙に浮かび、天国にいるような錯覚にさせてくれる。ところがヘロインが切れると、夢から醒めたように、新たにヘロインが欲しくなる。いてもたってもいられなくなる。誰の金だろうが、ヘロインを買いたいから、おかまいなしになる。

ヘロインが切れて落ち込んだ気分になると、今度は覚醒剤をキメ、とてつもなくハイになる。平常の精神状態をプラスマイナスゼロとして、不安、失望、恐怖がマイナス10とすると、ヘロインが切れたときの落ち込みはマイナス100にはなるだろう。だから、当人にとってははたまらなくつらい。

そこで覚醒剤を使う。

普段の喜び、興奮がプラス10程度だとしたら、覚醒剤はプラス100に跳ね上げてしまう。ヘロインのマイナス100、覚醒剤のプラス100、この差、200という精神状態のアップダウンは、人間にとって正気を維持するのは困難である。

青山正明さんは、晩年、ヘロインと覚醒剤をキメて生きた。安穏とした日々を送れるはずもなかった。

破滅は足音をたてて近づいていた。

死に顔

2001年6月17日。

梅雨の季節にしては、さわやかな日だった。

真昼、青山さんは部屋に籠もったままだ。

いつものように、高校生の頃から毎日のように食べていた〝赤いきつね〟を作って、食べていた。

数時間後。

声をかけても部屋から出てこないので、不審に思った母親がドアを開けた。押し入れのクローゼットのポールに紐を通して首を吊った青山正明さんの姿があった。すでにこときれていた。

死の数時間前にうどんを食べていた、というのも、僕には青山さんが心から死を望んでいたとは思えない。

鬼才編集者・ライターの自殺は、たちまちインターネットで広がり、ファンたちが衝撃を受けた。

『FOCUS』（2001年7月18日号）では、青山正明の死を大きく取り上げた。

〈自殺していたカリスマ「麻薬ライター」〉「無名ライターの死が何故ネットに掲載されたのか疑問を持つ人も多いかもしれない。が、92年に刊行された代表作『危ない薬』（データハウス）は、間もなく10万部に達するロングセラー。麻薬系ライターとしてカルトな人気を誇り、自殺の報を聞き取材に動いたマスコミは30社近くに上るという」

青山さんの自殺は、リストラされて途方にくれ、経済が立ち行かなくなった末の、追い詰められての自殺、それと似ている。

バブル世代が今、正念場に来ているのだ。最初から景気の悪かった最近の若い人と違い、

一度いい目を見てしまった世代がこの不況でサヴァイヴァルに突入していく。いったいどれだけが生き残れるのだろうか。

マザコンだった彼は、結局、実家でお母さんのそばで死んだ。

早紀、ねこぢる、青山さん、3人の自殺を比べてみて、僕には青山さんの自殺が一番信じられないし、意外だった。

早紀もねこぢるも、自殺念慮(じさつねんりょ)にとらわれた、死を怖がらないところがあった。ところが、青山さんにはそういった死に対する憧れというものが感じられなく、彼は「死ねない人」だと思っていたのだ。

僕と彼とは疎遠になっていたとはいえ、ひと月に1度ぐらいは妙に調子のいい電話を彼からもらったりしていた。

ねこぢるの通夜のときに初めて人の死に顔を見て、そして触れた。

「え？　こういうものなの？……」

とても落ちついた安らかな表情で、僕は不思議な感じがしたものだ。

青山さんの葬儀で、僕は棺桶に入った冷たい遺体を見た。デスマスクにも、触れた。ねこぢるとはまったく違う印象を受けた。その顔は苦痛に歪(ゆが)み、ホラー映画のようで、いかにも苦しい、という顔をしていたのだ。顔色もドス黒い緑色をしており、化学物質の摂りすぎと

いう不健康な印象を与えた。

あの二枚目のマスクは、どこにも見当たらなかった。

3人の自殺には、鬱が深くからんでいるが、早紀とねこぢるは、言ってみれば「自殺を望む死」だったのに対し、青山さんの場合は、もともと死にたくなかったのに、状況があえて死を選ばせてしまった、と言うしかない。

早紀とねこぢるの死に顔が安らかだったのに対して、青山さんの死に顔は、まるでムンクの「叫び」のような、恐怖でゆがんだ表情だった。

健康に気を遣いすぎるほど気を配る人だった。缶の日本茶を飲むときでも「空気に長時間触れると、缶が酸化して体に毒だから」とわざわざ移し替えていたほどの人が、いったいなんでこんなに化学薬品をとりすぎて破滅したのだろう。これは推測でしかないけれど、僕がつき合ってきて見てきた性格とか、デスマスクの表情を基に判断すると、青山さんはやっぱり死ぬのが怖かったんじゃないかと思う。

青山さんは、「死にたい程つらいけど死ねない人」だったと思うのだ。本当は死ぬのが怖い人が、いろいろなものに追い詰められて、仕方なく自殺しちゃったという気がしてならない。

自殺にも種類があって、本当に死にたい人が覚悟を決めて死ぬケースと、本当は生きてい

たい人が追い詰められて無理やり死んでしまうケースとは、動機の面で意味合いが違うと思う。

ねこぢるや僕の妻（巽早紀）なんかは前者のタイプで、青山さんは後者のタイプのように僕には思えてならない。

僕は青山さんの二人の元・奥さんに、僕が推察した彼の自殺の原因を確認してみた。総合すると、「心配事製造工場」たる青山さんは、種々の悩みをかかえ、その上でヘロインと覚醒剤のリバウンドとドラッグ購入のための借金苦が重なり、どうにもたまらなくなって死んだのではないだろうか。僕にはそう思える。

第4章　妻・早紀のこと II

鬱とドラッグの日々

早紀と一緒に暮らしはじめて3年目、僕が突然鬱病になった。

原因はわからない。ひょっとして気ままな一人暮らしが長かった僕だから、結婚して二人暮らしがストレスなのかもしれないとも疑った。でも、早紀のいない生活なんて考えられないことだ。二人とも愛し合っていたのだから、二人暮らしが原因ではないだろう。

鬱病になるとなにもやる気が起きず、一日ごろごろしたりマンガ（特に梶原一騎と諸星大二郎と西原理恵子）の読み返しをしたりしていた。マンガの読み返しとは、決まったマンガ本を何度も何度も文字どおり再読し、予定調和に身をゆだねることで時をやり過ごすことだ。

そんなころ、早紀も社内の人間関係からくるストレスで、A社を辞めてフリーとなった。入りたくて無理して入った会社だから、自分から辞めるわけにはいかない。でもうつらくてつらくて堪（たま）らない。日々情緒不安定になり、衰弱していく彼女の姿があまりに痛々しくて見ていられなかったので、この時は僕が説得してA社を辞めさせた。彼女も「辞めどきだった」と後悔はしていないようだった。そして解放感からかしばらく怠惰になった。なにしろ僕が鬱状態で怠惰にしているのだから、早紀も影響されたのか、一緒に怠惰に暮らした。生

活費は僕の出版バブル時代の貯金を食い潰しながらやっていた。

　この時点でまだ2千万円弱くらいの蓄えはあったのだから、二人とものんびりしていた。それから数年、目ざましい仕事もせずに僕らはだらだらと生活していた。

　大麻、ＬＳＤ、エクスタシー。

　僕は下戸だが、妙にドラッグとは相性が合い、暇を潰すには充分なドラッグが隣にあった。独身時代はフルセットだったが、結婚してからは覚醒剤、コカイン、ヘロインの「白い粉」系は止めていた。僕は体験上、この三種こそが「麻薬」であると思っていたので、早紀にもそう話していた。

　バブル崩壊の余波は出版界にも顕著で、本が売れなくなっていた。特に僕がフィールドとしていたサブカル系は絶滅の危機に瀕していた。そんな状態でも僕は、本気で働きだせばなんとかなるさ、とたかを括っていた。

　早紀は段々あせりはじめた。小さい仕事をとってきてはコツコツとこなすようになってきた。でも、どこの仕事も長続きしなかった。早紀は根が真面目で几帳面なので当初はキチキチと一生懸命働く。編集能力も高い。その反面プライドも高くて、「生活のために働く」という割り切りがつかず、ストレスを溜めやすい。我慢強いところもあって無理をして働くが、やはりつらい。心身が不安定になって結局辞める。

僕の鬱はその後も続き、暮らしはじめて4年目ぐらいに「とにかくなにかしていてちょうだい。やる気のないあなたを見るのがとてもつらい」「あなたはやればできるのよ!!」と真剣に言われた。僕ももうそろそろシャッキリしないとなあ、と思うようになった。

雑誌の仕事を再開した。ところがかつてとはだいぶ出版状況が違い、条件の悪い仕事ばかりで稼ぎは芳しくなかった。フリーの身の厳しさ、不安定さを30も半ばを過ぎて初めて実感するようになった。いままでがバブルだったことも思い知らされた。

それでも僕は少しずつ仕事をするようになっていった。久々の単行本、『サイケデリック&トランス』も出した。発売月に渋谷のタワーブックスで売り上げ月間1位にもなり、初版1万部が完売。まずまずの成績となった。

やっぱり本気を出してやれば、売れる本くらい作れるんだ。僕は早紀が言うように、右脳的な人間で、感性を研ぎ澄ませて本を作らせたら、いいやつができるんだ。

鬱で失いかけていた自信が戻りつつあった。

結婚

早紀は僕の右脳的なセンスをとても評価してくれた。

「あなたには、ただの秀才にはない独特のするどい感覚がある。絵を見る目、音を聴く耳、そして言語感覚。それらがとても優れている」と言ってくれた。

早紀は本人が秀才タイプなもので、たいがいの秀才タイプには関心を示さなかった。むしろ偏差値の高さを売りにしている人や文章を否定していた。

勉強を自分の取り柄にしている人を「そんなことで気持ちよくなろうなんて軽蔑ものね」と言っていた。それは、昔の自分に言っている言葉であったかもしれない。

彼女は人の査定がとても厳しい人だった。僕の仕事の先輩にあたる青山正明さんのことは、「臆病なのが顔に出ている。ウソつき。文章は評価するけど嫌い」などと言っていた。

随分手厳しい。

ところが僕やねこぢるのような右脳中心に生きているタイプに強い関心を示し、評価した。

僕が実家にいた少年時代、どうしても僕の個性を理解できず、自分の信じる型にはめたがる親にとても反発していた。そんな「理解されたい」というルサンチマンも、早紀によって解消されてしまった。

彼女は僕のことをほんとうによく理解してくれた。こんなに理解されたことは、いままでの人生でなかった。理解されるということは僕にとって、愛情をそそがれることに等しかった。恋とは、相手に自分を知ってもらう快感なのではないか。子供時代、よく「極端だ」と

か「頭がおかしい」と親や学校の先生に言われつづけた。今思えば典型的なＡＤＨＤだった。そんな僕を「あなたは確かに極端なところもあるけど別に変じゃない。正直で言葉がストレートな面があって、常識派にはそこが角が立つところなのよ。みんな、あなたのセンスをわかってないのよ」と全肯定してくれるのだった。

僕は、早紀と話すことにより、自分の感覚に自信が持てるようになった。それまで無意識だったものが意識できるようになった。つまり、自己を客観視したわけだ。これこそが男女が屋根をひとつにする大いなる成果ではないか。

僕は早紀といると、とてもリラックスできた。でもそれは、早紀がだいぶ努力して僕に合わせてくれていたということもある。

結婚といっても、僕らは籍を入れていなかったので法律的には内縁関係だった。籍を入れなかったことに他意はなく、僕がめんどくさがり屋で、早紀も「どうでもいい」と言っていた。早紀の父親などは「籍を入れないほうがいい」と言っていた。

結婚してから初めて二人だけで行った屋久島は、僕にはとても楽しかった。だけど、後で早紀から「あの時はちょっと緊張した。神経を使った」と言われたことがある。僕との二人の関係でさえ、本当の「早紀ちゃん」を抑えて少し無理をしているのだ。

彼女は感情をストレートに言うことが少なかった。いい子の演技をしてストレスを溜めて

溜めてたまにブチギレる。そういうときの早紀は人が変わったように怖かった。

「もうやってらんねえんだよ!!」と食器をたたき割る彼女に「爆発するまで感情をため込まないで、普段からもうちょっと素直に感情を表現してほしい」と僕が言う。

すると彼女は「そういうことは直接的に言われる前に察するものなのよ。あなたは察しが悪いのよ。（つき合ってきた）オヤジたちは察してくれたわよ。あなたが子供なのよ」と言われてしまう。

どんなに嫌いな人の前でも愛想よくしている彼女を見るにつけ、僕は不安になった。無理がたたって神経を病まないだろうか、と。

安楽死願望

僕は再びバブル期のような忙しく喧噪の日々に舞いもどろうとした。

ところが――。今度は早紀が鬱病になった。

原因は貯金を食い潰す生活への不安、僕の鬱が伝染った、などいろいろ考えられるが、特定はできない。

とにかく僕がなんとか仕事をするようになってきたのと反対に、早紀の情緒は不安定にな

っていった。手足もストレスからゴワゴワに荒れだした。でも、生活のために働かなくちゃと、彼女は働きに出た。
将来をシミュレーションして不安な気持ちになっているようだった。早紀は自分で稼ぐことができないくせに、貧乏に慣れていないのだ。僕のように「まあ、なんとかなるさ」といった楽天的な考え方が出来ない人だった。そして、嫌な仕事も真面目にこなす。でも嫌なものは嫌。そうして無理を続けていくうちに彼女の鬱も酷くなっていく。
彼女はフリー契約で大手出版社の演劇雑誌の編集をしていた。その仕事がまた彼女を追い詰める原因となった。とにかく「ダサイ」というのだ。そして「ダサイのが我慢できない」とも。こういうところは、ねこぢるにも通じるもので、とてもプライドが高くて「仕事だから」と割り切れないのだ。ダサイのが、ほんとうに苦痛のようだった。
人間関係にも問題があった。彼女の上司の女性との関係がとても苦痛だと、よく洩らしていた。
「頭が悪すぎる。気がきかない。気づかない。それでいてスキンシップ過剰だったり、女だけの集まりに誘ったりしてくる。レズビアンの接し方をしてくる。レズビアンの目で私を見る。勝手に仲間だと思われてる。でも本当は全然気の合わない人なの。もうたまんなく嫌!」

僕が察するに、確かに上司も少し無神経な人だったが、早紀も随分わがままなのだ。仕事が終わっても家に帰る気力もなくなりへたり込んで、よく僕に電話してくるようになった。電話を受けて出版社まで僕が迎えにいく。

「電車にもタクシーにも乗りたくない」

仕方ないので手を引いて、1時間かけて歩いて浅草橋の部屋まで帰ったりもした。そんな時の早紀はぐったりして、見るに忍びないほどやつれていた。握った手にも力が入っていない。目もうつろだった。見栄っぱりで外づらの鬼の彼女だから、社内ではきちんとしているように努力していたのだろう。

躁鬱の波が徐々に激しくなり、悲観的なことを口に出してばかりになった。僕の鬱が伝染ったんじゃないだろうか。

仕事で知り合った精神科医を早紀に紹介し、「ちょっと気軽に行ってごらんよ」と言ってみた。すると、早紀は「絶対行かない」と言うばかりだ。

僕がたまたまもっていた抗鬱剤と精神安定剤を早紀に勧めると、ときどき飲むようになった。しかし心の薬は個人によって効く効かないという個体差があるので、僕は「ちゃんと治療に行ったほうがいい」と、くどく言うと、ようやく早紀はHクリニックに行くようになった。死ぬ1か月前のことだ。

かつて、別冊宝島の精神病の本で、僕がHクリニックの担当医にインタヴューしたことがある。そのインタヴュー原稿を読んで、「この先生がいい」と言って、通院するようになった。

早紀はこのころから「安楽死願望」を始終言うようになった。元々つき合いはじめた当初から、「私の心の中には氷のように冷たいものがあるの。それが私に安楽死を勧めるの」「私はただ安楽死したいの」「私は死にたい人なんだよ。もう、会いたい人には会ったし、やりたいこともやった。もういつ死んでもいい」などと口走ることはあった。だけどそれは半分言葉のあやだと思っていた。調子のいい時ははしゃいで、とても楽しそうにしていたのだから。

早紀の自殺念慮は激しさを増していった。僕と早紀の修羅場が始まった。

私は死ねるのよ

「紐が切れちゃった……」

僕の携帯に早紀が電話してきた。

僕はいったい何を言ってるのか、わからなかった。冗談だと思ったのだ。

しかし早紀は本気だった。仕事先の出版社のトイレで、首を縊ろうとしたのだった。そのとき、紐が切れて失敗したのだ。

慌てて迎えに行った。今度もまた早紀の手を引っ張り、僕たちは歩いて部屋まで帰った。

「自殺念慮が出ているの」

早紀はそう言った。

「私は自殺念慮が出ていて、死にたいという気持ちになる人なんです」

僕によく洩らしていた安楽死願望を、早紀はこう言っていた。

「生きているのがつらい。死ぬのは怖くない。ただ、苦痛が嫌なの」

どこか諦観していた。生きることにがむしゃらにしがみつくことを潔くないことと考えていた。

「私は死ねるのよ」――そうも言っていた。

いったい早紀にとって、生きることの意味は何なのだろう。

人は死ぬのが怖いはずだ。だからそれを考えずに、仕事をしたり、遊びにいそしんだり、愛し合ったり、感動したり、笑ったりする。僕も死ぬのは怖い。まだやり残したことがたくさんある。鬱になったときも、怠惰になったが死にたいとは思えなかった。

自殺念慮――恐ろしい言葉だ。自殺したい心。鬱病患者の自殺は、この自殺念慮から起こ

ると考えられている。

最初から100パーセント自殺すると思って遂行する人はいない。最後まで「助けてほしい」というSOSのサインを出している。

早紀も最初、出版社のトイレで首を縊ろうとしたとき、失敗したのも、心のどこかにまだ助かりたいという願いがあったのだろう。

Hクリニックに通ったのも、鬱と闘う意志があったからではなかったか。

神経戦Ⅰ

早紀は精神科に通い出した。

そこではありきたりな抗鬱薬のプロザックしか処方されなかった。

自分に合う薬に出会うまで時間がかかるから、精神科に行くのは病状が重くなってからでは遅く、もっと早くから行くべきなのだ。

早紀がHクリニックに行ったのも、いまから思えば遅きに失した。

早紀も苦しかったのだろう。夜中、「ガタッ」という物音でふと目が覚める。なんか変な音がする。寝室のドアを開けてみると、早紀がドアノブにタオルをくりつけて首を吊ろう

としていた。

すぐにタオルを首からはずし、様子を見る。

大丈夫。生きている。首に青あざが出来ていたけれど——。

「なんてことするんだよ!!」

興奮して僕が言うと、「失敗しちゃった……。音、した?」と、無表情に早紀は言った。

その無表情が、僕には死にとり憑かれている人の顔に見えた。これはほんとうに死ぬかもしれない。僕は怖くなった。この事実を僕だけが知っているというのもプレッシャーとなった。

一度、早紀の両親に来てもらって、実家に戻って安穏に暮らしてみることも考えた。

両親は僕と早紀が別れることに賛成していたので、話を聞くとすぐに連れて帰ろうとした。

すると、早紀がきっぱり言った。

「絶対ここを出ない。もう一度やり直す」

結局、両親は早紀に言われるまま帰っていった。

実家に戻れば、いい子の早紀ちゃんを演じなければならない。今の状態ではそれが出来ない。鬱の顔は僕だけに見せて、他の人には見られたくないのだ。どこまでもプライドの高い早紀だった。

早紀がいつ自殺念慮にとらわれて、最悪の手段をとるかもしれない。僕は早紀から目が離せなくなった。こうなると神経戦だ。

亡くなる1か月前、早紀は演劇雑誌の仕事を辞めた。そのときには一時的に「すごい、気が軽くなった。本当に嫌だったんだ、あの仕事」と言った。

よかった。これで少し元気が戻るといいな。でも安心はできない。僕はなるべく起きているようにして、早紀が寝入ってから自分も寝るようにした。

ちょっとでも部屋からトイレから台所から物音がすると、僕の全神経が研ぎ澄まされて、反応する。椅子を動かした音、コーヒーを淹れる音、本棚から本を落とした音、ドアを閉めた音。すべてが不吉な音を予感させる。

僕はなんとしてでも妻を守ろうと、注意を張り巡らせた。なにかが起きないように、すぐに飛びつける位置にいなければならない。一日が終わり、眠りに入るときも、そっと寝床から抜け出して早紀がなにかするかもしれないと、深い睡眠をとれないまま僕は警戒していた。

しかし、一瞬の隙が生まれるときがやってくる。

最後の買い物

2003年9月27日。

この日、早紀は朝から鬱がかなり重くなっていた。

いつ最悪の手段をとるかわからない。1秒1秒が緊張を強いられる。目を離したすきに、早紀が自殺念慮から本気で破局の行動をとってしまうかもしれない。一時も目を離せない。

まんじりともしないで部屋にいても、良くないだろう。

気分転換の散歩に出た。僕が強引に誘ったのだ。

僕らは運動不足解消のため、よく近所を散歩したものだ。早紀はいつも、飼いねこや野良犬に触ることを熱心にしていた。ねこに触れた時には、とてもはしゃいで喜んだ。

「おでん屋のねこはね、兄弟で、弟のほうがよく触らせてくれるの」よく彼女はそう言っていた。

でもこの日、彼女は無言で、うつむき加減にのろのろ歩いていた。

僕らに重くのしかかる悩み事など、街ゆく人々はまったく無関心に歩いている。

浅草橋の商店街にさしかかったとき、早紀は「ちょっと待ってて」といって衣料品のバッタ屋に入っていった。自分からそんなふうに積極的に行動を起こすなんてことは、ここしばらくなかったことだ。どうしたのだろう。

しばらくして店から出てくると「はい、これ」と言って僕に品物を渡した。センスのいい

男物の靴下だった。そういえば、僕はこのところヨレヨレのを穿いていたっけ……。
早紀は、口をきくのもしんどいほどの鬱状態の中で、自分のではなく僕の物を買ったのだ。たいして入っていない財布から、なけなしのお金をはたいて。
これが彼女の最後の買い物だった。夫思いの優しい妻からの。僕にとっては最期まで優しかった妻からの最後のプレゼントになってしまった。
散歩から帰った。なにか会話が欲しい。重い鬱状態の早紀に聞いてみた。
「なにかいままでで楽しかったこと、思い出せる？」
「……なにも」
「でもさ、なにかこう、フラッシュバックするものってない？」
「……うーん。……うーん。根ノ上高原のジュノ・リアクターのライブとディズニーランドかなあ」
本当はもっとあったはずだ。僕たちの暮らしのなかに、もっともっとあったはずだ。早紀に思い出してもらいたかった。生きることの楽しさをまた感じ取ってもらいたかった。
それでも、彼女の鬱意識のなかで、わずかふたつだけでも思い出されたのは嬉しかった。
1年前の夏、お台場のヴィレッジヴァンガードで僕たちが作った二冊の本『サイケデリック&トランス』と『2—:+/ドラッグ特集』が並んで積んであったあのとき。早紀は「夫婦

お揃いね」と微笑んでいた。その姿はとても嬉しそうに僕には見えた。もう一度、あの微笑みを見たかった。

そうだ。僕らは、屋久島に行って楽しかったじゃないか。とてもいい微笑みを浮かべて、僕を見ていたじゃないか。早紀、死ぬなよ。僕とはまだこれからだろ。猿に囲まれて、僕にしがみついてきた早紀。死ぬのはもっと怖いことなんだよ。だから、早紀――。僕は、いろいろいたらない夫だけど……だけど、きみを守ってあげたい。

神経戦2

早紀はその日、全然寝る気配のないままパソコンをいじったりしてずっと起きていた。鬱がきつくなると彼女はなかなか寝ようとしなくなる。

危ない夜だった。

いつ、目を離した隙になにか行動に移すかもしれない。

「あっ、来たみたい……」

早紀がつぶやいた。

いったいなにが来たというんだ。

早紀は苦笑した。ずっと来なかった生理が1年ぶりに来たというのだ。鬱病からいくらか快復しかけたとき、気力が少し湧いたときが、もっとも危険だという。

鬱病がもっとも重いときは、自殺する気力さえない、という。

生理が来ることは、それまでなかった生命力が微かに湧くので、自殺への後押しをするのだろうか。そう類推するのも、今だからで、この夜はそんな余裕もなかった。

夜もふけていく。まんじりともしないで、とうとう朝になった。

僕はまだ早紀から目が離せない。まわりが明るくなり、雀の鳴く声がする。新聞配達の足音。人々が活動を起こす生命に満ちた雑音がしだした。失われた希望をかすかに取り戻せるかもしれない、朝の気配だ。

僕は生きている早紀をそっと抱き寄せた。早紀がうつろな目で僕を見つめた。

「ごめんね……鬱で……」

早紀を抱きしめると、彼女は言った。

「お風呂に入ってから寝る」

僕もひと安心をして、そのまま居間でうとうとした。このところ、連日のように、警戒して僕は満足に寝ていなかった。

今夜も早紀につき合って徹夜していたのでとても眠かった。10分ぐらいだろうか。僕は寝

入っていた。

僕はこの一瞬の入眠を、ずっと後悔することになる。

ハッと目が覚めた。

あれ、早紀は？

まだ風呂場にいるのが気になった。

もしかして――。

あわてて風呂場に走った。ドアノブをつかみ、開けようとする。重たい。僕を拒絶するかのように、ドアが重たい。押し開けようとしても、なにかが重くのしかかり、容易に開かない。体ごと当たった。二度、三度、何度も当たった。ドアがずるずると押し開いた。ああ……。なんということだ。ドアノブに紐をかけ、自分の体重を利用したやり方で早紀が首を吊っていた。死に体となってぐったりしている。

「まさか!!」

完全に覚悟したような落ちついた顔をしていた。眠っているようだった。まだ体温が感じられる。顔色も悪くない。ひょっとしたら気絶しているだけかもしれない。

「早紀！」

救急車！　病院へ駆け込んだ。僕は自分がどんな状況に置かれているのかわからなくなり、

パニック状態になっていた。
サイレンの音。
白衣の隊員たち。
早朝の街の騒音。
のどかな雀のさえずり。
頭の中に物音がぐるぐると渦を巻き、僕をどこかに連れていく。
早紀。
まだ生きているだろう。
早紀。
嘘だろ。嘘だろ。
早紀。
僕はレイヴで踊り狂い、気を失い、救急車で運ばれたときがあった。ドラッグをやりすぎて救急車で運ばれたときもあった。これで4度、救急車に乗ったことになる。でもこんなにつらい同乗はない。自分が倒れたときよりずっと嫌な感じだった。
早紀は、お風呂ですでに死んでいた。死に顔はとても落ちついた自然な表情をしていた。救急病院で検視を待つ間、その顔をずっと見ていた。死は確実に現実のものとなっていった。

色白の顔が少しずつどす黒くなっていく。そっと顔に触れると、ひんやりとしてきた。でも、まだ信じられない。死ぬなんて！　早紀がほんとうに死ぬなんて！
涙がとめどなくこぼれた。僕は子供のように人目もはばからず泣きじゃくった。どれだけ泣いても涙が枯れることはなかった。
結局、僕は早紀を救えなかった。

四面楚歌

それから葬儀が終わるまでの日々は、一種の躁状態になり、僕は無我夢中で過ごしたことしか憶えていない。
早紀の自殺という最悪の結末を迎えた僕は、悔いながら今自分がやらなければならない義務をやった。
肉親、仕事先、友人。思いつく人々に連絡を入れた。
この本（単行本版）の担当者である赤田さんにも連絡を入れた。
5日前、あるヴィジュアル系のムック本を出版する打ち合わせを、飛鳥新社でしていた。
その用件で、富山まで取材に行って、結果報告をする予定だった。

「妻が最近情緒不安定なので、ぼくが見張ってるんですよ」と、僕が言ったことを赤田さんは憶えていて、心配してくれていた。実際に僕は富山行きの取材は、妻同伴で行くべきか迷っていた。

赤田さんの携帯電話に留守電を入れた。

「……事情がありまして、あしたの打ち合わせは延期させてください」

取り乱した心を抑え、できるだけ冷静に、「早紀が自殺しました……。首を吊ってました」と最後に付け加えた。

救急病院で検視になった。早紀は安らかな顔でいる。

風呂場で自らの命を絶ったとき、肉体はまだ温かかったが徐々に冷たくなっていく。

僕は妻の遺骸（いがい）にすがりつき、泣きじゃくるだけだった。その間にも、早紀の体は冷たくなっていった。

いったいこんなに人間の肉体は冷たくなるのか、というほど、僕を絶望の淵（ふち）に突き落とす。

あふれ出る涙で、早紀をまた温かくできるなら、僕はこのまま泣いていよう。

早紀！　死んじゃうなんて！

まだまだやり残したことが一杯あったじゃないか。

僕だけを残して先に逝くなんて、身勝手すぎるよ。
僕はいったい、どうしたらいいの？
自分で信じられないくらい涙が流れていた。
「早紀ちゃん！」
叫び声が背後からしてきた。
「早紀ちゃん！」
娘の名前を叫ぶ、早紀の両親だ。
早紀の父親はとても感情的になって、早紀の遺体に面会する前に僕に罵声（ばせい）を浴びせてきた。
「なにをやっとるか!!　すべてお前の責任だ。早紀がキチガイ（鬱病に対して知識がないあまり「キチガイ」と混同していた――筆者註）のはずがない。お前が殺したんだ!!　おまえが娘を殺したんだっ!!」
「早紀ちゃんを返して!!」
両親は激烈な口調で僕を罵（ののし）った。
どんな人間でも、パニックに陥ると、人間の弱さと狡（ずる）さが出てしまうのだろう。
早紀の弟も駆けつけている。普段は比較的、仲のよかった僕と弟だが、きょうは氷のよう

に冷たい表情だ。

部屋中に慟哭が響いた。

泣きじゃくる僕に早紀の弟がぽつりと吐き捨てた。

「泣いた者勝ちだよなぁ」

本当は優しくて素直な性格の早紀の弟までが。

四面楚歌だった。早紀の家族からも、僕の肉親からも、僕は切り離され、唯一の存在だった早紀も死という冷厳な事実によって引き離された。僕は早紀の亡骸から引き離された。

救急病院で泣き崩れている僕に向かって、僕の両親はこう言った。

「お前も大人なんだから全部ひとりで対処しろ。援助は一切しないし関係も持ちたくない。面倒はごめんだ」

絶縁宣言ともとれる言葉だった。

でも、当時の僕にはそんなことはどうでもいいことだった。なにより早紀が死んでしまったこと、もう二度と返らないことで頭が一杯だった。とてつもない喪失感から自律神経が乱れ、過剰な緊張状態が続いた。

この地球上に自分ひとりだけ取り残されたようだった。

死に向かう本

早紀と僕の城が崩壊した。

両親とその親族がマンションに押しかけてきた。

「葬式にも出るな。墓も教えない」

早紀の両親から一方的に通告された。

「娘の遺品をすべて返せ!!」

僕の見ている前で、僕の所持品と早紀の所持品を仕分けしだした。大量の早紀の洋服、書物を選り分けている。

早紀の愛した本を僕は思い出していた。

早紀は中学生のときから「心のなかに氷河のようなものがあり、それは安楽死を求めている」と言っていた。

「その冷たさは、どんなことがあっても消えない」

意固地なまでの死への願望とは、若い頃に読んだ本の影響もあると思う。

早紀はすごい蔵書家だった。僕らが住んだ部屋には自宅から全部持ってこられないから、

実家の部屋が早紀の書庫になっていた。

早紀が過去に一度、手首を切ったときがあった。親と弟がなんでこうなるのかなとひたすら戸惑うので、僕が「一度、お姉さんの書庫の本を読んでみれば」と言った。

「とても難しくて読めない……」と、肉親と弟は言っていた。読んでみないとわからない。早紀は死に向かう文学ばかり読んでいた。僕が憶えている少しでも前向きな本といえば――。

『エルマーのぼうけん』という童話。ミスターヒトと中島らもの共著『クマと闘ったヒト』。漫画『動物のお医者さん』。

早紀本人も変わろうとしていた。でも、実家に戻ると以前の自分が好んだ「死に向かう本」がある。だから早紀は実家から本を選んで持ってきた。

死を好む原因になった本は置いてきている。「私なりに、澁澤は処分するわ」と言っていた。

僕らの部屋で、暇つぶしで『スラムダンク』を読んでいた。これは異様に好きな漫画だった。三井くんというキャラクターに入れ込んでいた。僕がデラックス版で全巻買ってあげた。寝る前にいつも読んでいた。

早紀はやおいが好きな人で、『スラムダンク』には、多少、やおいが入っている。美少年の出てくるコミックは大好きで、有明のコミック・マーケットに行って、わざわざ同人誌まで買い求めてくるほどだった。

通夜

共同で使っていた僕と早紀の思い出のパソコンも、肉親から「寄こせ」と言われた。

「私が保証人になっていたけど、この部屋はもう解約するから、すぐに出て行ってくれ！」

早紀の父親に保証人になってもらっていたので、その保証人からそう命じられた以上、僕はもうこの部屋には住めなかった。

両親が部屋から早紀の遺品をすべて持ち帰った。冷え冷えとした部屋だけがあった。早紀といた部屋も、いまでは僕ひとり。夜になると孤独に押しつぶされそうになる。

それでも僕は、やらなければならないことがあった。

親しい知人を集めて、通夜をやらなければならない。

「10月22日水曜日の7時から、自宅で通夜をします」

ごく親しい知人が8人、来てくれた。

最初に来てくれたのは赤田さんだった。早紀の寒空から雨が降り出した。缶ビールとつまみを持参して、故人をしのんでくれる。早紀のいなくなった部屋はきれいにかたづけてあった。寒々しい光景だった。CDプレイヤーとスピーカー。それにトランスのCDだけが残った。踊り狂ったときの高揚した僕と早紀の姿がふと思い出された。早紀はいつも無邪気にピョンピョン跳ねながら、女の子っぽく可愛らしくダンスしていた。心からハッピーそうに見えた。涙が自然にあふれてくる。
ああ、そうだった。ベッドがまだ残っていたんだ——。
もうこの部屋に住むことのない僕は、ベッドとも永遠に別れなければならない。
僕はそばにいた赤田さんに頼んだ。
「最後にベッドを出したいんだけど、手伝ってくれますか——」
「はい」
ふたりしてベッドを運べるように解体して、エレベータで1階のゴミ捨て場に運搬した。
雨の中、ふたりの息が真っ白に吹き上がる。
まだ僕は生きている。早紀の死がまだ信じられない。
葬儀躁状態というのだろうか、不思議な事に僕は絶望的な悲しみのなか、やるべきことをしなければと、出版バブルのときのようにてきぱきと作業をこなしていた。

部屋に戻ると、インターフォンが鳴りだし、友人たちがぽちぽち集まりだした。僕も早紀も無宗教だったから、祭壇のようなスペースを椅子の上につくり、早紀の写真を飾った。なにも音がないのは堪えられないので、僕はBGMとして『パルプ・フィクション』のサントラを流した。

僕と青山さんがやっていた出版プロダクション、東京公司の山田君もやってきてくれた。下戸の僕が唯一、おいしいと感じられた酸化防止剤無添加のワインを持参してくれた。すでに自死を遂げていたねこぢるの夫の山野一さんもやってきてくれた。

「ウーロン茶にしますか？　ワインも缶ビールもありますよ」

そう言いながら、袋からとりだして僕に勧めてくれる。

清野栄一君も彼女と一緒にやってきて、「欲しいものがあれば、なんでも持ってくるから――」と、彼らしい慰め方をしてくれた。

早紀のいた出版社のかつての上司、現ステュディオ・パラボリカのミルキィ・イソベ氏と同僚の女性も来てくれた。かつて早紀がいた出版社の同僚のニコラス啓司さんもやってきた。

みんな、明け方まで故人について語り合った。

そのおかげで、僕はほんの少しだが、孤独からまぬかれることができた。

だが、僕には避けられない事態がすでに目の前に迫っていた。

できるかぎり早く、このマンションを出なければならない。僕には保証人になってくれる肉親等がいないから、なかなか新しい賃貸の部屋を探せない。

ようやく友人のつてで調布市の外人ハウス（「ゲスト・ハウス」とも言う）を借りられるようになった。家賃4万6千円。ガス・水道なし。トイレ共用。シャワー共用。早紀と暮らしていた17万円の部屋とは比較にならないほど、つましい。

「両親は保証人になってくれないんですか？」――赤田さんが尋ねてきた。

僕はありのままを話すしかない。

「根深い〝家族トラウマ〟があるんです。もうずっと、会ってないんです」

僕は父親との関係が最悪で、いまに至っていたのだ。

部屋に残った大量の漫画は友人に手伝ってもらって、秋葉原のまんだらけに引き取ってもらった。良い値で買ってくれたので、当面の生活費の足しになった。

千枚近くの愛聴盤（主にテクノ、トランス、古楽のCD）は、地方の友人宅の倉庫に預かってもらった。荷物はだいぶ減らした。6つある本棚のうち5つは捨てた。

早紀との思い出はごく少数の品だけにしておいた。

早紀の両親は僕の非をなじり、娘の死は僕のせいだと言った。目に入れても痛くないほど

早紀を溺愛していた、その大事な娘を失った早紀の両親は、とてもダメージを受けていた。自殺未遂や鬱病のことはあまり知らせていなかったので、突然の死にとても驚いていた。でも、早紀の性格からして「ありえる話」と推測できるはずだった。早紀が本当はとてもわがままなことも知っていたはずだ。それでも、「自死」ではなく「僕が殺した」と思いたいらしい。

僕は「敵」だった。

愛は盲目だというが、彼らの「愛」は血縁に対してだけそそがれるもので、彼らにとって僕は「敵」だった。

そして、早紀の遺体と僕は永遠に引き離された……。

お金がない

通夜から5日後の10月27日。

飛鳥新社の赤田さんから僕に電話があった。

「相談があります。出版予定のヴィジュアル・ムックは保留にして、この出来事をすぐ、本に書きませんか。吉永さんの奥さん、ねこぢる、青山さん。3人とも吉永さんが親しかった人たちで、みな、同じ方法で自殺しています。彼らの無念さと残された者たちの悲しみ、こ

のような悲劇を可能なかぎり防ぐためにも、意義のある本になると思うんです——」
突然の依頼に、僕は戸惑った。
書き下ろすだけの気力がまだ残っているのか、自分自身にもわからない。けれど、早紀の死にとらわれてきた僕は、なにかをきっかけに立ち直らなければならなかった。そうでなければ、僕自身もだめになってしまうだろう。
「わかりました——」
僕は赤田さんの依頼を承諾した。だが、まだ懸念はある。
「企画はOKですが、あとは僕の気力次第です。書きますよ。書かなければいけないんだ。僕は。早紀の思い出をすべて書き残しておきたいですから。それに僕は……早紀に依存しすぎてましたよ。早紀が死んでから、僕は……なにも手に付かない。どうしたらいいのか、僕にもわからないんです……」
大粒の涙が頬をつたった。赤田さんが心配してくれる。ふと気づくと、3日間、水だけで何もとっていなかった。ガラスに映った僕の顔は、幽鬼のようだった。
お金がない。テレビ局の企画提出で5万円を稼ぐのと、『BURST HIGH』の連載小説で、家賃を捻出するしかない。警察から、検視代として30万円を請求されたとき、金のない僕は怒りを抑えるのに一苦労した。数年前まで2千万円もあった貯金、家、妻——すべ

て失った。残ったものといえば、震えるほどの孤独だけだった。
東京郊外、調布市の外人ハウスに住みだした。最寄りの駅から歩いて40分もかかる。ハウスには日本人は僕を入れて数人だけだった。
なかなか部屋に慣れない。部屋にいたくないから、いつも御徒町(おかちまち)のヘッドショップ兼バーに行ってコーヒーを大量に飲むしかなかった。1日10杯も飲んでしまう。イリーガル・ドラッグはお金がないこともあって、縁が切れたが、カフェインとニコチンだけは縁が切れない。コーヒーを飲みながら、黙々とタバコを吸う。そうして、時をやりすごす。
一方、早紀の両親からは、しばらくの間「お前が殺した！ 早紀を帰せ！」と、怒りの電話が携帯にかかってくる。
「親と絶縁しているなんて嘘ついて、同情を買おうったって、そうは行かないぞ」
「キミが悪いよ。うちの家族は被害者だ」
「早紀にいやいや仕事なんかさせて、家計はすべてお前がやるべきだろ！」
……僕がなんと口をはさもうと、もう自分の思い込みに浸りきっていて、どうにもまともな会話にならない。ひとつはっきりしているのは「親はまったく悪くない」と彼らがかたく思い込んでいるということだろう。だからなにかのせいにせざるを得ないのかもしれない。

この手の電話は僕を鬱に落とした。何回も。

性欲がまったくなくなった。

セックスしたいという気が起きない。自慰すらやる気が起きない。食欲もない。

金がないから、BOOK OFFの105円コーナーに行って、『NEWTON』『WIRED』などヴィジュアル雑誌を買い、気に入った写真を切りとって、魂を癒すためのコラージュ作品を作る。それが唯一、僕を慰めてくれた。

前はCDもよく買って聴いていたが、いまはお金がないから、105円コーナーの古いものしか買えない。

幻聴も出た。雑誌の取材で知り合って仲良くなった精神科医に頼み、精神安定剤と抗鬱剤の分量を多くしてもらう。

思えば早紀は、TPOをわきまえようとするあまり、いつも他人のことばかり考えていた。常に相手に合わせていた。本当はとても人の好き嫌いが激しくて、嫌いな人がいると、心の中で混迷を招いてしまう。

でもそれを人前では絶対に出さない人だった。どんなときでもいい子ぶる。ナチュラルに演技してしまう。あれでは、疲れるのも無理なかったと思う。

家に帰ってくると愚痴もこぼしたが、やはり僕に合わせていたところはあった。

ひどく怒っているときか、笑っているときか、本当の早紀はどれなんだろうと考えてしまうときが多かった。
早紀の父親は、「なにを言っても言いわけだ。貧乏をさせて、お前が殺したんだ！」と強く僕をなじる。自殺の原因を僕に求めたがる。自分の家庭に問題があったなどとは、つゆほども感じないようだった。自分以外の「なにか」のせいにしたがる。でも、早紀の精神は実家にいた時代にできあがっていたのだ。家庭環境に、親の教育に、問題がないわけはないだろう。まったく自責しない早紀の父親は、保身に徹した無意識に「ズルい人」だといえるだろう。
彼は、根は善人のまじめで朴訥（ぼくとつ）な人だ。ただ、彼は自分の娘しか愛せない了見の狭い人だった。その彼が、娘の死を認めたくなくてパニックになり、すべてを僕のせいにする。
その、憎しみのオーラは、僕をとても追い詰めた。
「僕も死んでしまいたい」
一瞬、そう思った。でも、僕が死んでもなにも解決しない。早紀は戻らない。誰も喜ばない。
だけど、とてもつらい。気が変になりそうだ。すべてから逃げ出したい！
早紀のことでもそうだが、残されたみんなは、自殺の理由を知りたがる。でも、それは簡

単には特定できない。残された者の勝手な類推でしかない。

僕にも落ち度はたくさんある。鬱病の状態を見せたのも後悔した。鬱によってセックスレスとなっていったことも早紀を悲しませた。リタリンという抗鬱薬（現在は非合法）を過剰摂取して、ハイになり、独身時代の癖で久しぶりに自慰をした。セックスをしていないのに早紀に自慰行為が発覚し、ずいぶん怒られた。

経済が逼迫（ひっぱく）してきて、やりたくもない仕事をさせたのもまずかったかもしれない。早紀の両親は、それが理由だと言う。乱れていて久々にきた月経も背中を押しているかもしれない。

年齢的なこともあったと思う。早紀とねこぢるは共通して「大人にはならない。おばさんになるくらいなら死んだほうがまし」という強い意志をもっていた。実際、二人とも外見がとても若く見えた。学生といっても通用するぐらいだった。でも、早紀も35歳なのだ。女の子として通用する年齢ではない。

ならば、永遠に老けないために、死を選んだというのだろうか。

本書の原稿のダイジェスト版をある出版社の女性編集者に見せたことがある。

彼女は「私は早紀さんを知りません。そういう他人の立場から言うと、この原稿に書かれている早紀さんを好きにはなれないですね。オヤジに依存しバブルに踊り、生きにくくなったら死んじゃう。はっきり言って同情できません」

そう、冷静に見れば早紀はとてもわがままだった。
でも、彼女がわがままであっても、僕の愛は変わらないのだ。どんなに自分勝手であっても、僕には「かわいい早紀ちゃん」なのだ。女性編集者が冷静でいられるのは「愛」がないからだ。

自殺する理由

「私は死ねるのよ」
彼女は自分の言葉通りに死んでしまった。
あまりに落ちついた、安楽な表情をして死んでいた。それはまるで、主体的に欲したから自殺した、といわんばかりだ。でも、「死ねる人」なんてほんとうにいるのだろうか？
残された者は、自殺者の選択をいろいろな推測で納得しようとする。それは時に、あまりに自己中心的な断定になる。そして僕もそうだ。どうしても考えてしまう。
いったい早紀を死に追いやった原因は何なんだ？
貧乏。やりたくない仕事。失われていく若さ。セックスレス。仕事をしない夫。人前での演技。人一倍高いプライド。わがまま。鬱病……。様々な要素がからみあい複合して「死に

たい」早紀の背中をトンと押したのかもしれない。
いったい、どうしたらよかったのか。ああすればよかった。いや、あれがまずかった。僕はあれこれ思い悩み、自分の落ち度を浮き彫りにさせようとした。それは、思えば思うだけ出てきて、きりがない。思考は無限にループする。僕自身の鬱病の無間地獄がまた始まった……。
友人（ねこぢる）が死に、元同僚（青山正明）が死んだ。どちらもショックは大きかった。でも、そんなショックはまだまだ甘かった。6年間連れ添ってきた妻、僕の最大の理解者だった巽早紀の死に直面して、それまでと比較にならないぐらい打ちのめされた。そして、ねこぢるの夫である山野さんや青山さんの元妻たちの悲しみがどれぐらいのものかがわかっていなかったことに気づかされた。所詮は「他人ごとだった」と……。
自分から死ぬなんて不遜な行為だ。死にたくなくて死ぬ人がいっぱいいるというのに。けれど、早紀に自殺されたときは、不遜とは思えなかった。向こうが正しい。あれが理論的に突き詰めていった合理的な答えだったんだ、と早紀の最悪の選択を受け入れようとした。
早紀はすごく考え詰めていたと思う。考えなくていいところまで考え詰めていたと思う。中学2年から安楽死がしたい、早く死にたいという安楽死願望が芽生えていた。でも、死ぬのは苦しい。苦しまないように死ねないものか。それがわからないから、生きていた。

早紀のもとへ行こう

早紀が死んでからもう3か月近くたとうとしていたのに、僕にはまだ2、3日前のことのように思えた。実際には部屋を整理したり引っ越しをしたり友人に会っていたりしていたのだが、この3か月の経過が体感できないのだ。

極度の緊張から眠れない、食べられない、原稿書きも進まないという状態で、早紀の荷物の整理と引っ越しに専念していた。

いまから思えば、あのときは躁状態だったのだ。1か月で躁状態は終了し、今度は猛烈な鬱状態に陥るとともに、悲しくて精神が悲鳴をあげた。自律神経も乱れた。緊張が止まらない。不安定になると友人の家に逃げ込んでいた。特にねこぢるの夫だった漫画家の山野一さんには世話になった。僕が新しい部屋に馴染（なじ）めず緊張からパニック状態になってしまったときなども、車で迎えに来て、自分の家に連れていってくれたりした。

それでも、なにもかも嫌になって、あるマンションの屋上に行った。孤独が僕の背中を押している。

早紀のもとに行こう。ねこぢるも青山さんもいる。
屋上にどんよりとした雲間から鈍い光が差し込んでいた。
あの金網を乗り越えれば、すべてが終わる。楽になる。
僕はふらふらと金網にたどり着き、手をかけた。足をかけて乗り越えようとした。
眼下には行き交う人と車がちっちゃく見える。生活音が耳奥に響く。
飛び降りよう。苦痛から解放されるんだ。永遠に。
覚悟を決めた。もうすぐ行くよ、早紀。
手をかけて全身を虚空に投げようとした。
その瞬間。
僕の脳裏に幾人もの顔が浮かんできた。
まるで噴水のようにとめどなく、顔が思い浮かぶのだ。
友人。仕事仲間。旧友。つい先日、会ったばかりの人々。
そういえば、僕は金欠でお金を借りていたんだ。友人たちから。
僕が勝手に死んだら、彼ら、なんて言うだろう。
「吉永は生きろ」「どんなにつらくても生きろ」
早紀が死んだときに、駆け付けて来てくれた友人たちの、厳しいけれども温かい励ましの

言葉が思い出されてきた。

彼らはみんなそう言ってくれる。僕はひとりじゃないんだ。両方の家族からは、疎まれてるけれど。ひとりじゃないんだ。

そういえば、赤田さんからも「ぜひ書き下ろしてください」とあれだけ言われていたじゃないか。あんなに一生懸命編集しようとついていてくれてるのに、僕はなにをやってるんだろう。

金網の向こうまで身を投じかけた僕に、目に見えない命綱が投げかけられた。

まだ死ねない。そう思った。

僕は気がついた。僕は早紀に依存していた。早紀は僕の恋人であり先生でありお母さんだった。早紀は僕の命綱だった。その綱が切れてしまった。とても不安定な状態でこの原稿に取り組んでいる。

でも、まだ僕は死ねない。友人と借金が早紀の代わりに今の僕の命綱になっているのだ。

友人の中から、僕が早紀のことを書くのは「まだ早いのでは」という声も聞かれた。しかし、早紀が僕の心に強く残っている今、書いておきたかった。

後で読むと冷静でない文章になっているかも知れない。それでもいいと思った。

早紀に死なれて、僕の人生は一変した。僕は人生最大の危機に直面した。まったくゼロからの出発となった。

第5章　僕自身のこと

マルクス主義に育つ

僕自身のことを語ろう。
吉永嘉明は、ペンネームである。
別冊宝島の仕事を青山さんと一緒にやったとき、巻末の著者紹介のページがあった。
青山さんは、ア行だから最初に来るので、めだつ。ならば僕は最後のヤ行にしてめだとう。下の名前は、大好きなプロレスのなかでも、もっとも評価している藤原喜明からとろう。一文字変えて。
ということで、吉永嘉明に決まった。
生まれは東京だ。6歳年上の兄がいる。
父は中大を出て、都庁に勤めた。ノンキャリである。
父はマルクス主義者で、父の兄は日本キューバ友好協会の理事長を務めていた。年に一回、『朝日新聞』にカストロと一緒に写真が掲載されていた記憶がある。中央大学の経済学部の教授で、マルクス経済学を教えていた。戦争で祖父は死に、歳の離れた兄に、うちの父は養われた。

恩のある兄のマルクス主義がすごく父に浸透している。
既成の権力を打倒し、封建制を粉砕し、革命を標榜するのがマルクス主義者だが、父は皮肉なことに家庭では封建的で、独裁者だった。もっとも愚痴を言うだけで行動はしない。『赤旗』は取るけど行動をしない、というタイプだ。

小遣いはもらったことがない。生活面の質素さはマルクスの影響を受けていたのだが、それがとても嫌だった。

「テレビを見ると白痴になる」と言って、家にテレビはあったが、つけてはいけない雰囲気だった。ウルトラマン・シリーズもアニメも、僕は級友と話ができなかった。

僕は音楽がすごく好きで、音楽が自分にとってのドラッグのようなところがあった。

子どものころは小遣いももらえないから、うちにあるレコードを聴くしかない。父親と兄貴がクラシック・フリークで、クラシックのレコードはなんでもあった影響で、僕もクラシックに熱中した。家にはいいサウンドシステムもあった。僕はクラシックを聴きたいから聴くのではなく、家にあるものを片っ端から聴いていた。聴いているうちに好みの音楽にであった。バロック、バッハと古楽全般だ。

クラシックというと、教養的な趣味に囚（とら）われがちだが、僕はそういう姿勢で聴かず、快楽で聴いてきた。バッハは快楽だ。それは、どうやって音に全意識を持っていかれるかという

快感であり、その点でバッハの楽曲はすごく上手く展開していく。

父親はベートーヴェン、兄貴はシェーンベルク。僕はバッハ。部屋を暗くして、スピーカーのまえで膝をかかえて、「パルティータ」などを1枚終わるまでずーっと聴いていた。

これが、大人になったらドラッグを入れて、音楽を聴くようになった。子どもの頃はドラッグなしでもやっていたわけだ。

他の子どもたちがフィンガー5やダウンタウン・ブギウギバンドを熱心に聴き、歌っているとき、僕はバッハを聴いていた。さぞや風変わりな少年だったことだろう。

家族について

保育園のころ毎日、殴り合いの喧嘩(けんか)をしていたのが、僕にとっての一番古い記憶だ。こう見えても、あのころは猿山のボス争いみたいな戦いをしていたものだ。

小学校の頃は本の虫になって、図書館に入り浸っていた。テレビを見ないかわりに、図書館が唯一の娯楽だった。

世界の名作全集、児童文学全集を、片っ端から読み耽っていた。日野市の図書館は充実していて、落ちついて読めたので、借りられる上限まで借りて、あとは館内で読んでいた。

小学校低学年の頃が一番読んでいて、一日平均2冊、月60冊ぐらい読んでいた。

僕は極端だ。大学に入って映画にはまると年間400本観るし、ドラッグだと死ぬ寸前までやってしまう。

新聞は『朝日』、『毎日』、『産経』、『赤旗』をとっていた。父はそれを子供たちにも全部読めと命じていた。『読売』がない。アンチ読売なのだ。新聞で中央政界の動きをつかめというわけだ。

雑誌で買っていいのは『朝日ジャーナル』『現代の眼』『世界』『マスコミ評論』（後の『噂の眞相』）などで、バックナンバーが兄貴の部屋にズラリと揃っていた。

父のマルクスかぶれは嫌いだったけれど、知らず知らずのうちに僕も影響を受けていたのか、アンチ主義が根づき、絶対的に人気のあるもの、古いものでは、巨人、大鵬、たまご焼きというようなものが嫌いだった。

兄は父の支配下にあり、素直にガリ勉で、秀才だった。兄は奨学生としてソ連に短期留学したこともある。

僕も高校のとき「キューバに留学しろ」と言われていた。大事な青春をキューバで過ごすなんて、と必死に抵抗して断った。あの頃の僕は、キューバといえばサトウキビのイメージしかなく、ドラッグのイメージなんてなかったのだ。

僕のドラッグ初体験は、ニコチンは高1で、イリーガル・ドラッグと言えば、大学生のときニューヨークで大麻を吸ったのが初めてだった。たいそう気持ちよくなったものだ。ブルックリンのある人の家にいて、吸っているうちに気がついたらブルックリン橋を渡ってチャイナタウンにいた。ずいぶん歩いたなと思った。

父の信奉したマルクス主義は、公務員の世界に影響力が根強くあり、組合活動も盛んだった。そのせいか、兄はマスコミ志望だったのだろうが、民間企業に就職するのは断念して、教師の道を選んだ。

兄はいまだに独身だ。お見合いすればいい、と普通の家庭なら考えるだろうが、マルクス主義者の家では、お見合いなど、もっとも封建的で反動的なもので、してはならないものなのだ。

兄は、ドラッグは、まったくやったことがない。大麻も知らない。僕がこういう人間だということも知らない。ドラッグ云々(うんぬん)の前に、兄は童貞だと思う。そのぐらい自己の世界に閉じているのだ。

マンションも買っているが、女を寄せ付けないオーラをもっている。けっして醜男(ぶおとこ)じゃないのだけれど。

早紀が死んだときも、僕の心境をあまり理解できていなかったようだ。

僕が早紀の遺体を確認して、兄に連絡したときも、
「そうなの」
と言っただけだった。
あのときは混乱していたので、定かな記憶がないが「まあ、がんばれよ」と、付け加えたかもしれないが。
母は父の付属品というか、父がいないと生きていけない、自立できない人だ。本当は僕を援助したいのだけれど、父が怖くて、それができない。
お嬢さん育ちで、世間知らずで、弱い人だ。僕自身、現在、両親とはほぼ絶縁状態で、早紀が死んだときも、父親から親子の縁を切るに等しいことを言われた。それはいまでも僕の心に深く沈殿している。
父の言葉、それは――。
「これはおまえの問題だから、俺たちは無関係にしてくれ」

理解されたい

僕は実家にいた少年時代、僕の個性を無視したマルクス主義のスパルタ教育にうんざりし

ていた。親の愛は、あくまで自己愛のように感じられた。

何度も家出を繰り返し、そのたびに「極端だ」「キチガイだ」と罵られた。

少年期の僕はリンゴやキーウイ、サクランボを食べると、全身にじんましんが出た。花粉の季節には酷い鼻炎になった。アレルギー体質なのだ。

親に言わせるとそれらは全部「心の甘え」ということになった。

落ちつきがないということで脳波をとられたりもした。よく考えればADHDなのだが、結局はそれらも「甘え」の一言でかたづけられた。僕の両親は「甘え」に対して神経質だった。

しかし、僕は親に甘えた記憶がない。少年時代の僕は、「理解されたい！」という気持ちを抱えたまま苛立っていた。

そんな僕の「理解されたい！」というルサンチマンを、解消させてくれたのが早紀だった。

僕の個性をよく理解し、かつ右脳優位の感覚をとても評価してくれた。早紀のおかげで、僕はもう、「理解されたい」という甘えを卒業しかかっていたのだ。

この場合、「理解される」ということは、僕にとって「愛される」に等しかった。

そんな矢先の、早紀の死だった。

ビルの屋上から飛び降りる寸前まで行くほど、吉永嘉明は肉体から魂が離脱し地上にかろうじてとどまっていた。いつ早紀のあとを追ってしまってもおかしくなかった。

そんな時、僕を救ってくれたのは仲間たちだった。

東京はもとより広島や岡崎といった遠方からも友人たちが駆けつけてきて、ガチガチに緊張している僕のそばにいてくれた。

彼らは、早紀の死を悼むとともに僕の不安定な精神を少しでもほぐそうと、よれよれの僕の話し相手になってくれた。

「吉永は生きなくちゃだめだ！」

「ここで挫（くじ）けたら軽蔑するぞ！」

そうやって僕にハッパをかけてくれるのだった。

彼らは僕の両親や早紀の家族よりも、僕と早紀の関係を知っていた。そして、真っ先に生きている僕のことを心配してくれた。

僕が人間不信に陥らずになんとか「生きなくちゃ」「やり直さなくちゃ」と思えるようになったのは、ひとえに友人たちの存在があってのことだった。

その中でも特に妻を亡くすという、共通の体験をしてきたねこぢるの夫、山野一さんの心づかいとアドバイスが身に染みた。

2DK家賃17万円

「とにかくすぐ出て行くように――」

早紀のいなくなった部屋で、僕は彼女の父から言われた。

入居時の保証人だった早紀の父からそう言われれば、出て行くしかなかった。

僕はあわてて部屋を探した。フリーランスで肉親の保証人を立てられない男に、選択の余地はなかった。

早紀の荷物は彼女の実家の強い希望でほとんど返した。

書籍、CD、パソコンなどOA機器、そして洋服――。

あらためて整理してみると早紀はずいぶん衣装持ちだった。僕が買ってあげたものは数点しかない。ほとんどが僕と暮らし始める前、バブル期に自分で買ったりつき合っていたオヤジに買ってもらったりしたものばかりだ。

「変わった本が多いな……」

荷物の整理に来た早紀の父親がふと呟いた。ゲイやレズビアン関連の本を指してのことだった。

自分の本はほとんどを処分し、千枚ぐらいあるCDの多くは友人宅に送らせてもらった。
机や本棚、ベッドなどもすべて処分した。
かろうじて早紀が僕に買ってくれたもの、僕が彼女にプレゼントしたものなどは残った。
オーディオ&ヴィジュアルが大好きな僕の趣味をよくわかった上で、かなりマニアックに気張ったプレゼントだった。僕が手放しで喜ぶ姿を見て、こだわり派の早紀は、自分の見識眼を確認するのだった。

――早紀との思い出の品。

ポリゴンという名のプロ・ユースの12面体のスピーカー。電飾付きのマリア像。分厚い洋書の電子顕微鏡写真集『HEAVEN AND EARTH』。
サイケデリック・トランスのアラームが付いた腕時計。MDウォークマン。一点ものの万華鏡。テクノ系クラブ仕様の洋服。スクーターの新譜。ルキーノ・ヴィスコンティ監督の『ベニスに死す』DVD。

早紀と暮らした部屋は魂を抜かれた体内のように、僕の前にたたずんでいた。
ガランとした部屋を掃除しながら、このマンションに入居したときのことをふと思い出し

た。

不動産屋から戻ってきた早紀は、とても気が急いていた。

「早く、早く！　部屋見に行こう。9階でね、両隣がなくてルーフバルコニーなの」

浅草橋のその物件は、新築だった。確かに隣り合った部屋がなく、広々としたルーフバルコニーがついていた。2DKで家賃17万円。僕らには贅沢だったけど、ここに決めた。早紀が全身で、「この部屋に住みたい」と言っていたから。

しみったれたことは言えなかった。貯金もあるし、なんとかなるだろう。

まだからっぽのその部屋で、携帯用のサウンドシステムで音をかけた。ハルシノジェンの『ツイステッド』。

「ここならずいぶん音だせるね」

早紀はそう言いながら、笑顔でピョコピョコ踊ってた。二人は希望にあふれていた。

あれから7年——。

早紀が死んでから1か月ほどで引っ越しは完了した。

情緒不安定

いまは、保証人、敷金、礼金などはいらずで、家賃4万6千円、ガスも水道もない調布の外人ハウスの一室に入居している。

クーラーがないので、２００３年の夏の連日35度を超える暑さは、そうとうこたえた。

一時期、音信不通になって、担当編集者の赤田さんが心配して、部屋までやってきてくれたほどだ。

食欲がなかったせいもあって、満足な食事もせず栄養失調に陥り、あやうく死にかけるところだった。

妻を亡くし、貯金を使い果たし、丸裸の状態でついでに鬱病を抱えて、7年ぶりに独り暮らしに戻った。

早紀の死からまだ立ち直れなかったが、新しい部屋に早く馴染み、一からスタートしたかった。

ところが――。

僕は新しい部屋に馴染めず、よけい情緒不安定になった。

じっとしていられなくて、地団駄を踏みつづける。なにかに集中して気を紛らわせたいのだが、本を手に取っても、音楽をかけても、まるで上の空でなにかに追い立てられるような不安な気持ちが続いた。全身が緊張していた。

以前から仕事を通して知り合いだった精神科医に相談してみると、もともと躁鬱気質のあるところへ愛妻の自殺という大きなショックを受け、一種の「葬式躁病」になっているのだろう、ということだった。葬式の時に急に躁状態になってしまう人もまれにいる。

僕は正式に患者にしてもらい、抗精神薬の処方を受けるようになった。

抗鬱薬と抗不安薬を規定量飲み始めた頃から、そわそわ感が緩和されてきて、逆に心身共にぐったりするようになった。なにか張りつめていた心の心棒が折れてしまったような感じで気持ちは沈み、鬱々とするばかりだった。

一人になったある夜、破滅がとうとう僕に手招きをしだした。

部屋に馴染めずにどうにも緊張がとまらなくて自律神経が乱れてきた。

自分の存在が希薄になっていく。

危ない……。

助けてくれ……。

誰か！

せっかく僕は生きようとしているのに、やっぱり僕は、僕は、生きていてはいけないのか⁉

狂いそうだ！

叫びだしそうだ。
パニックに陥った。
汗が滝のように流れてくる。
息が荒くなり、心臓の破裂しそうな鼓動だけが響いてくる。
頭の芯が空洞になり、自分がいったいどこにいるのかわからなくなってくる。
ああ……。
落下する。
堕ちていく。
どうなってしまうんだ!?
ああ…………。
苦しい。
早紀、助けてくれ。
早紀……。
早紀！
僕は、僕は……。
発狂しそうになった。

友人たち

僕はねこぢるの夫、山野一さんに電話した。
山野さんが出るまで、気の遠くなるような時間の流れだった。
留守なのだろうか。出てくれ。このままだと、僕はどうにかなってしまう。
もしもし。もしもし。…………。
山野さんの声がする。
「どうにも落ちつかないんです。つらいです」
僕がやっと声を出した。
すると、山野さんが答えてくれた。
「だいぶ鬱が入ってますね。僕もたまらなく落ちつかないときがありましたよ。電車とかに乗る余裕はないでしょ。今から車ですぐ迎えに行きますので待っててください。必ず行きますから」
山野さんの声を聞くと、不思議なことに、それまで自分にのしかかってきた恐怖が徐々に薄れていくのがわかった。

山野さんが本当に来てくれた。

そして彼の家に連れていってくれた。

緊張は相変わらずだけど、心強かった。自律神経が乱れて体温調節機能が狂い、もの凄く寒く感じている僕の様子をみて、すぐに風呂を沸かしてくれた。

「薬は飲んでますか？」

「あ、ええ」

「落ちつかないんですか？」

「そうなんです」

「なにかに集中したほうがいいかも知れないですね。ビデオでも借りてきて見ましょうか」

僕らは、『星の王子ニューヨークへ行く』というエディ・マーフィの映画を観た。ねこぢるが一番好きなコメディ映画だったそうだ。あからさまに娯楽的によく出来ている、毒のまったくない作品だった。

「こういうときはこんなのがいいんじゃないですか。今、『未来世紀ブラジル』観ても、ちょっとつらいでしょうから」

まったくその通りだった。僕は2時間の映画が終わると、だいぶ落ちつきを取り戻していた。

その日は泊めてもらい、翌日には柄にもなく、フリスビーをやった。山野さんの提案だった。彼は僕の落ち込みを見て、健全なほうへナヴィゲートしてくれているのだ。

その後も僕の感情が壊れてくると、電話して相手をしてもらった。彼は情に流されすぎず、常に冷静に対応してくれた。僕が健忘している時にも、

「ああ。その話は昨日も聞きましたね。ちょっと繰り返してるみたいですよ。メモはとってますか？」

といったように、僕の心が壊れかけていることに違和感を感じさせずに対応してくれた。

僕のパニックに動じない彼の態度は、とても心強かった。

「早紀さんはきっと、ねこぢると同じとこ行ってますよ。仲よかったから。大丈夫ですよ。僕ら死ねずにヒイコラ生きてる庶民を、高みから見物して笑ってますよ」

救われる思いがした。

6年前にねこぢるが亡くなったとき、僕は山野さんの気持ちが理解できていなかったことを思い知った。

早紀を失うまで、同じ屋根の下に暮らす妻を亡くすということが、ここまでダメージがあるものとは想像できていなかった。

僕が早紀のことを思い出して涙声になって話していると、こんなことを言われた。

「もう半年たつのに吉永さんは優しいですね。僕は正直、半年たったあたりではもう少しクールになっていて、ねこぢるもわがままだったと思ったりしていました。吉永さんはセンチメンタルですよ。センチメンタルすぎるぐらいですよ」

センチメンタルというのは緩和表現で、「まだ泣いてるのか。しっかりしろ」と言いたかったのだろう。

山野さんは左脳優位の秀才タイプだ。その彼が右脳一直線のねこぢると暮らすことにより、ある意味鍛えられて、右能優位の人間の感情をよく理解する人となった。僕の感覚的な言葉を受けて、それをもっと一般的な言葉に正確に置きかえて、リターンしてくれる。まるで翻訳者のようだった。妻を自殺で亡くして慟哭するという経験もし、そして今では立ち直っている。僕のお手本のような存在だった。

僕が早紀と暮らすようになったとき、「吉永さんをどうかよろしくお願いします」と山野さんに言われた、と後で早紀から聞いた。

山野さんは、右脳優位の僕の危なっかしさを危惧（きぐ）してくれていたのだと思う。

早紀の死は悲しい出来事だったが、今、僕が自殺しても喜ぶ人がいない。逆に、悲しむ人や、「軽蔑する」と言ってくれた人がいる。彼らの手前、自殺なんかできないと思った。借りを返さなくちゃと思った。友人に軽蔑されることは、死ぬことより怖いと思った。

山野さんをはじめ友人たちの存在が、早紀という命綱を失った僕の今の命綱になっているんだと気づいた。

友達訪ね歩き旅

妻を自殺で亡くした男は、そう簡単に立ち直れそうもなかった。男とはなんて意気地のない生き物なのだろう。どうしようもなく人恋しくなって、地方在住の友達を訪ね歩く旅にも出た。寂しくて仕方がなかったのだ。

ぐったりとして覇気のない僕を、友人たちは温かく迎え、話し相手になってくれた。酒を飲めない僕は、安定剤の効果で心身がゆるゆるとなりながら、消極的な相槌(あいづち)をうつ。張り切って喋ろうとすると舌がもつれて言葉がラリッた。きちんと喋ろうとすればするほど舌がもつれた。

20代の頃から大麻をはじめとした各種ドラッグの酩酊はさんざん経験してきたが、安定剤でラリッたのは初めてのことだった。それは酩酊とかいう心地いいものでは決してなく、思った通りに言葉が出ないもどかしさを感じた。

印象的な夜がある。

広島在住、ライターのカバチ侯爵（ペンネーム）の事務所で、やはりライターで青山正明さんとも一緒に仕事をしていた五庵保典さんたちと寛いだ。

彼らの友人も3人ほど集まってきた。みんな音楽好きで、いろんな音を聴いた。

「吉永さん、何かかけるものある？」

カバチ侯爵に促されて、僕は持参していた『トーキョー・ゲット・プッシー』のCDを渡した。女の子のボーカル（英語）をフィーチャーした「泣き」の強いセンチメンタルなハッピー・トランスだ。それを聴いたひとりの男性が、「こういうのが好きやったら、これが合うかもしれん」と言って、自分で作ったという曲のサンプルCDをかけてくれた。やはり女の子のボーカル（日本語）をフィーチャーした優しい感じのセンチメンタルなポップスだった。

大人にはずっとなりたくはなかったんだけれど、そうも言ってられないと大人になって気づく。なにかが変わる瞬間に、目を瞑らないでね♪

僕が聴き入っている様子を見て、そのCDの持ち主が言った。

「これ、やる」――ぶっきらぼうだが、優しい人だった。
僕はこのCDが気に入って、外人ハウスの一室でよく聴いていた。聴いていると、自然に涙があふれてきた。
友達がいて本当によかったと思う。
彼らはなぜ僕に親身になってくれるのか。それは僕が弱っているから。友達だから。友達の友達だからだ。

仕事に依存する

ラリッた果ての友達訪ね歩きの旅は、感銘深いものとなった。からっけつの状態で東京に戻る。
葬式躁病が治まった僕は、鬱状態にもどった。それを安定剤でゆるくして、なんとか平常心を保とうとする。でも、安定剤を飲んでもニュートラルより少しダウンしたぐらいの状態にしかならない。しかも少しラリる。
「先生、ちょっとラリるんですけど。仕事が捗(はかど)らないし体裁も悪いので、もっとアッパーな薬に変えてくれませんか……」

主治医に電話で相談してみた。

すると、こんなことを言われた。

「まだ早いよ。それより今は緊張を緩和させ、精神を安定させることが重要なんだ。食べて眠れるようになることが先決。これはまず体を救う処方なんだよ」

早紀の死後１か月ばかりは、ほとんど眠れずに、気絶するように睡眠をとっていた。食欲もまったくなく、固形のものは一切食べてなかった。ウイダーｉｎゼリーとポカリスエットしか摂取してなかった。

それが確かに、少しだがちゃんと横になって眠れるようになってきていた。積極的な食欲は湧かないが、時間がくれば黙々と食べるようにもなった。主治医の戦略は正しいのかもしれない。そう思って薬を飲み続けた。

安定剤を飲み、ゆっくりぐったりとなっている僕を見て、多くの友人たちが、「それでいいんだよ」と言ってくれたが、中にはそんな僕を見て、感心しない人もいた。

曰く、「見ていてこっちまで情けなくなる。今こそシャッキリしなくちゃダメ！」

そう励ます彼女は、交際相手の男性と別れる別れないでドロドロの関係に陥った時、鬱状態を興奮系の薬でシャッキリさせて乗り切ったのだという。その経験から僕にもそれを勧めてくるのだった。

少々乱暴なやり方に思えるけど、彼女なりの思いやりからくるアドバイスなのだった。現実は時として厳しい。みんなそれぞれの方法で危機をクリアしつつなんとか生きているのだ。「楽しい」「嬉しい」「美味しい」という感情が希薄になり、性欲や物欲をほとんど喪失し、安定剤でゆるゆるになりながらなんとか重い鬱状態になることを避けている。

机に向かっても、いつの間にか早紀の写真を見ては、めそめそしている。

そんな状態でまずやるべきことは、この本の原稿書きだった。

いつまでも友達に甘え続けるわけにもいかない。なにより経済危機に瀕しているので、まずは仕事をしないといけない。

サウンドシステムを繋げ、仕事に必要な書籍とダンボール2箱分だけ持ってきていたCDを本棚に並べた。僕は、仕事をはじめ、なにをするにも音楽をかけっぱなしにする習慣がある。

そんな部屋で僕は、この本の原稿を書き始めた。僕にはもう、それしかなかった。状況的にも経済的にも仕事依存にならざるを得なくなった。

そこまで追い詰められるまで、なぜ、気がつかないのか、情けなくなったが。

生まれて初めて、まとまったお金を借りた。

このままだと僕はだらしなくなると思って、鬱状態でもとにかく仕事、原稿を書こうと思

うようになった。

日銭が入らないから、週の半分コンビニでバイトをしている。

日中コンビニでアルバイトをして、夜、家に帰ってきて原稿を書く。そういう切り替えができるようになった。少しずつだが、僕は復帰していく。少しずつ――。

ループ

夜中、ふと音がして目を覚ます。

「あ、早紀が帰ってきた」

朦朧（もうろう）とした意識で一瞬そう思う。

「お帰り！」

そう言おうとして体を起こしたところで気づく。ここは早紀のお城だったマンションではなく、僕がひとりで住んでいる六畳一間の部屋なのだった。

こんな錯覚が何度も何度もあった。

現実は――早紀が死んでもう半年以上がたっていたのに、僕にはまだ2、3日前のことのように感じられた。時の流れが実感できなかった。

検視を待つ早紀の遺体がつい先日のことのように思い出される。安らかに眠っているように見えた。呼べば答えるような気がした。

「王さま、王さま～」

ちょっと不安げな早紀の、僕を呼ぶ声が聞こえる。

早紀。僕はここにいるよ。安心していいんだよ。安心して……。もう大丈夫だよ。

今、原稿書きに取り組んでいても、スラスラと書けているわけではない。気持ちの整理が全然ついていないので、ちょっと書いては筆を止め、早紀の写真を眺めたりする。

写真嫌いだった彼女の残された写真は少ない。写真を見ているといろいろ思い出す。新潟の大沢山温泉に行った時。冬だったのでコートを着た早紀が山道でこちらを向いて立っている。コートのフードを被った姿が可愛らしい。この時は細い山道を探索している時に、前方から小型トラックと数匹の犬が走ってきた。犬には鎖もなにも付いていなかった。早紀は途端に体を強張らせて怯えた。

「犬に襲われる！」

実際には散歩中の、人間によく慣れたおとなしい犬だったけど、早紀の怯えっぷりが思い出される。こわがり屋の可愛い娘だった。写真を見ているといつも気丈な早紀のそんながんぜないシーンが思い出される――すると、また涙がとめどなく出てきた。

早紀がクラブに行っていた時のファッションを上から下までコーディネイトして壁に飾る。早紀が好きだったキリスト教の御絵を大きいのから小さいのまでありったけ壁に貼る。
「悲しみこそ我がドラッグ」
「死なれないとわからなかったことがある。気づいた時にはもう手遅れだ」
「とりかえしがつかない」
「早紀とアムステルダムに行きたい」
「早紀ともう一度屋久島に行きたい」
「早紀、安心だよ。安心」
「神さま、早紀ちゃんを返してください」
そこらじゅうになぐり書きをする。
その上から仕事のＦＡＸやら原稿の構成メモやらを貼っ付けていく。隙間にはトランス系のサイケなフライヤーをペタペタ貼る。
六畳一間の空間は、しまいには雑多でかつ未練がましい様相を呈していた。
僕は今まで、原稿を書いたら真っ先に早紀に読んでもらっていた。そして、感想なり意見なりを聞いたものだ。早紀は、一番の読者であり、編集者であり、先生でもあった。そんな存在を失って、僕の原稿はまとまりのないまま同じフレーズがループした。ずいぶん心もと

ない心境だ。
こんな調子なので原稿の進捗状況はあまり芳しくないが、それでもなんとかして書き上げなければならない。

バッド・トリップ

今から2年前、伊豆で行われたレイヴ（オールナイトの野外ダンス・パーティ）に参加した時のことだ。
僕は締め切りを抱え徹夜続きで出かけたので、コンディションが最悪だった。そんなときにひょんなことから止めて久しいドラッグ＝ＬＳＤを摂取してしまった。サイケデリクスであるところのＬＳＤの効き方は、そのときのコンディションや環境によって大きく左右される。
案の定、僕はバッド・トリップにはまり、頭の中に閉じ込められてつらいヴィジョンを見つづけた。
こうなると誰も助けられない。自分の精神力で悲鳴をあげるのをふせぐしかない。ひたすらケミカルの作用が抜けるまで耐えなくてはいけない。その状態はまさに無間地獄だ。

パーティが終わってもバッドな状態が続き、東京への帰途、電車のチケットも買えない僕は、友人のニコラス啓司さんに付き添われるようにして帰ってきた。新幹線の車内でなんとか震える手で早紀に電話して、僕の状態を告げた。

真っ暗な宇宙にひとり投げ出された最悪の状態だ。

汗が滲み出てくる。時間がなかなか進まない。

やっと東京駅に到着した。群衆のなか、僕は誰にも見向きもされない孤独な存在だった。

バッド・トリップはまだつづく。つらい。もう限界だ。

僕は群衆のなかに、ひとりの女性を発見した。

東京駅の改札に妻が待っていてくれた。

その姿を見たときは、どんなに心強かったことか。

友人からバトンタッチされるように、僕は早紀と一緒に帰途についた。早紀に手を引かれるようにして。

彼女と手を繋いだ瞬間、それまで耐えていたものがせきを切り、涙があふれ出た。

早紀は微笑んでいた。

そのときの僕らは、とても怖い思いをして泣きじゃくる子供と、その手を引く優しい母親のようだったろう。

でも、もう早紀はいない。

僕の手を引いてくれる存在は、この世からいなくなってしまった。これからは誰にも頼らず自分ひとりで危機を乗りきらなくてはいけない。当たり前のことなのだけど、あのとき早紀と繋いだ手の感触が忘れられない。

思い出すととても切ない。

どうして死んじゃいけないの？

僕が今まで作ってきた本がたくさん揃っている、とある下町のヘッドショップ兼バーみたいな店を訪れる回数が増えていった。

ここでは店員も客も、みんな僕が作ってきた本、『危ない1号』や『サイケデリック＆トランス』を読んでいて、気安く僕に接してくれた。

『ＢＵＲＳＴ　ＨＩＧＨ』に書いている僕の小説まで読んでいる女の子もいた。

「こんなに読者がいたのか」という感覚は、寂しい僕の心をほんの少し癒してくれる。

僕の元気のない姿を見て、優しくＨＵＧしてくれる女の子もいた。

自分の家に招待してくれる子もいた。行ってみるとそこは、雑然とした部屋の中のあちこ

ちに人がたむろしている外人ハウス状態だった。それぞれみんな好きにしている。全員が友人というわけでもなく、顔見知り程度の、一種あやふやな関係のようだ。

店によく来る若い女の子と話をした。

まだ二十歳そこそこなのに、妙にふてぶてしい落ちつきのある娘だった。

沖縄から出てきて、今はその店の店長をしている、やはり20代前半の女の子の家に居候しているとのこと。

僕もかつて一度訪れた、部屋中に居候がいる外人ハウス然としたあの部屋だ。

職にはついていないが、学生というわけでもないらしい。目の大きい、細面で小柄で華奢（きゃしゃ）な子だが、どこか朗（ほが）らかでないというか、無理して落ちついた感じに振る舞っているような印象だ。口調は穏やかで、いや穏やか過ぎるぐらいで、内面にエキセントリックな気質を抱えているような気もする。

ふと僕の視線が彼女の子供のように細い左の手首にとまる。無数のためらい傷があった。

僕がそのことに気づいても、特にあわてる素振りもなく、むしろ誇らしげに傷痕（きずあと）をみせてくる。それがきっかけで、話の内容が自殺に及んだ。

「妻が……自殺したばかりなんだ」

と言っても、なんのショックも受けていないようだった。

店備え付けの雑誌『BURST HIGH』の連載ページで書いた、早紀の死にふれている文章を見せた。まだ直後の緊張していた頃に書いたものだ。
「どう思う?」
「ああ。ダメ。あなたは自殺を止めたい人なんでしょ。だったら〝死に顔が落ちついた表情をしていた〟とか〝綺麗だった〟とか書いちゃダメ。真似する人が出てくるから。それに、自殺したい人を止められると思うのは、どうかと思う。止める権利なんか誰にもないんじゃないかしら」
「いや、自殺っていうのはやっぱりエゴだよ」
「だったら自殺して欲しくないっていうのもエゴなんじゃないの」
「そうすんなり言われちゃかなわないな。こっちは堪らない気持ちなんだぜ」
「でも、そうでしょ。どっちもエゴなのよ。自殺を止めようなんて、少し考えが甘いと思うわ」
僕には、「どうして死んじゃいけないの?」という問いに対して明確な答えが出せない。「死んではいけない」ということを論理的に巧く説明できない。
自死するのはその人の権利であり、むしろ止めようとするほうがエゴだと言われてしまう。理屈でこれをひっくり返せない。

「……じゃあさ、さっき脈が止まったことが2回あるとか言ってたけど、どうして君はそんなことするの？　本当に死にたいの？　それともスリルみたいなものなのかな」

この質問には、彼女は口許にわずかに笑いを浮かべ、なにも答えなかった。

「どうせ腐った世の中なんだ。いいことなんかありゃしない。醜く、世知辛く、ぶざまに世渡りをしていくことが正解とは思えないわ」ぐらい言い返してくれてもよさそうなのだが。とにかく、彼女は明確な理由もなく自殺未遂を繰り返しながら生きているようなのだ。そして、脈が止まった体験を誇らしげに思っているようだ。

僕は情けなかった。こんな二十歳そこそこのプータローの女の子でさえ、「死ぬのは良くない」とオルグできないのだ。

脈が止まったという経験が、彼女をふてぶてしくさせているのかもしれない。

バンジージャンプやスカイダイビングのようなスリルと興奮がそこにはあるのかもしれない。

そんな彼女だが、最近になってアパレル系の専門学校に行きたいと言い始めた。

「専門学校に入ったら、自殺（未遂？）しなくなると思う？」

「それはわからない。いつまた死にたくなるかはわからない。でも、それは私の自由だから」

僕は彼女のボーイフレンドに同情したくなった。

「彼氏はいるの？」

「ううん。今はいいの。アパレルのほうが大事だから」

少しホッとした。あまり彼女の内面を深く知りたいとは思わなかった。知りたくなかった。早紀の死で僕は他人の心に深く入り込み、いろいろ詮索したり、悩んだり、同情したりするのが、怖くなっていたのだろう。

自殺で肉親を失った人たちが集う自助グループの存在は新聞で知っていた。でも、僕は友人と会うことで心の均衡を保とうとしていた。

しかし友人たちもみんな忙しい。ある女性は、「人と会って癒そうなんて考えが甘いわ。ひとりでやらなくちゃ。インターネットでもやったらいいのに」と助言してくれた。

厳しいがその通りかもしれない。毎日のように人と会って食事をするなんて不可能なのだ。

家に帰りたくない、ひとりになりたくない僕は、どうしても他人との交流を求めてしまう。僕はねこぢるの夫である山野さんのように、ひとりで自閉して癒すタイプではない。

こんな僕を受け入れてくれる場はどこなのか。そう思っていたが、居場所を見つけるよりも先に、僕はあの沖縄出身でアパレルの専門学校志望の彼女を論破するくらい、ちゃんとした本を仕上げなければならない。

この頃、やっとそう思えるようになっている。

熱中できるもの

経済的に破綻しかけた僕は、とにかく働かなければならなかった。
過去にとらわれてはいられなくなっていた。
青山正明さんとの共同作業だった『危ない1号』は、もうない。
今の僕は『危ない1号』ではなく、「ポンコツ1号」だ。
そうだ。やりたいのはポンコツだ。
ポンコツな本を作りたい。思いっきりダメなポンコツな本を。
ダメ人間の僕が、いかにして生きるかってことを、こつこつ作っていくしかない。
それが出来たら、そのあと『ごきげん1号』なんていう本を作ればいい。
老後は身も蓋もなく楽しくいこうよ、という本だ。そういうプランが頭の中に浮かんできた。

余裕ができたらスポーツ・ジムに通って、基礎的なエクササイズをしながら、最終的な目標は山登りにしよう。もっともいまの体力じゃできない。

温泉にも浸かりたい。ＬＳＤと大麻をぶち込んで、ゴア・トランスのパーティで一日中騒ぐ日々はもう終わった。その代わりに山と温泉というテーマを考えている。もちろん今度はノン・ドラッグでだ。ノン・ドラッグでハイになるのが大人なんだと思う。

やはり「ハイ」は天然がいい。だから、山と温泉というと少し枯れた印象を受けるかもしれないが、僕の頭にあるプランは、ドラッグを突っ込んだのと同じか、それ以上ハイになるものであって、決して枯れてはいない。

法は守るが、いくつになっても不良でいたい。不良が山と温泉でいかにハイになるか。いまどきレイヴに行くよりも、そっちを考えたほうが前向きだと思うのだ。

楽しみのスタイルがないと、ハマっているものがないと、なんのために生きているのか、という気持ちになるので、僕はあらためて熱中できるものを持とうと思う。

千人以上の自殺遺族のカウンセリングを行ってきた、米の臨床心理学者によると、「遺族の多くは、人間や世の中を信頼できなくなっている」ということらしい。

でも僕は逆だ。人間を信じなくて、どうして生きていけるだろう。

遺族という立場に立たされた今、他人のせいにせず、自分の問題として早紀の死を一生かかえていくべきなのだ。

とても苦しいけど、僕は逃げたくなかった。

早紀は帰ってくる

ねこぢる、青山正明さん、巽早紀、そして僕。
みんなバブル世代だ。
バブル期に青年であり、なんの不自由もなく、少なくとも物理的には生きてきた。そして、一風変わった個性を生かし、出版業界の片隅で仕事をしてきた。『危ない1号』の周辺でカルチャーを飯の種にして、サブカル・バブル末期をそれなりに謳歌してきた。
個々に固有のキャラクターがあり、生きることへの取り組み方も違っているので、単純に世代で括るのは妥当とは言えない。また、追い詰められての自殺と、望んでの自殺という違いもある。けれど、大不況の最中の息苦しい世の中に悲観し、生きづらい世の中だと感じていたところは共通しているだろう。
要領とかは関係なく勢いで生きてこられた者たちにとって、今現在の世の中が、とてもシビアであり希望の持てない状況であるということ。だから、ここらで死んでしまうのも「よし」とする、そんな風潮があるのではないか。
これからはサバイバルの時代だ。しぶとい者しか生き残れない世の中だ。

僕も、最愛の妻の死、経済破綻、肉親との絶縁というどん底にある。今まで考えもしなかった将来への展望をシミュレートしてみると、明るい要素は、なにひとつ考えられない。自死していった人たちは、僕などよりずっと早く将来を憂え、悲観していたのかもしれない。

僕が一番甘かった。

「東へ行けば、蓬萊（ほうらい）がある」

——こういう妄想を早紀はファンタジーと言って、たいへん好んだ。

「南へ行けば、男はみんなゲイで、女は気品と教養と礼節を持っている」

——早紀は、現実以外のイメージを持っていた。それは「こうあってほしい」「こうあるべきだ」という欲求から来ていたのだろう。

ただ、彼女はファンタジーの世界に埋没せず「みんなの世界」に適応しようとしていた。随分努力はしていた。でも、これがなかなか大変なのだ。「世の中みんなバカばっかり」なわけだから。

早紀が心に持っていたイメージとはどんなものだったのか。そのイメージと現実とのギャップに悩み、結局自分のイメージの世界へと戻っていったのではないか。「イメージの世界」は、言ってみればブラフマンとアートマンが一体化した、その人だけの世界だ。僕は早紀の「イメージの世界」へのパスポートを持っていない。だからもう彼女には会えない。絶対に。

ねこぢるも早紀も決して将来を楽観してはいなかった。いや、たぶん物凄く悲観的なヴィジョンをもっていたんだと思う。それに気づかなかった僕は、バカモノだ。

「生きる」ということはとても過酷でしんどい。正直、僕は今、そう感じる。

世のなか最悪で、人間はバカモノばかりだ。

そんな世のなかで、生きるとはどういうことなのだろうか。

僕はねこぢると話して、とても楽しかった。青山さんと仕事できて、とても勉強になった。

そして早紀との恋愛は、至上のものだった。みんな、生きていたから得られた幸福だ。

だから僕は生きる。

現状も先行きも真っ暗のどん底だ。

でも僕は、生きようと思う。いい仕事がしたい。これからが人生の本番のような気持ちでやっていく。

僕にはいまだに「死ねる人」というねこぢるや巽早紀の心情が理解しかねる。理解できないことに、僕は少し安心もしている。

いずれにせよ死んでしまった人は二度と返らない。とりかえしがつかない。だから僕は妄想する。早紀は帰ってくる。僕が懸命に仕事して、精一杯生きていれば、早紀はきっと帰ってくる。

また逢える日がくる。

『THE AGE OF LOVE』

2004年7月某日。群馬の山中で行われたレイヴに行った。妻が死んでから初めての、この種のパーティ参加だった。
最近はやんちゃな若者の間でレイヴ&トランス流行り(ばやり)で、1万人も集めるビッグ・パーティもあり、その客層も、僕がよく行っていた10年前とはまったく様変わりしている。つまりオーバーグラウンドになってしまったということだ。
こうなるとはっきり言って、喧嘩やナンパの横行するバカ騒ぎにすぎず、純粋に音楽やトランスを目的とした人には場違いなものとなっている。
しかし、かつてはレイヴといえばアンダーグラウンドなもので、そういうことに目ざとい、濃い連中の集まる先鋭的な場であり、本当にサイケデリックな空間だった。
僕が参加したパーティは、情報誌などにインフォメーションを載せず、あえてクローズドな方式で、500人限定で行われたので、昔の雰囲気が再現され、僕のような古株からすると、とても感じのいいパーティになっていた。

会場に行ってみると、昔からの友人がたくさん来ていて、なにやら同窓会のような甘酸っぱくも懐かしい気持ちになった。

僕は少しだけひとりで踊った。ＤＪはＲＡＹという古株というか大御所で、音は懐かしのメロディならぬジャーマン・トランスだった。リズムに体を合わせながらゆるゆると反復運動をしていると、ふと無心になれた。そして、気がついたら涙が出ていた。

妻を思い出して泣くときの涙とは違う、悲しみではなくもっと温かい涙だった。妻と出会う前、よくレイヴに行っていた頃に経験した感動の涙だった。

僕の気持ちは一気に10年前に戻った。

そんな状態で場内をふらついていると、ふと会場の一角になにやらコテコテにデコレーションされたテントがあるのが目に入った。キリスト教の女神や天使の絵がある。さまざまなグッズに混じって、本が何冊か置いてあった。そしてなんと、『ＴＨＥ　ＡＧＥ　ＯＦ　ＬＯＶＥ』という、ジャーマン・トランスに属する曲で、僕がここ10年でいちばん感情を動かされたレコードが飾ってあった。早紀ともよくいっしょに聴いていた曲だ。僕が「テクノでは、この曲が一番！」と言うと、その通りだと肯定してくれたものだ。

「えっ……？」

もう一度よくそれらを見てみた。本があるな、と思ったのは、ピンク映画を特集したムッ

クや、黄色いビニールに包まれた「ドラッグ特集」のムックだった。
みんな亡き妻が作った本じゃないか！
視線をコラージュされている女神の写真にとめた。すると女神たちのなかにさりげなく早紀の写真が1点、混ぜてあった！
「ああ……そうだったのか！」
僕はようやく気がついた。これは、早紀の祭壇だった。僕に知らせずにオーガナイザーやスタッフたちが企画し、早紀の元同僚で友人のニコラス啓司さんがひとりで全部コーディネイトしたものだった。
そうとは知らなかった僕は、言葉もなく、またもやボロボロと涙を流した。
初めて見る早紀の写真を前に、ぼうぜんと立ちすくんだ。やはり悲しみではない、温かい涙が止めどなく流れた。こんな形で早紀を追悼してくれるなんて、なんと心憎いんだろう。
そして、なんと優しいのだろう！
言葉ではなく祭壇で表現することで、メッセージは、より強く感じられた。
そして、「もういいかげん悲しみに溺れるのはやめよう。現実を生きよう。原稿を仕上げよう」という気持ちになった。人の優しさが身に染みて、スランプだった自分がとても恥ずかしく思えてきた。

僕はこのレイヴで、なにかひとつ吹っ切れたような気がした。なにより、早紀が死んで以降、悲しみの涙しか流してこなかった僕に、感動の涙が蘇ったことは大きな体験だった。

「感情が戻ってきている！」

そう感じられた僕は、生きることが出来るような気がした。

いや、絶対に生きる。そう思った。

これから

僕は今回の本で、ひとりでも自殺者が減ることを心の底から願っている。

残された者の気持ちを書いておくことで、たとえわずかでも自殺が回避できればいいと思う。

本書でいちばん伝えたいことは、「自殺はとりかえしがつかない」という僕の今の気持ちだ。

日本では1998年以降、年に3万人以上が自殺で亡くなっているという。

僕は自殺予備軍たちに伝えたい。

「ちょっと待ってくれ。君が死ぬことでとりかえしのつかない気持ちになる人はいやしない

か――」

僕は、バブルに浮かれて遊びすぎた。その後鬱病を理由に、甘えすぎた。怠惰になり過ぎた。でも鬱病なんて、ただの甘えかもしれない。今回の件で自責することにより、ようやくそう気づいたのだった。

そしていま、妻に「ごめんなさい」が言いたい。無性に。

でも、肝心の相手がいない。死んでしまった。「ごめんなさい」は宙ぶらりんのまま。ほんとうに、とりかえしがつかない。

いまはただ孤独という言葉が心臓に突き刺さってくる日々だ。

でも、肝心なのはこれからどう生きるかであり、早紀に頼ることなく自分ひとりで道を切り開いていくことだ。感情ではまだ早紀と恋愛している感覚だけど、そこを踏ん張って理性で生きるしかない。

もう、命綱はない。いや、友人や借金が僕の今現在の命綱なのだろう。そして、どんなにつらくても、生きることが定められているのだ、そう思い込むことにした。決して安楽な道のりとは言えないにしろ、とても厳しい道程に違いないにしろ、それしかなかった。

近しい人の遺族は、3年ぐらい経つと、もう泣かなくなる人が多いという。いいことも悪いことも、いずれ忘却できる。全部憶えていたら、生きていけるわけがない。

でも、僕はねこぢるのことも、青山さんのことも、そして巽早紀のことも忘れない。断じて。

今、月日の経過とともに段々冷静になっていく自分が怖い。死んでいった人のことを風化させたくない。たとえ苦しくても、寂しくても、心に彼らを抱えたまま、生きていきたい。

僕には「早紀」という絶対の理解者がいる。死んだいまでも心の中に確かに存在する。だから、自信を持とう。「あなたは私が選んだ男なのよ！」。早紀の言葉を信じよう。そうすればきっとなにかできる。本が作れる。

そして、できるならば早紀が生きていたら喜びそうな、そんな本を書いていきたい。

彼女に見せられるような仕事ができたなら、空を見上げよう。

そこにはきっと、早紀の姿が女神のように映っているだろう。

いろいろゴメンね、早紀。僕は生きるよ。君が見ているつもりで生きていくよ。

だからどうか、「さよなら」は言わないでほしい。

そんな寂しい言葉、聞きたくない。

早紀。僕を見守ってほしい。

これからも一緒に生きていこう。

じゃあ。

早紀。
また逢おう。
愛してる。
死んでも、愛してる。

P.S. 本書で前に書いた、下町のヘッドショップ兼バーで話をした、沖縄出身で自傷癖のある女の子が、また自殺をはかった。今回は睡眠薬の過剰摂取だったが、なんとか生き延びた。僕は今回の本を、彼女に渡そうと思う。そして「生きる」ことを考えてほしいと願っている。
「死ぬ」なんて言わないで、生きようよ。そういう気持ちで本書を書きました。

大切な人に死なれるということ

親友だったねこぢる。長年の仕事仲間であり、兄貴分だった青山正明さん。そして編集者であり愛する妻・巽早紀――。この3人の自殺に至るまでの経過を僕の知る限りにおいて書こうと思った。ライターである僕は、まだ精神が不安定な状態で書くことで、少しでも気持ちの整理をつけたかった。

僕は本書で、「死の理由」を探るよりも、死なれた側の気持ちに重きをおいて書きたかった。友人に、同僚に、妻に死なれるということはどういうことか。どんな気持ちになるのか。「死ぬほうが楽だから死ぬ」――こういう人に向けて僕は、残された側の気持ちを伝えることにより、もう一度「生死」を考えてほしかった。

ひょっとしたら「残されて生きる」ことは、死ぬよりもつらいのではないか？

いや、きっとそうだ。生きるのは、とてもしんどい。

それでも、「死ぬほうが楽だから死ぬ」という、ある意味合理的な姿勢を、僕は理屈ではなく、感情で否定したい。つらいけれども生きる。それが僕の選んだ道だ。なぜなら、死なれると本当に悲しいのだ。生きるということは、つらいけれども喜びなんだと思う。

＊

妻が自殺して、この9月で1年がたちました。この1年、僕がなんとか生きてこられたのは、漫画家の山野一さんをはじめとする友人たちの存在あってのことだった。最愛の妻を失って、天涯孤独な気持ちでいた。でも、僕はひとりじゃなかったのだ。友人たちは時に優しく、時に厳しく、僕に接してくれた。そこには確かに人間を信じられる要素があった。信じられるかぎり、生きられると思った。

＊

本書の企画を通してくれて、当初へろへろの僕の尻(しり)を叩いて書くほうへ、つまり生きるほうへナヴィゲートしてくれた、飛鳥新社の担当編集者である赤田祐一さんに深く感謝しています。僕が途中何度もスランプに陥ったときも、決して見放すことなく辛抱強く待っていてくれ、僕のつたない原稿につねに的確な指摘をしてくれたからこそ、本書は出来上がったのでした。

「早紀さんは、小生と仕事をしろと、生前言っていたと聞きました。その言葉を信じて、執筆がんばりましょう」（赤田さんから執筆当初に届いたＦＡＸより）

僕は、早紀の遺志に従うように、本書に取り組んだのだった。

＊

最後に、妙齢にさしかかった女性たちに言いたいことがあります。それは、「可愛いおばちゃんになれ」ということです。ねこぢるも早紀も、「ぜったいおばちゃんにはならない。おばさんになるくらいなら死んだほうがいい」という考えを持っていました。

でも、人間は、容姿、体型、実年齢で決まるものではありません。やはり「心」だと思うのです。生きていればきっと、ささやかな喜びがあります。

きっと、「生きていてよかった」と、思えることがあります。

だから決して歳をとることを恐れないでほしいのです。

吉永嘉明

２００４年10月16日

文庫版あとがきにかえて

首を吊ってみた。ドアノブに縄をかけ、自身の体重を利用するやり方で。すると、スルスルッと締まって、鶏のような声を一声出したらあっと言う間に息ができなくなっていた。その瞬間、自律神経に「ヤバイ」という意識が走った。あわてて縄に指を入れ、締まりを緩めた。

ここのところいろいろな意味でスランプだった。というより、妻が死んで重症の鬱病等の精神疾病を抱えるようになってもうおよそ5年がたつ。その間、自室から一歩も出られない状態から少しずつ精神の狂いが緩和され、経済上の理由により2年前から出版の仕事に復帰した。売れっ子でもなくブランクがある僕のような者にもまだ、執筆を勧めてくれる編集者もポツポツいた。いや、出版大不況のこの時世、単行本の企画が数冊通っているだけでもある意味恵まれているのかもしれない。

とはいえ、どうしても思いどおりに仕事ができない。以前のような活動的で生産的な状態になれない。雑誌の仕事をあまりしていない（したくないのではなく、営業していない）ので日銭がなく、携帯電話やガス、電気などはしょっちゅう止まっている。

「一刻も早く復活しなくては」

僕はあせりにあせり、思い悩み、鬱が加速し、世を悲観するようになっていった。鬱病などは多少症状が軽減はされても、決して根本的に改善するものではなく（鬱が薬物治療で一時的に楽になることを寛解するという）、かつての僕に戻るのは絶対に不可能である、という自明のことをなかなか認められなかった。

そこで、しょっちゅう絶望し「死にたいなぁ」という気持ちになった。

しかし、唯一、友人と会って話をしている時だけは、生きていることを実感できたし、心も華やぐ。テレビは見ない、新聞もインターネットも見ない僕にとって、そこが唯一の社会との接点だった。家に帰ると、またひとり、床に横になってシジフォスの神話に思いを馳せ延々と自分が生きていることの意味のなさに思考を巡らせ、逃避的妄想が頭の中でループした。

そして、首を吊ってみた。本気ではない。本当にそれで死ねるのか実験してみたのである。

その結果、物理的には確かに簡単に死ねることがわかった。恥ずかしながら、恐怖も感じた。

そして、僕が今自死したら、友人たちはどういう気持ちになるだろうか、と想像してみた。

大局的に見れば、僕などが生きようが死のうが、世界はなにも変わらない。どうってことない。しかし、自己体験とダブらせて友人たちの気持ちや、果ては読者の人たちの気持ちを

想像すると、僕が自死することは、やはり罪深いことだと思えた。

本書が単行本で出た際、まず僕に違和感をもたらしたのは、部数の割には多くくる読者の反応だった。そのほとんどが投げ込みの葉書ではなく、封書による長文の手紙であり、そのうちの9割が若い女性からだった。

そのうちの半数が僕の心理に理解を示し、残り半数は「あなたはわかっていない」という内容だ。そして特記すべきは、ほぼすべての手紙が自殺した妻に感情移入しており、妻の気持ちがよくわかる（肯定できる）という主旨なのだ。

確かに僕も、妻の思想的背景から具体的生活スタイルまで克明に再現している。美化はしていないつもりだが、その存在を認め、評価している。

それにしても、愛する者にデスマスクをみせるという極めてわがままな行為をとった妻に対して理解が有り過ぎるのだ。

つまり、自殺遺族の書いた「死なないでくれ」という内容の読者の多くは、できれば死にたい人たちだったのである。そう、僕の妻のように。そして、僕のつらい気持ちをしんしゃくしてくれてはいても、あくまで妻を正当化しているのだ。もっというと、妻のようになりたいというのである。僕が苦しんだことにより、その死は理想的な形となったようなのだ。

この反響は、僕の心を大いに動揺させ、考え込ませた。僕にはなかった自殺の哲学がここにはあった。だから僕も、ガラにもなく哲学的に生きるということを考えてみた。何度も何度も。そして、考えに考え詰めていくと、いつも同じ結論に至った。それは、恐ろしいことに読者からの手紙に同調するかのようなものだった。

「死にたかったら、死んでもいい」

そうなってしまうのだ。この時に僕は、妻をはじめ手紙を送ってくる読者の人たちの気持ちを少し理解したのだろう。だが……。

世界中でたったひとり……そんな気持ちには、誰もが一度はなるだろう。そして、前向きに生きている人たちと自分は人種が違うのだと。

だけどそれはきっと違う。人種はひとつだ。みんな楽に生きているわけでも厭世観がないわけでもないのだ。追い詰められている人だっていくらだっている。しかし、その中の多くは、必死に人生をサヴァイブするほうを選択しているのだ。これは単に生存本能だけのためではないだろう。理屈では説明しがたい「生きる理由」がきっとあるのだ。

人はみななんらかの問題を抱えている。傷つきやすく、壊れやすく、この一日を、日々を

思いどおりに生きるのは至難の業だ。だけどそれでも大半の人は力をふり絞ってその日、その日をなんとか乗り越えている。ギリギリなのは自分だけではない。世界中がギリギリなのだ。そして、そんな人類は「生きている」というだけでどこか精神的に連帯している。世界中でたったひとりなんてありえないんだ。

たとえその人が疎外感に悩み、自殺願望を抱えていたとしても、生きている以上、どこかしら僕等とも繫がっているハズだ。「私だけが……」という自殺願望者が陥りやすい思考の穴は、ちょっと厳しい言い方だが、すべてこれ被害妄想なのだろう。

最後になるが、確かに生きるのはつらい。それは認めよう。だが、愛する人に死なれるのは、きっともっとつらい。だから今、僕は生きている。

「死なれるとつらいんだ」

この感情をどうか理解して欲しい。

２００８年８月

吉永嘉明

解説――掟破り、ということ

春日武彦

自分にとって大切な人が、しかも妻を含めて、次々にこの世を去って行ったとしたら、これはかなりのダメージを心に受けることだろう。おまけにその死が若過ぎ、自殺であったとなると。

そんな事態になったら、おそらく自分が何か不吉なものや禍々しいものを発散しているかのように感じるのではないだろうか。死の縁をわざわざ歩きたがるような人を、向こう側へ突き落としてしまうような邪な要素を自分が備えていると感じるのではないだろうか。あるいは、自分が不幸を招き寄せる体質なのではないか、と。普通、こんな目に遭う人物なんて、滅多にいないのだから。

実は不幸の理由を、わたしは知っている。本文を読み進めるうちに、すぐに思い当たった。簡単な話である。著者（以下、Yと略す）がこんな運命に陥ることになったのは、わたしのせいなのである。

わたしはYと一面識もない。共通の知人も（たぶん）いない。すなわちYと当方とは接点がない。ただしこちらは彼の仕事を知っている。彼が作った『危ない1号』を読んでいるからである。当時勤めていた精神病院の医局に、なぜかこれが転がっていたので、好奇心半分に手に取ってみたのである。そしてクズみたいな本だと思った。志が低く、屈折した思い上がりが充満し、反社会的であることを自由や純粋さと履き違えているようなゴミ雑誌であった。プライドばかりが高く、しかし才能は乏しく、責任転嫁の得意な薄汚い若者の苛立ちに迎合するような安っぽい雑誌であると思った。おぞましいことこの上ない。洒落にもならないチープ感と虚勢とが、下卑たオーラとなって頁のあいだから悪臭のように漂い出てくるかの如きであった。

こんなものを作ったり書いたりする奴は、品性下劣な人間であると心の底から思った。わたしは、たまらなく不快であった。冗談抜きで、こんな本を作った奴に災いあれと呪ったのである。本気で、不幸が襲いかかりますようにと念じたのであった。

触るのも汚らわしいようなウンコ本であるから、呪いを掛けたあとはさっさと記憶から消

し去るように心掛けた。そうしておよそ十年が経ち、わたしは自分の呪いが本当に効力を発揮していたことを知ったのである。したがってYの不幸はわたしの力に依るものであるが、さらに遡って考えれば、彼の不幸は自業自得なのである。わたしは彼に同情をする気はない。ついでながら、テクノ／トランスも大嫌いである。

Yの周囲にいて、早々と彼岸へと旅立ってしまった三人は、共通したトーンを備えている。なるほどYから見れば、才能をきらめかせ、強烈な個性に彩られ、衆愚に迎合しない気骨を持ち、けれどもきわめて繊細で傷つきやすい魂の持主たちということになるのだろう。所詮、澁澤龍彦を読むことで自分の精神が高貴であると自分に言い聞かせているようなレベルであろうと、やはり眩しい存在ということだったのであろう。サラリーマンを、その画一的なスーツ姿ゆえに内面もまた唾棄に値すると決めつけるような類の底の浅い精神性しか持ち合わせていなくとも、ランボオの末裔みたいに映ったのであろう。

彼らは、死に魅惑されていた。たとえ死を恐れようと、それ以上に死へ惹きつけられていた。

なぜ死は魅力的なのか。最強のカードであり、多くの人たちをうろたえさせるからである。ただし、死は誰にでも訪れる。死なない人間はいない。死は月並みであり、たとえどんな死

に方をしようと「死」そのものは凡庸である。どうして気取った人たち、自らを精神的な貴族と任じているような人たちは、かくも凡庸なものに固執するのか。そもそも死は生理現象の一環であり、そうした意味では汗や口臭や垢や便の仲間なのである。そんなものを特別扱いする心情が分からない。

自殺をする人たちを観察していると、彼らの動機は結局のところ二つであることが分かってくる。すなわち、《逆上》と《うんざり》である。前者は頭に血が上った状態で衝動的に行われる。後者は、この世の中や人間そのものや自分自身に心底幻滅した挙句の行為である。したがって両者が合体することもある。

彼ら三名は（そしてYも）、実家の家族内に歪な心性が潜在し、そうした家庭で育ったことによって、自分だけではコントロールのつけようがない怒りや自己嫌悪や空虚感を自身に内包してしまった気配がある。そのような観点からは、彼らは生まれながらの被害者的な側面もあるのかもしれない。傲慢さや傍若無人なトーンの背後には、深い「よるべなさ」や違和感や絶望感が潜んでいたに違いない。彼らは認めたがらないだろうけれど、家族への反感や怒りと同時にそのような感情を持ってしまった自分に対して罪悪感を覚え、それがために自身を持て余してしまう部分があったのかもしれない。

死は凡庸である。だからこそ、彼らは死に寄り添うとき、本音の部分において寛げたので

はないのか。なぜなら、もはや虚勢を張らなくても良いのだから。誰にとっても前代未聞であるのに、呆れるばかりに退屈なしろものが死なのである。自分自身を持て余し、特別であろうとすることに疲れたとき、究極の凡庸に飛び込んでみたくなるのも無理からぬ話なのかもしれない。

ところでYは、物故した三名に比べれば遥かに凡俗である。だからこそ、コンビニで働いてでもこうして生きながらえている。凡庸さは生を肯定したがると同時に、死が凡庸の極みであるという事実はまことに興味深いが、Yがその両極をバランス良く携えていたからこそ、精神的に不安定な三人は彼の周囲に集まって来たのだろう。実際、Yはろくでもない本を作りジャンキーになりかけているボンクラであるが、優しい。善意があり、誠意がある。ウエットで、（気恥ずかしい位に）ロマンチストである。『危ない1号』と、本書から窺えるYの人柄とはしばしば繋がり難いように思えてしまう。だがその奇妙な併存の加減こそが、三名にとって気の休まる存在だったということなのだろう。

Yは、案外と不器用で立ち回りの下手な人物に感じられる。まあ小賢しい男であったならば三名は直感的に毛嫌いしたに違いないし、わたしから呪いを掛けられるような隙も見せなかったであろう。本書のような情けない物語を綴ったりもするまい。彼の人柄ゆえに三人は近付いてきて、やがて彼らは《逆上》だか《うんざり》だかで自壊していった。おそらくY

の存在が少しばかり自壊の速度を遅らせ、才能を発揮させる触媒として作用したことだろう。だが結局は死へと突入し、Yはどこかでそれが自分の責任であるかのように感じている。それは錯覚である。Yに悪い部分はない。問題があるとしたら、中途半端な鬼畜編集者であったがゆえにゴミ雑誌を世に出し、読者であるわたしから呪われてしまったことだけであろう。

本書は、いったいどのように読まれるべきなのか。背徳風味のボリス・ヴィアン的な青春物語としてか。パーソナリティーに問題を抱えた人たちの症例報告か。ある種のカルチャーにおいてはスターであった人たちにまつわる内幕話か。それとも、愛する人たちを失った男による慟哭（どうこく）の手記か。

そのどれであっても、本書は詰めが甘く「ぬるい」。正直なところ、金を取って他人に読ませる水準の文章なのだろうかと首を傾げたくなる。Yはドラッグで脳が萎縮しているのではないか。それとも、もともと駄目人間なのか。たぶん、両方とも正解のような気がする。ただし、注目すべきは、この本に限っては卑しげな雰囲気がないことであろう。自己憐憫（れんびん）にふけっていても、泣き言を述べていても、苦笑したくなるようなつまらぬ正論を語っていても、とにかく無防備で正直である。

本文にこんな箇所がある。

本書の原稿のダイジェスト版をある出版社の女性編集者に見せたことがある。彼女は「私は早紀さんを知りません。そういう他人の立場から言うと、この原稿に書かれている早紀さんを好きにはなれないですね。オヤジに依存しバブルに踊り、生きにくくなったら死んじゃう。はっきり言って同情できません」

わたしも女性編集者と同意見である。しかしYは記す、「女性編集者が冷静でいられるのは『愛』がないからだ」と。

ここで愛を持ち出してしまったら、もはや「ああそうですか」としか答えようがないではないか。まともな物書きであったなら、愛などという身も蓋もない言葉は持ち出すまい。あの三人が死という「掟破り」を持ち出したように、Yは愛という「掟破り」ですべてを肯定しようとする。そのなりふり構わぬところに、本書の意味はあるのかもしれない。言い換えれば、愛の無力さと盲目ぶりとがここに描かれているということになろうか。そのように考えてみれば、なるほど本書には予想以上の価値があるのかもしれない、『危ない1号』とは違って。

——精神科医